

研究紀要

1983

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

埼玉県における古墳出土遺物の研究 I 1

—鉄鎌について—

小久保 徹・浜野 一重・利根川章彦・山本 植
高橋 伸信・田中 正夫・岩瀬 譲・齋瀬 芳之

関東における後期弥生集落の一様相 75

—複数の炉を持つ住居をめぐって—

井上 尚明

埼玉県出土の鉄滓と鉄塊 101

高塙 秀治・桂 敏・高橋 恒夫・村上 雄
佐々木 稔・村田 朋美・伊藤 燕

埼玉県における古墳出土遺物の研究 I

—鉄鎌について—

小久保 徹・浜野 一重・利根川章彦・山本 穎
高橋 好信・田中 正夫・岩瀬 譲・瀧瀬 芳之

はじめに

第1章 埼玉における古墳兼造状況の概観（岩瀬、高橋、利根川、山本）

- (1) 忍野地方 (2) 大里地方 (3) 秩父地方 (4) 比企地方 (5) 県南・県東地方 (6) 入間地方

第2章 埼玉における古墳出土の鉄鎌の基礎的分類と年代観（田中・瀧瀬）

- (1) 基礎的分類 (2) 鉄鎌の変遷 (3) 県内出土鉄鎌各期の年代

第3章 鉄鎌に関する諸問題

- 1 鹿島古墳群出土の鉄鎌について（田中）
- 2 横穴式石室における鉄鎌の出土状況について（小久保）
- 3 古代の文献にあらわれた弓矢（浜野）

付：埼玉県における鉄鎌出土古墳一覧・文献一覧

はじめに

埼玉県内では現在までに 500 基をこえる古墳が発掘調査されているが、その研究については必ずしも調査数と比例して進んでいるわけではない。特に副葬遺物に至っては土器類やその他の一部の遺物を除いてはあまり考察の対象になっていない。これは研究者の興味・関心をひかないとまではなく、むしろ遺物そのものの基礎的研究が停滞していることに原因がある。そこで共同研究対象として古墳出土の副葬品のうち普遍的に出土し、数量も多い鉄鎌を取り上げることにした。第1章では古墳の地域的背景をつかむために県内の古墳を概観した。第2章では報告書に記載された実測図を集成し、分類と編年を示した。第3章では鉄鎌に関する諸問題を取り上げた。第1～3章の引用・参考文献は付篇の文献一覧に一括した。

第1章 埼玉における古墳築造状況の概観

埼玉の古墳の鉄鎌をめぐる問題の叙述に入る前に、埼玉という地域の独特の古墳分布・築造状況について述べておこう。

昭和40年段階では、埼玉には3105基の古墳の所在が確認されていた。これらについて、既に、埼玉県教育委員会が小地域別に分布調査・発掘調査の概要を整理している（埼玉県教育委員会 1956・1957・1959・1960・1961・1963・1964・1965）。

また、関東地方全体を扱った古墳の概観でも、主要な古墳が取り上げられたことがある（甘粕・久保 1966、甘粕 1970、塙野 1979、柳田他 1980など）。埼玉一県レベルの概観や論考、一覧表も現在までに何度も発表されている（田口他 1975、塙野 1979・1980、読売新聞社浦和支局 1979、柳田他 1980、吉川他 1981、埼玉県 1982など）。また、比企地方を中心とした金井塙良一氏の特色ある研究もある（金井塙 1967・1975・1979aなど）。

本章では、これらの叙述と大幅に重複し、場合によって説明の省略も行なっているが、近年の発掘調査の成果と共に、諸先駆の指摘に学び、古墳の推定年代もできるだけ新しい研究によって記述する方針である。

叙述の方法としては、埼玉をいくつかの小地域に便宜上分割し、小地域ごとになるべく年代の古いものから古くようにつとめた。古墳の年代は原則として通説に従っておいたが、多少古く見ることができるものについては年代を引き上げているものもある。年代の表記は鉄鎌の年代比定と矛盾することのないようにやや年代幅をとって半世紀を単位として記述し、必要に応じて新古の区別を明記することにする。

(1) 児玉地方

児玉地方は、埼玉県の最北部に位置し、神流川・身鶴川（小山川）扇状地が形成されている。扇状地は、洪積扇状地と冲積扇状地に分けられ、前者は本庄台地を形成し、後者は水田耕作適地を形成している。また、それら地形の形成過程において、半島状に突き出す児玉丘陵・松久丘陵を分断し、生野山・大久保山・諫訪山・山崎山が存在する。河川は、西より、神流川・女堀川・身鶴川・天神川等が北東流し、神流川は利根川と合流する。

児玉地方は、県内では最も古墳の多い地域である。その児玉地方においての発生期の古墳として、郡内最古とされる長坂聖天塚古墳（菅谷・坂本 1975）、千光寺5号墳（増田 1975a・b）、安光寺2号墳（増田・水村・中島 1981）、前山1・2号墳（小久保・柿沼 1978）、金瀬神社古墳、鳶山古墳（鈴木 1981・田口他 1975）などがあげられる。長坂聖天塚古墳は、児玉郡美里村と大里郡岡部町とにまたがる山崎山丘陵に位置する直径50m、高さ5mの円墳で、小山状の自然地形を利用し、1m程の盛土をして整形されている。埋葬施設は粘土上構3、木棺直葬3の計6基が検出された。遺物は、波文鏡変形方格規矩鏡、珠文鏡、刀子、有孔円板、直刀をはじめ多数の玉類や鉄片が検出されている。千光寺古墳群、安光寺古墳群は、ともに山崎山丘陵に位置する諫訪山古墳群の一支群として考えられている。千光寺古墳群は、昭和48年の調査の結果、限定された一地域から方形周溝墓4基、

方形台状墓1基、帆立貝式前方後円墳1基、円墳3基が確認された。5号墳は、2基の方形周溝蓋上に構築されており、平面形は「コ」の字形の半円形を呈し、内径30mである。溝内から和泉期の高杯が検出されている。安光寺古墳群では、方形台状墓1基、円墳1基が調査された。2号古墳は、半円形の周溝を有し、内径27m、外径32mである。埋葬施設は、粘土椁であり、副葬品として直刀、剣、鉄鎌、鉄斧、鍔、白玉、ガラス玉が検出されている。墳丘、周堀内からは、和泉期の高杯、壺の破片が出土している。千光寺古墳群、安光寺古墳群とともに方形台状墓を伴い、古墳成立期の格好な資料である。前山1、2号墳は、大久保山丘陵に位置する。浅見山古墳群の一支群、有勝寺古墳群にある。1号墳は、直径約40m、高さ5mの円墳である。2号墳は、1号墳の東方約50mにあった直径約30mの円墳で、墳頂から粘土椁1基が検出された。副葬品には、刀子、鎌、鍔、鍔などがあり、棺外からは劍が検出された。また、墳丘のトレンチ内からは小形壺、壺底部、ミニチュア土器が検出された。長坂聖天塚古墳、千光寺5号墳、安光寺2号墳、前山1・2号墳は、発生期の古墳として、5世紀前半代に比定されている。金糞神社古墳は、1980年に調査されている直径約65mの円墳である。自然地形を利用して、埋葬施設は箱式石棺であり、内面に赤彩顔料が塗られている。遺物は、石製模造品（斧形）が出土しており、埴輪は、周辺から格子叩き目やタテ方向の板目をもつものが採集されている。築造は5世紀の前半とされている。鷺山古墳は、未調査の古墳であるが、自然地形利用の直径約60mの円墳とされており、5世紀前半の築造と考えられている。

発生期の古墳に次ぐ5世紀後半の古墳としては、川輪聖天塚古墳（塩野 1973）、生野山将軍塚古墳（柳田 1964b）、白石1号墳、諫訪山古墳（出口他 1975）があげられる。川輪聖天塚古墳は、山崎山丘陵に位置する直径30m、高さ5mの円墳で、丘陵先端の自然地形を利用している。埋葬施設は検出されておらず、遺物も昭和30年、大場磐雄、金谷克己阿氏によって紹介された「壺形埴輪」2本の他、赤彩が施された土師器小破片数点のみである。築造は5世紀後半の古い段階と推定されている。生野山将軍塚古墳は、小山川左岸の生野山丘陵上に位置する生野山古墳群にある。生野山古墳群は、前方後円墳2基を含む100基以上の古墳が確認されている。生野山将軍塚古墳は、直径60m、高さ7mの円墳で、昭和34年、ゴルフ場建設に伴い他の6基の古墳とともに調査された。埋葬施設は、堅穴式石室と箱式石棺を有し、遺物は、前者から刀子のような鉄片、後者から鉄斧、鉄鎌、鉄劍が検出されている。また、墳丘から高杯（土師器）、朝顔形円筒埴輪が検出されている。5世紀後半の新しい段階の築造と考えられている。白石1号墳は、志戸川支流の天神川上流の松久丘陵に位置する白石古墳群にある。この丘陵には、白石古墳群のほか、猪俣古墳群、大仏古墳群などが所在する。1号墳は、粘土椁2基を東西に配する。遺物は、皆無であるが、墳丘内から和泉期の器台が検出されており、5世紀代の築造と考えられている。諫訪山古墳は、諫訪山古墳群の主墳で、山崎山丘陵の最高部に位置する帆立貝式前方後円墳である。全長39m、後円部径30m、前方部幅18m、後円部高さ4m、前方部高さ1mである。埋葬施設は、緑泥片岩の板石の破片が発見されていることから、箱式石棺の可能性が考えられる。また、墳丘では葺石に使用された河原石や凸帯のしっかりしている埴輪片も採集されている。築造は、5世紀後半から6世紀前半の古い段階と推察されている。

6世紀代の古墳としては、生野山銚子塚古墳、生野山16号墳（皆谷・駒宮 1973）、大御堂稻荷

塚古墳（菅谷 1970a）、北塚原 2号墳（増田 1971）、中新里諏訪山古墳、白岩銚子塚古墳（埼玉県 1982）、一本松古墳（磯崎、中村 1980）、大仏二子塚古墳、広木大町古墳群（市川・小淵・中村 1980）、庚申塚古墳（小沢 1958）、長沖古墳群（菅谷他 1980）などがあげられる。生野山銚子塚古墳、生野山16号墳は、生野山古墳群に属している。生野山銚子塚古墳は、全長58mの前方後円墳であり、後円部径37m、前方部幅31.5m、後円部高さ5m、前方部高さ4.2mである。埋葬施設は不明であるが、竪穴式石室と考えられており、墳頂部には埴輪片が散乱している。築造は、6世紀の前半と考えられている。生野山16号墳は、昭和47年に調査されている。全長52mの前方後円墳で、埋葬施設は片袖型横穴式石室を有し、前庭部から土器類、埴輪が検出されている。6世紀前半の古い段階の築造と推定されている。大御堂稻荷塚古墳は、本庄台地に位置している大御堂古墳群に含まれている。昭和42年に調査され、直径24.6mの円墳で、袖無型横穴式石室をもつことが判明した。副葬品は、直刀、刀子、鐵鎌、耳環などが検出され、形象埴輪、円筒埴輪も検出されている。北塚原 2号墳は、神流川流域右岸に位置する青柳古墳群の一支群、北塚原古墳群に含まれる。青柳古墳群は（菅谷・増田・駒宮・今泉 1968）、総数240基以上にもなり、支群（古墳群）はその立地から3つに分類されている。第一は、神流川第二段丘（水田面）の城戸野古墳群、海老ヶ久保古墳群、第二は、神流川第一段丘（段丘沿い）の十二ヶ谷戸古墳群、二の宮古墳群、北塚原古墳群、南塚原古墳群、第三は、白岩丘陵上の白岩古墳群である。北塚原 2号墳は、小型の袖無型横穴式石室を有し、副葬品として須恵器が検出されており、神流川右岸に横築された最古の横穴式石室とされ、6世紀前半の新しい段階の築造と考えられている。なお、青柳古墳群は、6世紀以降の古墳群とされている。中新里諏訪山古墳は、青柳古墳群の北側に位置する前方後円墳である。墳丘の主軸はほぼ南北に向き、全長42m、前方部幅14m、高さ2m、後円部径22m、高さ3.5mである。埋葬施設は、片袖型横穴式石室であったといわれ、馬具、直刀、勾玉、切子玉、須恵器などが検出されたといわれている。なお、現在墳丘には埴輪片や須恵器片などが見られ、6世紀後半の古い段階の築造と考えられている。白岩銚子塚古墳は、青柳古墳群の一支群、白岩古墳群に属する前方後円墳である。全長46m、後円部径28m、高さ6m、前方部幅39m、高さ3.5mであり、現状で周囲跡、葺石、埴輪などが確認されている。埋葬施設は、形態が明らかではないが横穴式石室と考えられている。6世紀後半の築造と考えられている。一本松古墳は、猪俣古墳群に含まれる直徑27m、高さ2.5mの円墳である。埋葬施設は、胴張りを有する横穴式石室で、副葬品は、直刀、刀子、鐵鎌、須恵器などが検出され、6世紀後半の築造とされている。大仏二子塚古墳は、大仏古墳群に含まれる前方後円墳で、かなり破壊されているが、全長43m、後円部径22m、高さ4.5m、前方部幅18m、高さ5mである。埋葬施設は、横穴式石室であるが形態は不明である。遺物は、形象埴輪、円筒埴輪が多数検出されている。築造は6世紀後半から7世紀前半と考えられている。広木大町古墳群は、松久丘陵の裾から国道254号線を挟んだ微高地に位置し、西側の古墳は小山川の河岸段丘上にある。昭和49年の調査では、調査範囲内に24基の墳丘を持つ古墳が確認され、うち16基を調査し、新たに発見された古墳跡17基と合わせて33基の発掘調査を行なった。墳形は、前方後円墳の8、9号墳以外は円墳である。埋葬施設は、全て横穴式石室で、8、9、15号墳は袖無型石室で、3号墳は胴張りを有するものである。石室の側壁、奥壁ともにほとんどが河原石を使用した小口積

や模様と称されるものである。昭和52年の調査は、古墳跡が多数確認されており、調査地内では51基の古墳の発掘調査を行なった。石室は、袖無型と胴張り型の2種類があり、埴輪は、ほとんどの古墳から出土しているが、いくつかの終末期の古墳には見られない。石室の遺物は点数が少なく、年代基準となるものも少ないが、古墳群の築造は、6世紀後半から7世紀後半までと推察されている。庚申塚古墳は、小山川右岸の台地に位置する秋山古墳群に含まれる。秋山古墳群は、約80基の古墳で形成されていたが、現在では38基が残っているにすぎない。昭和38年に調査された庚申塚古墳は、直径16m、高さ5mほどの円墳で、墳丘はかなり削られている。墳丘には河原石の葺石がみられ、埴輪片も検出された。埋葬施設は、大型の両袖型横穴式石室である。遺物は、直刀、鉄鎌、馬具、金環、勾玉、管玉、丸玉などが多く検出されている。6世紀後半から7世紀前半の古い段階の築造と考えられている。長沖古墳群は、児玉丘陵の北側の台地を中心として分布している。また、古墳群の西には谷を隔てて高柳古墳群が存在している。昭和55年までの調査では、両古墳群合わせて157基が確認され、小山川に沿って南北0.5km、東西1.5kmの範囲に細長く分布している。昭和51年から54年にかけて都市計画事業に伴う発掘調査が行なわれ、長沖古墳群の性格が明らかになってきた。主要古墳としては、5基の前方後円墳が知られ、墳丘をよく残すものとしては、墳丘の長さ37mの十兵衛塚古墳と、帆立貝式前方後円墳で墳丘の長さ26.3mの8号墳がある。調査の成果によると、古墳群の成立は14号墳や34号墳から検出された土師器や埴輪から5世紀後半と見られているが埋葬施設は明らかではない。6世紀に入ると古墳の築造は急増し、埋葬施設は、まず腰帶的要素の強い横穴式石室や箱式石棺をとり、横穴式石室の出現は82号墳からである。古墳群の築造は、5世紀後半から7世紀後半にわたるものと考えられている。

7世紀代、または7世紀から8世紀代の終末期古墳としては、四十塚寅穂古墳(田口他 1975)、御手長山古墳(小川・長谷川他 1978)、塙合古墳群(菅谷 1969b)、下野堂古墳群(並木 1976)、塙本山古墳群(増田・小久保 1977)があげられる。四十塚寅穂古墳は、大里郡岡部町に所在し、かつては80余基の古墳により四十塚古墳群を形成していたものと思われるが、現存するものはごくわずかである。寅穂古墳は、全長51mの前方後円墳で、後円部径26m、高さ3m、前方部幅34m、高さ3.5mである。埋葬施設は、横穴式石室と考えられている。築造は、7世紀前半と考えられている。御手長山古墳は、本庄台地北西部に位置する小島古墳群に含まれる直径42m、高さ6.5mの円墳である。埋葬施設は、弱い胴張りがある横穴式石室で、石室内部から大刀、柄頭、棒状金具、鉄鎌、小札、鞍具、飾金具、留金具が検出されている。また、墳丘からは、家形埴輪、人物埴輪、円筒埴輪、須恵器などが検出されており、7世紀前半の古い段階の築造と考えられている。なお、古墳群の築造は、5世紀から7世紀前半にまで及ぶものと考えられている。塙合古墳群、下野堂古墳群は、小島古墳群と同じローム台地上に所在する。塙合古墳群は、通称百八塚ともいわれていて、大正期には60余基の古墳が存在していたが、近年はほとんどが削平されてしまっている。昭和42年、4基の古墳の調査が行なわれ、埋葬施設は横穴式石室であり、築造年代は、7世紀代と考えられている。下野堂古墳群(旭古墳群)は、古墳時代全般にまたがる墓域である。昭和49年から50年にかけて調査が行なわれ、方形周溝墓13基、円形周溝墓1基、円墳1基、方墳1基、住居跡1軒と古墳跡10基、墳丘及び横穴式石室の残存する古墳2基が検出された。古墳は、7世紀から8世紀前半の

古い段階に築造されたものと推定されている。塙本山古墳群は、大久保山に所在する浅見山古墳群の一支群である。塙本山古墳群は、大久保山南面にやや独立する丘陵(通称中山)にあり、西山、中山、東山に大別される。古墳数は170基以上ある。昭和49年、50年に古墳群の一角の28基の古墳が調査された。このうち1号墳、12号墳が最大級のものであった。埋葬施設は、模様積みの横穴式石室が大部分であり、埴輪は2基の古墳(1号墳、15号墳)のみ検出された。古墳群は5世紀以前の方形周溝塚と、6世紀後半から8世紀前半の古い段階にかけての古墳によって構成されている。なお、塙本山古墳群では、丘陵の最上段、中段、下段において3~4基のグループで構成されており、南面の標高79m以下(下段)に7世紀後半の古い段階と考えられる古墳が分布し、7世紀後半でもその半ば頃に編年されるグループが79mライン以上(中段)に立地し、同一標高上をとりまいっている。そして、8世紀代のものが上段に立地し、尾根から北斜面に分布しているという終末期古墳の在り方が報告されている。

また、昭和58年の夏に秋山古墳群中の秋山諫訪山古墳が、菅谷浩之、騎宮史朗阿氏によって調査された。その結果、秋山諫訪山古墳は、全長58m、後円部の高さ7mの前方後円墳であり、河原石乱石積みの袖無型横穴式石室を埋葬施設とする。勾玉、須恵器片、鐵鎌片を出土しているが、埴輪は確認されていない。立地、墳形、石室形態等から6世紀前半代のものと考えられる(菅谷浩之氏御教示)。

(岩瀬 譲)

(2) 大里地方

大里地方は利根川・荒川によって形成された妻沼低地・荒川低地の沖積地と比企丘陵の北側に位置する江南台地と荒川を挟んで対峙する櫛塗台地の台地部に大別される。

大里地方には発生期の古墳として、諫訪山丘陵上に存在する千光寺5号墳・安光寺2号墳(児玉地方にて詳述)の他に、昭和57年、菅谷浩之・坂本和俊氏らの墳丘再測量調査によって明らかにされた塙古墳群中の2基の前方後方墳があげられる。従来、塙古墳群は2基の前方後円墳を含む18基からなる6世紀前半代の古墳群として考えられていた。しかし、古墳の形態・古墳群の構成・生成基盤としての可耕地等から4世紀半から5世紀前半の新しい段階の時期が考えられている(坂本氏御教示)。このことにより県内における発生期の古墳について新たな問題提起がなされた。

5世紀後半代の古墳としては、熊谷市に存する鎌塙古墳(寺社下 1981)と横塙山古墳(増田 1971a)があげられる。鎌塙古墳は、昭和55年の発掘調査によって、良好な埴輪列と二ヶ所の古墳祭祀跡を有する全長42mの帆立貝式前方後円墳であることが明らかにされた。埋葬施設は削平され検出されなかったが、竪穴式石室が推測される。古墳の時期については、2ヶ所の祭祀跡より出土した須恵器台・高杯・土師器杯・高杯及び榛名ニッ岳火山灰(F A)等から5世紀後半の新しい段階が考えられている。鎌塙古墳を含む中条古墳群中には、その他に帆立貝式前方後円墳である女塙1号墳(寺社下 1983)や直徑30m前後で浮石質角閃石安山岩の切石を使用した胴張り型横穴式石室を有する大塙古墳(寺社下 1983)など20基以上の円墳が存在する。古墳の築造は5世紀後半の新しい段階から7世紀代に及ぶと考えられている。横塙山古墳は、全長30mを測る前方後円墳で、前方部の発達が少ない墳形を呈することや後円部周縁内から出土した朝顔形円筒埴輪に横ハケを有することから5世紀後半代の築造が考えられている。

6世紀前半代に入ると荒川流域に古墳群の築造が開始される。荒川左岸の河岸段丘上の花園町小前田古墳群がその例である。当古墳群は、昭和28年、東京大学考古学研究室の行った分布調査によって89基が確認され、うち3基の古墳の調査を行い、胴張り横穴式石室を検出した。昭和31年、立教大学歴史学科によって4基の古墳が調査され、2基の胴張り横穴式石室と1基の矩形を呈する玄室が検出された(中川・川村・小高・前田 1958)。昭和53・54年には、埼玉県教育委員会によつて、22基の古墳と5基の箱式石棺が検出された(市川 1980)。22基の古墳のうち石室を残すのは5基で、2基が袖無短冊型横穴式石室、他の3基が胴張り型横穴式石室である。周囲の調査では、主軸長35mの帆立貝式前方後円墳1基、1辺15mの方墳1基が検出された。他は全て円墳である。箱式石棺は砾泥片岩を用いて天井部及び側壁を作り、周囲は河原石で控積みを行っている。石棺の規模は長さ1.5×0.3mである。副葬品は金環・ガラス玉と貧弱であった。調査の結果、当古墳群は6世紀前半から7世紀後半にわたって築造されたと考えられている。

6世紀後半代になると群集墳の築造が盛行期を迎える。荒川左岸では花園町黒田古墳群・熊谷市三ヶ尻古墳群、荒川右岸では川本町塚原古墳群・江南村野原古墳群等があげられる。黒田古墳群は前述の小前田古墳群の東方に位置し、前方後円墳1基を含む16基の古墳から構成されていた。昭和49年に13基(塙野・小久保 1975a・b)、昭和52・53年に3基(鈴木・中島 1979)が調査された。調査された古墳は全て円墳で、10~25mの内径規模を有する。埋葬施設は4号墳の片袖型・17号墳の胴張り型横穴式石室を除いて全て袖無短冊型横穴式石室である。副葬品は4号墳から、鉄鎌・刀子・雲珠・鏡具・飾帶金具・轡・耳環・管玉・切子玉・丸玉・小玉、11号墳から鉄鎌・刀子・青銅製鏡・耳環・銅地鍛錠空玉・蘭玉・切子玉・管玉・丸玉・小玉が出土している。須恵器は1・3・6号墳から高杯・提壺・甕・短頸小型壺が出土している。埴輪には円筒・朝顔形・人物・帽子形・輪形・大刀形埴輪が出土している。当古墳群は石室の形態・副葬品から6世紀後半から7世紀前半に築造されたと考えられている。三ヶ尻古墳群(小久保他 1983)は前方後円墳1基を含み、かつて100基以上の古墳からなる大規模な群集墳である。昭和54・55年に埼玉県教育委員会が調査を行い、18基の古墳及び古墳跡を検出している。三ヶ尻林4号墳(やねや塚)は残存状態良好で、内径26m、高さ3mの規模を有する。調査の結果、上下二段の葺石帯を有し、中段平坦部に円筒埴輪列が一周する。埋葬施設はやや胴の張る横穴式石室である。調査した古墳には、埴輪を持つものと持たないものがあり、埋葬施設は河原石を使用した横穴式石室である。当古墳群は出土遺物から6世紀後半から7世紀にかけての築造と考えられている。野原古墳群(柳田 1962)は南に和田川を望む台地上に立地し、「踊る埴輪」を出土した前方後円墳1基と21基以上の古墳で構成される。前方後円墳は昭和38年に調査され、前方部・後円部に一つづつ横穴式石室を有することが確認された。後円部の石室は凝灰岩の切石を使用した片袖型横穴式石室で、前方部の石室は片袖型で胴張りを有する横穴式石室である。当古墳の築造年代について、亀井正道氏は7世紀前半(亀井 1978)、金井塙良一氏は後円部の石室が前方部の石室に先行して構築されたものであることを考慮して6世紀末(金井塙 1979a)と考えている。他の円墳群は立正大学考古学研究室の調査の結果(坂詰 1965)、7世紀の中葉から8世紀前半の構築と考えられている。塚原古墳群はかつて前方後円墳1基を含む20基ほどからなる群集墳である。昭和43年に3基の古墳が調査され、河原石使用の横穴式石室が検出さ

れている（埼玉県教育委員会 1978）。当古墳群中の「はまぐり塚」と呼ばれた古墳から出土したとされる頭椎大刀が長瀬綜合博物館に収蔵されている。当古墳群の築造時期は、6世紀後半から7世紀前半と考えられている。

7世紀前半では、荒川左岸で川本町見目古墳群・荒川右岸で川本町箱崎古墳群があげられる。見目古墳群（塩野 1981）では、昭和39年に2基の円墳が調査されている。1号墳は墳丘径19m、高さ約2mの規模を有する円墳で、形象・円錐埴輪片を有している。埋葬施設は袖無型横穴式石室である。銅製八角鏡を出土している。2号墳は墳丘径約17m、高さ約2mの規模を有する円墳で、周囲から円筒埴輪の細片が出土している。埋葬施設はやや胴張りを有する横穴式石室である。当古墳群は7世紀前半から7世紀後半に築造されたと考えられている。箱崎古墳群はかつて数十基の小円墳が群集しており、中でも将军塚古墳が最も大型の古墳であったが破壊されてしまった。現在約20基の古墳が残存している。昭和43年に2基の古墳が調査され（増田 1968）、2基とも共通した胴張り横穴式石室で、葺石がみられ、埴輪をもたないことが確認された。当古墳群の築造時期については、7世紀前半から7世紀後半に及ぶと考えられている。

7世紀後半では、荒川左岸黒高地上に立地する広瀬古墳群・荒川右岸の鹿島古墳群（塩野他 1972）があげられる。広瀬古墳群中には、国指定史跡の上円下方墳である宮塚古墳（埼玉県 1982）が存する。古墳の規模は、一辺20mの不整形を呈し、高さ2m、上円の高さは下方墳の上面から2.2m、上円墳の表面には葺石が見られる。学術的調査を経ておらず、資料の不充分は否めない。熊谷商業高等学校の校庭において河原石に囲まれた石室から藤手刀が検出されている（熊谷市 1963）。鹿島古墳群は100基以上からなる荒川右岸最大級の古墳群であり、東西2kmに分布する。昭和45・46年にかけて27基の古墳が調査され、總て胴張り横穴式石室であることが確認された。古墳は径11~30mの小規模な円墳で前方後円墳をもたない。副葬品は全体として極めて少なく、鐵鎌・大刀などの武器類が多く玉類の出土は皆無である。周囲や墳丘から少量の埴輪片が検出されている。当古墳群の築造時期は7世紀後半から8世紀前半に及ぶと考えられている。現在56基が県指定史跡に指定され保存されている。

（高橋好信）

（3）秩父地方

秩父地方は県西部に位置し、秩父山地に囲まれた典型的な盆地地形を呈し、荒川やその支流の横瀬川、赤平川の河岸段丘上に多くの古墳が分布している。

6世紀の後半になって秩父地方に古墳が初現すると考えられている。皆野町金崎古墳群は、荒川左岸段丘上に4基の現存する古墳から構成されている。石室が開口しており、胴張りの袖無型横穴式石室を有する（田中 1980）。築造年代については石室の形態及び環頭大刀を副葬していた古墳の存在から6世紀後半とと考えられている。皆野町の荒川右岸段丘上には、墳丘径18m、高さ5mの皆野大塚古墳が存在する。埋葬施設は袖無型横穴式石室で、残存状態もよく、秩父地方を代表する古墳である（塩野 1980、埼玉県 1982）。

秩父市の金室古墳群は荒川右岸河岸段丘上に8基の円墳が現存する。昭和31年に1基の古墳が調査され、河原石積の横穴式石室が検出された（亀倉 1957）。遺物は皆無であった。明治19年当古

墳群中の一古墳から発見された鉄鏡・青・金銅鏡・鐸・刀子・瑪瑙勾玉・玻璃小玉・滑石製臼玉・須恵器片が、東京国立博物館に収蔵されている(日本考古学会 1899)。青は堅削広板鋸留衝角付青で、関東において6世紀後半から7世紀にわたって用いられた青であり、当古墳群の築造が埴輪をもたないことを考慮し、7世紀前半代の新しい段階乃至7世紀後半代の古い段階と考えられている。

7世紀後半代の古墳群としては、秩父地方最大の古墳群である飯塚・招木古墳群・大野原古墳群・太田部古墳群があげられる。飯塚・招木古墳群は荒川左岸段丘上に立地し、昭和51年当時124基の古墳が確認されている。昭和53年に7基の古墳が調査され、胴張り横穴式石室が検出された(亀倉 1982)。当古墳群は7世紀後半の新しい段階から8世紀前半の古い段階の築造と考えられている。秩父市大野原古墳群は荒川の支流横瀬川の左岸段丘上の数十基の小円墳から構成される。明治40年に箱式石棺が検出され、藤手刀・直刀・鉄鏡・鐸が出土している。昭和30年に明治大学考古学研究室により2基の古墳が調査されている。1号墳は径12mの円墳で、埋葬施設は土体の一部を地表面下におく横穴式石室である。4号墳は径13mの円墳で、埋葬施設は横穴式石室である(大塚 1959)。古墳群の時期は、藤手刀川土の古墳の存在や1号墳の横穴式石室構築法から7世紀後半代から8世紀前半代に及ぶと考えられている。太田部古墳群は標高950mの塚山の中腹に立地する。古墳群は1基の前方後円墳と18基の小規模円墳から構成されている(埼玉県教育委員会 1957)。秩父地方に存する他の古墳群とは、その立地の特殊性から、趣を異にしている。

(高橋好信)

(4) 比企地方

比企地方は和田吉野川・都幾川・越辺川に開拓された谷によって、北比企丘陵と西部山間地、松山台地、南北比企丘陵と高坂台地という三つの丘陵台地に分割されている。

5世紀前半に北比企丘陵東北部の尾根頂部に占地する雷電山古墳(全長76m、帆立貝式古墳)と、北比企丘陵から南東に伸びる吉見丘陵南部の尾根上に占地する山の根古墳(全長65.7m、前方後方墳)が築造されるが、この2基が比企地方最古の古墳であろう(金井塚 1967、塩野他 1981)。埋葬施設は双方とも判明していないが、前者の墳頂部には方形埴輪列があったといわれる。墳丘全面に葺石が認められ、底部穿孔壺形土器が墳丘から出土している。松山台地西端の滑川村月輪の扇田1号墳(円墳、径24m)も周囲内から和泉1期の高杯・壇・甕が出土していて、5世紀前半に位置づけられよう(埼玉県 1982)。

5世紀後半に確実に作られたと見られる古墳も少ないが、松山台地東部の南側斜面に築造された野本将軍塚古墳、高坂台地の北端部に位置する諫訪山古墳の2基はこの時期にさかのぼる可能性がある。前者は全長115m、後者は全長61mの前方後円墳である。野本将軍塚古墳は、野本小学校校庭の埋め立て、忠魂碑建設等の理由で封土をかなりけずりとられたとされているが、埋葬施設が後円部墳頂にまだ残存しているらしい(金井塚 1979a)。諫訪山古墳は前方部がやや低く、あまり発達していない、一見古そなうな墳形を呈する。近傍にある諫訪山33号墳(円墳、径25m)も、周囲から外面第2次調整ヨコハケの円筒埴輪片を出土しているため、5世紀後半の築造と考えられる(若松良一氏ご教示。および、金井塚編 1970)。

6世紀に入ると、各丘陵・台地とも前方後円墳築造のピークとなる。北比企丘陵東北部では雷電

山古墳の周辺に形成された三千塚古墳群の第三支群の主墳・弁天冢古墳（前方後円墳、全長37m）、丘陵の東1kmの台地の東山古墳、楓山古墳などは6世紀前半の築造と考えてよいであろう。弁天冢古墳は埴輪列があり、周溝から鬼高一期の壹形土器が出土している。楓山古墳は鈴環・石製鏡・銅鏡などの出土が古くから知られ、全長100mに近い前方後円墳であったと考えられている。東山古墳は削平されているが、やはり、相当大規模な前方後円墳であったようである（金井塚 1979a）。

松山台地では、台地東部の古凍・柏崎古墳群中に数基の前方後円墳があるが、このうち、おくま山古墳（全長62m）、天神山古墳（現存墳丘長62.5m）の2基が6世紀前半に属する可能性がある。おくま山古墳は幅13mの周掘がめぐり、天神山古墳からは平縁内行花文鏡（彷彿鏡）が出土している（金井塚編 1968）。古凍・柏崎古墳群は比較的古相を示す、突出度の高い突帯を有する円筒埴輪を出土する古墳が多く、古式群集墳のカテゴリーでとらえてよいであろう。同様のものに、台地西部の滑川村月輪古墳群、北部比企丘陵の三千塚古墳群、松山台地北方の岩鼻台地上にある岩鼻古墳群、高坂台地の諏訪山古墳群、吉見丘陵の久米田古墳群などがある。これらは、粘土床や木棺直葬など横穴式石室採用以前の埋葬施設が知られているものが多く、青銅製鈴付腕輪や垂飾残片、馬具などを出土した諏訪山1号墳（円墳、径19m、6世紀前半末頃）は注目に値する（金井塚編 1970）。これらの古式群集墳は7世紀前半代まで築造が継続されるようである。諏訪山古墳群には諏訪山29号墳、諏訪神社古墳（後円部径27m）など前方後円墳は数基あり、高坂台地東部にも高济寺古墳がある。この3基とも、半屢ないし全屢してしまったが、50mを前後する規模は予想されてもよいであろう。これらも6世紀代に築造されたのであろうが、前半に位置づけられるかどうか明確でない。北比企丘陵から東方に伸び、吉見丘陵につながる箕輪台地にある甲山古墳（円墳、径97m）、とうかん山古墳（前方後円墳、全長75m）も大型の古墳だが、6世紀の半ばからそれ以降になる可能性が強い。甲山古墳は造り出し部をもつ可能性もある（金井塚 1979a）また、これらを取り込むようにして、円山古墳群が所在する。3基が調査されている。1号墳（径24m）、2号墳（径27m）、3号墳（径24m）の3基の円墳である。周掘はほぼ全周し、輪・輪などの形象埴輪、人物埴輪、円筒埴輪など数多くの埴輪が出土した。埋葬施設は盃掘で大半こわされていたが、2号墳から柄頭、鉄鎌、刀子、銀環などが出土し、須恵器長頸瓶・土師器壺などの出土から6世紀後半代と考えられる（金井塚 1979a）。

6世紀後半の築造になるものは、北比企丘陵では、三千塚古墳群の秋葉塚古墳（前方後円墳、全長44.5m）、長塚古墳（前方後円墳、全長37.0m）、松山台地西部の円正寺古墳（前方後円墳、全長31m）などであるが、前方後円墳築造のピークは過ぎている（金井塚 1975, 1979a）。

6世紀後半の新しい段階から7世紀前半にかけての時期は、武藏型胴張り横穴式石室および横穴墓群の成立期である。胴張り石室の最古のグループは松山台地西部南端の若宮八幡古墳（円墳、径30m）、青塚古墳（円墳、径37m）、吉見丘陵の久米田の尾根上にあるかぶと塚古墳（円墳、径28m）などである。石室はいずれも複室構造を呈する。若宮八幡古墳は遺物の出土は知られていないが、埴輪が採集されたことがある上、石室形態が古相を呈することより6世紀後半の新しい段階に築造されたとすることができよう。青塚古墳（金井塚・小峯 1964）は須恵器・大刀・小刀・鉄鎌・勾玉・小玉・金環・馬具頭を副葬し、6世紀後半の新しい段階から7世紀前半の年代をあてることが

できる。これらは下唐子古墳群を形成している。かぶと塚古墳（金井塚 1975）は2段築成の円墳で全長7mという大きな石室を持つ。玄室に円頭大刀、前室に須恵器25点などを副葬し、6世紀後半の新しい段階から7世紀前半の年代とされる。久米田古墳群に近接して占地するが、半世紀程の空白期間がある。

また櫛川上流の山間部にある小川町穴八幡古墳（円墳、径24.9m）は緑泥片岩の一枚石を使用した、方形プランの横穴式石室（複室構造、全長8m）を有し、7世紀前半の築造と考えられている（芹沢・長内 1971）。

7世紀前半にはじまり、7世紀後半まで及ぶ古墳群は数多い。松山台地東部の柏崎古墳群、台地中央部南端の附川古墳群、台地西部の下唐子古墳群・西原古墳群（金井塚・渡辺 1976）・寺山古墳群・菅谷古墳群、台地北方の滑川村羽尾の大谷古墳群・平古墳群・表古墳群（東京大学考古学研究室 1964、金井塚他 1967）、高坂台地東部の高坂古墳群、南部の毛塚古墳群、南北企丘陵東部の桜山古墳群（小久保・利根川 1981）、尾根上に散在する駒細・田木山・根平・舞台古墳群（栗原・今泉・谷井 1974a・b、水村・今井・井上 1980）、都幾川上流域山間部の山王古墳群、市の川上流域山間部の峯ヶ原古墳群、滑川上流域山間部の古里・吉田古墳群、猫谷古墳群などである。

ここに列記した古墳群にはほとんど内容のわかっていないものや、破壊のすんでしまったものもあり、築造初現期が6世紀代にさかのぼるものも含んでいる。

これらは、ほとんどが胴張り横穴式石室を埋葬施設としているが、附川・柏崎・田木山古墳群など複室構造のものを含むものと、桜山・根平・舞台古墳群などのように単室構造ばかりで、羽子板状平面プランの終末期の横穴式石室（8世紀前半）を含むものがある。

これらの古墳の中で注目すべき内容をもつものを以下に列記する。柏崎4号墳（金井塚他 1968、鈴木 1975）は銅鏡模倣の須恵器高台付壺を出土し、7世紀前半、附川7号墳（金井塚 1971）は鱗状銀象嵌を鏽に施した直刀・鉄鎌・金環・棒状金具・刀子・劔鍔車・須恵器壺等を出土し、7世紀前半、8号墳（栗原・今泉・谷井 1974b）は切子玉・小玉・金環・飾金具・直刀・刀子・鏃・鉄鎌を副葬し、周堀から須恵器提瓶・蓋を出土し、7世紀前半から後半、桜山古墳群（小久保・利根川 1981）は須恵器フタスコ型提瓶・平瓶などを出土し、7世紀前半から後半、田木山2号墳（栗原・今泉・谷井 1974b）は須恵器蓋が出土し、7世紀後半、西原1号墳（金井塚・渡辺 1976）は銅鏡・主頭大刀・鉄鎌を出土し、7世紀後半、舞台1号墳（栗原・今泉・谷井 1974c）は直刀・刀子・鉄鎌・鏃・須恵器長頭壺が出土し、8世紀前半の年代をあてられている。

7世紀以後は横穴墓も相次いで築造される。特に吉見丘陵の南北斜面の吉見百穴横穴墓群は222基が確認されている。上段28基、中段76基、下段62基が、四つの突出部に分布し、山腹斜面に直角に穿たれている。副葬品は、金環・銀環・勾玉・管玉・小玉・直刀・刀装具・鉄鎌・須恵器高壺・甕・提瓶・平瓶・台付壺などが知られ、円筒埴輪も少ながら出土している（金井塚 1975）。7世紀前半以後の形成と考えられる。吉見丘陵には、吉見百穴横穴墓群の北方に、岩粉山横穴墓群、東側斜面に黒岩横穴墓群があり、いずれも7世紀前半代が初現期になると考えられている。黒岩横穴墓群は500基を越える大横穴墓群と考えられている（金井塚 1969, 1975）。

また、北比企丘陵から西の山間部にかけては、三千塚古墳群東南部の丘陵斜面に比丘尼山横穴墓

群、滑川上流域に天神山・高根山・尾根横穴墓群、越辺川に面した南比企丘陵の南側斜面に十郎横穴墓群などがある。これらは、吉見丘陵の横穴墓群に引き続いて形成され、すなわち西方への横穴墓の分布の拡大現象の所産として、理解されている。

以上に述べた横穴墓群の分布の拡大は、胴張り横穴式石室の分布の拡大と類似した傾向を持ち、横渟屯倉管掌者の壬生吉士氏とその同族集団の移住との関連性が説かれている(金井塚 1979b)。

8世紀後半まで時期の下る古墳等は今のところ見当らない。当地方の古墳の築造は8世紀前半で終焉をむかえたようである。

(利根川章彦)

(5) 県南・県東地方

北足立・北埼玉・南埼玉・北葛飾の各郡は、荒川と利根川及び江戸川に挟まれており、古墳・古墳群の分布は荒川流域左岸及び右岸、利根川流域右岸、古利根川流域、元荒川流域として捉えることができる。

荒川流域左岸の大宮台地西端の南北に走る台地上に存在するのが川田谷古墳群である。古墳群の最南端の熊野神社古墳は4世紀後半から5世紀前半の古い段階のものとされ、県内で最も古い古墳である。径30mの円墳で、硬玉勾玉、瑪瑙勾玉、瑪瑙簾玉、碧玉算盤玉、碧玉管玉、瑪瑙小玉、石鏡、碧玉紡錘車、滑石紡錘車、碧玉巴形石製品、碧玉筒形石製品、筒形銅器そして朱小塊若干があり、他に径12cmの鏡、刀劍類、白い勾玉があったと言うが散失している。埋葬施設に関しても粘土槨または粘土床ではないかとみられる。川田谷古墳群の形成は熊野神社古墳を除けば6世紀後半から7世紀後半である(村井 1956、埼玉県 1982)。

次に統くものとして、熊野神社古墳の構築された台地の南の開拓谷を隔てたところに、睦吉古墳群の駿河山古墳がある。径32mの円墳で、周溝より和泉期の壺形土器、壺形土器と鉄鎌が検出され、これらの遺物より熊野神社古墳に次ぐ5世紀前半の古墳と考えられる(野村・赤石 1979)。

さらに、利根川右岸流域に「辛亥銘鉄劍」の出土で注目される稻荷山古墳を含む埼玉古墳群がある(埼玉県 1982など)。丸墓山古墳は径102mに達する日本最大の円墳である(塩野 1980)。通説では、5世紀後半の年代が与えられ、埼玉古墳群中最古の古墳と考えられてきたが、これを疑問視する説もあり(金井塚 1980b・cなど)、近年墳丘から採集されている埴輪を見る限りでは、稻荷山古墳より後出的である。また、この古墳を埼玉古墳群で最も新しいグループの中に含めて考える見解もある。

稻荷山古墳(斎藤他 1980)は全長117m、後円部径62m、前方部幅74mの前方後円墳である。二重の方形周堀がめぐり、西側の中堤部に方形に突き出た箇所が認められる。埋葬施設としては、砾槨(第1主体部)と粘土槨(第2主体部)が検出され、遺物として第1主体部より画文帯環状乳神獸鏡、辛亥銘鉄劍、直刀、劍、刀子、鉢、石突、鐵鎌、挂甲、勾玉、銀環、帶金具、轔(f字形鏡板付)、三環鏡、翁杏葉、素環雲珠、素環辻金具、方形辻金具、鞞、鉗具、壺鏡、鉄鎌、鉢子、施、鐵斧、碇石、第2主体部よりは直刀片、鐵鎌片、挂甲小札、方形辻金具、轔片、嫌が出土している。周堀からは、円筒埴輪・各種形象埴輪・土師器坏・壺・壺が出土し、墳丘上出土と伝えられる須恵器坏蓋、高坏蓋、高坏、壺が知られている。5世紀後半の新しい段階から6世紀前半の年代

を推定できる。

埼玉古墳群の北方に位置するとやま古墳（柳田 1967）は全長69m、前方部幅27mの前方後円墳である。墳丘裾には葦石が認められ、円筒埴輪も検出されている。埋葬施設は不明であるが、鐵製鉢が出土しており、埴輪の特徴などから見ても6世紀前半の年代を考慮できよう。

また、利根川の堤防沿いの大稻荷古墳群（栗原・小林 1974）は水田中に埋没していたもので、1号墳は径26mの円墳で、埋葬施設は縁泥片岩を用いた横穴式石室と推定され、他に円筒埴輪列が確認された。2号墳は、木棺直葬であり、直刀、輦、鐵鎌が検出された。5世紀後半の新しい段階から6世紀前半にかけてのものであろう。さらに、ほぼ同時期に属するものとして、江戸川西岸の宝珠花台地の北西端に近く、古利根川氾濫原を見下ろす洪積台上地上にある目沼古墳群の主墳瓢箪塚古墳（目沼7号墳）をあげることができる（大塚 1957、埼玉県 1982）。全長38mの前方後円墳で、明確な埋葬施設は確認されなかったが、円筒埴輪列をもち、銅鏡の出土も知られる。

以上、4世紀後半から6世紀前半の古墳をみてきたわけであるが、当地域の4世紀後半から5世紀代の古墳である熊野神社古墳・駿山古墳・丸墓山古墳は円墳であり、5世紀後半から6世紀前半と考えられている猪荷山古墳・とやま古墳・目沼7号墳は前方後円墳である。さらに、5世紀後半から6世紀前半とやや幅はあるものの、大稻荷1号墳・2号墳は円墳である。そして、5世紀後半以降の大型古墳は前方後円墳が主流であることより、5世紀後半から6世紀前半を契機として前方後円墳が出現したことが窺われる。

6世紀代の古墳には、荒川の自然堤防上に位置する戸田市南原古墳群がある。五領期の方形周溝墓・住居跡、鬼高Ⅱ期の住居跡等と共に検出されたもので、円墳跡1基・円形周溝墓3基である（塩野他 1981、伊藤 1972）。南原1号円形周溝墓は馬蹄形周溝の一部が検出されたのみで推定外径18mで、ブリッジの両側の周溝から一個ずつ鬼高Ⅰ期の壹形土器が出土している。2号円形周溝墓は外径15.5mで、周溝より底部穿孔の鬼高Ⅰ期の甕が出土し、3号円形周溝墓は外径11.5mを測り、ブリッジが造り出されており、土師器片が出土しただけである。南原1号墳は外径25mの円墳であり、周溝より円筒埴輪・人物埴輪・器材埴輪・須恵器片が出土している。

荒川流域左岸の大宮台地浦和支台の南西端に位置する白幡古墳群は4基より構成されている（庄脇・剣持他 1980）。径10~15m前後の円墳で馬糞のみの調査である。1号墳を除き2号墳・3号墳・4号墳は周溝の一部にブリッジが造り出されている。1号墳周溝より鬼高期初頭の土師器片を出土し、2号墳では円筒埴輪・人物埴輪が出土しただけであるが、埴輪より7世紀前半と考えられる。古墳群としては、6世紀前半から7世紀前半に造営されたものであろう。

古利根川と元荒川に挟まれた慈恩寺台地突端に立地する内牧古墳群の内牧塚内4号墳は、一辺20mの方墳で高さ3~4mである。埋葬施設は、粘土拂3基、木炭拂1基が検出され、周溝内よりは人物・円筒・朝顔形埴輪が大量に出土しており、下総型埴輪と武藏型埴輪が混在している。埴輪や木炭拂の下限より、6世紀前半と推定されている（中川・坂本・安藤・山形 1978）。

川田谷古墳群の南に位置する畔吉古墳群中の江川山古墳はすでに破壊されているが、径13cmの彷彿文鏡・径10.5cmの彷彿瘤竜鏡・管玉・直刀・土師器高杯片が発見されており、6世紀代の古墳と推定される（塩野 1980）。

埼玉古墳群中最大規模の前方後円墳・二子山古墳は全長135m、後円部径66.5m、前方部幅93mの規模をもつ。西側くびれ部に造り出しが認められ、二重の方形周堀をもち、船荷山古墳同様、西側中堤に突出部がある。6世紀前半以降と考えられる。鉄砲山古墳（前方後円墳、全長102m）も西側くびれ部に造り出しを有する。方形の二重周堀と西側中堤の突き出しを有すると推定される。二子山古墳・鉄砲山古墳の順に船荷山古墳に統くと考えられる。その他、中の山古墳は全長72mの前方後円墳、奥の山古墳は全長67mの前方後円墳で後円部西側に造り出しがある。瓦塚古墳は全長68mの前方後円墳で、二重の周堀をもつ。愛宕山古墳は全長53mの前方後円墳で、古墳群中の前方後円墳では最小のものである。古墳群東方の若王子古墳跡（栗原 1970、金井塚 1980b）は全長95mの前方後円墳で、角閃石安山岩と緑泥片岩による横穴式石室で、甲冑・杏葉・高杯・埴・刀劍片等を出土している。7世紀前半前後と考えてよかろう。

埼玉古墳群の陪塚的な小円墳は7基が調査されている（栗原・田部井 1975b）。1号墳（天王山古墳）は径約35mで、周堀内より人物埴輪・円筒埴輪片が出土している。2号墳（梅塚古墳）は径29mで周堀は東・西にブリッジが造り出されており、堀底の一部には粘土が貼られている。周堀内より、人物埴輪・須恵器蓋坏（第2様式初頭）、土師器壇、壺（鬼高I期）が出土しており6世紀前半の年代が考えられる。3号墳は径14.5mで周堀内より円筒埴輪片、土師器坏が出土している。4号墳は径21m、5号墳は径31m、6号墳は径25m、7号墳は径26mで、4・6・7号墳は西側の周堀、5号墳は南西側の周堀にブリッジが造り出されている。いずれも、周堀内より円筒埴輪片・土師器壺が出土しており、鬼高初頭のものと捉えることができる。また、6号墳より県指定の水鳥埴輪が出土しており注目される。

永明寺古墳（栗原・塙野 1969）は利根川に並行する自然堤防縁辺部に築造された前後方円墳で、全長78m、前方部幅42m、後円部径36m、高さは前方部及び後円部とも約7mである。後円部より河原石を用いた疊構または堅穴式石室が発見され、耳環・鉄鋸・衝角付冑・挂甲小札・直刀片・刀子片・雲珠・鞍・轡・鏡軸・鉄地金銅張紙留金具等が出土しており、6世紀前半と考えられる。近隣には毘沙門山古墳などかなり大きな古墳が數基あり、縦続的に築造されたと考えてよかろう。

大宮台地東先端の独立丘の尾根上に構築された前方後円墳の高稟荷古墳（大塚 1960）は全長75m、後円部径50m、前方部幅27mで前方部の未発達な古式古墳の様相を呈する。埋葬施設は粘土施設（粘土構）である。県南の発生期古墳とみられ6世紀前半代のものであろう。

荒川右岸の野火止台地の北東縁には根岸古墳群が位置する（塙野 1980）。全長60mの終塚古墳（前方後円墳）を中心に数基の円墳が現存する。昭和18年調査後削平された一夜塚古墳は径50m、高さ7mの円墳である。埋葬施設は木炭構で方格規矩縫・挂甲・馬具類を出土し、6世紀前半とされる。終塚古墳もほぼ同時期であろう（埼玉県 1982）。

古利根川流域の目沼古墳群は、前述の7号墳の他にもう一基の前方後円墳（2号墳）があり、その他11基の円墳で構成されている6世紀から7世紀代に及ぶ古墳群である。2号墳は江戸時代に発掘され、大正時代に再発掘され埴輪に砂岩系の切石が残存していた。10号墳（浅間塚）は埴輪列の一部が検出されている（岩井 1929）。3号墳は径12~13mで埋葬施設は角閃石安山岩の河原石による半地下式の胴張りを有する横穴式石室であり、副葬品として碧玉製管玉・水晶製切子玉が出土

している（柳田・早川・庄野 1964）。日沼 4 号墳は径 20m、5 号墳は径 16m の円墳で、埋葬施設は木棺直葬と推定される。6 号墳は径 16m の円墳で、埋葬施設は凝灰質砂岩割石の乱石積みの胸張りを有する両袖型横穴式石室である。副葬品は鉄鎌・金環・刀子・不明鉄製品が出土している（蚊爪 1968）。日沼 9 号墳は径 26m の円墳で、埋葬施設は木炭櫛をもち鈴杏葉・鉄製鏡珠の他に土師器甕を出土し、6 世紀前半代のものと捉えられる。

元荒川左岸大宮台地上の宿間古墳群（埼玉県 1982）に県指定史跡で前方後円墳の天王山塚古墳があり、全長 107m、後円部径 55m、前方部幅 62m を測る。墳丘から人物埴輪頭や円筒埴輪が採集され、石室の一部と見られる角閃石安山岩の石材が確認されている。6 世紀後半代のものと見てよからう（塙野 1977、若松 1982）。

古利根川右岸に形成された自然堤防上に鶴鳴川古墳群が形成されており、宮西塚古墳出土と伝えられる遺物がある（埼玉県 1982）。出土品は彷彿方格四獸鏡・鉄地金銅張鐘形鏡板・鉄地金銅張合金具・鉄地金銅張環杏葉・直刀片・円筒埴輪片・ガラス小玉等が保管されている。

6 世紀後半代のものとしては、利根川の堤防の南 1km に剣神社古墳を盟主とする斎条古墳群がある（埼玉県 1982）。剣神社古墳は径 40m、高さ 3m の円墳である。水田下から埴輪が検出されたことより調査された斎条 5 号墳（栗原・塙野 1964）は円墳で径 19m、高さ 1.8m である。埴輪列には円筒・朝顔花形円筒・人物・家形・馬形埴輪がみられた。埴輪より、6 世紀後半の築造と考えられる。

日沼古墳群の日沼 8 号墳は径 23~24m の円墳で 2 基の粘土櫛を有し、第 1 粘土櫛よりガラス小玉銀環、第 2 主体部より直刀・鉄鎌を出土している（横川他 1981）。

6 世紀後半新段階に属するものとして、荒川左岸の大宮台地西縁に馬室古墳群の將軍塚古墳がある（塙野 1980）。前方後円墳で全長 30m、円筒埴輪が検出された。

川田谷古墳群の川田谷ひさご塚古墳は、全長 41m、後円部径 27m、前方部幅 20m の前方後円墳である。埋葬施設は凝灰岩切石を用いた横穴式石室で、人刀・鍔・鉄鎌・刀子・馬具破片を出土し、人物埴輪・円筒埴輪も検出され、6 世紀後半の新しい段階から 7 世紀前半の所産と考えられる（柳田・塙野 1968）。

大宮台地の北斜面に位置する生出塚古墳群は前方後円墳を含む古墳群であったが、現存する墳丘は皆無である。1 号墳から 5 号墳まで調査されているが、周溝のみの調査である。1 号墳は北側にブリッジを有する径 20m の円墳で鬼高Ⅱ期の土師器を出土した。2 号墳は径 40~50m と推定され、円筒・朝顔・人物・動物埴輪等多量の埴輪が検出された。3 号墳は径 12m の円墳で、人物埴輪が 3 体出土し顔面に丹塗が施されている。4 号墳は径 12m、5 号墳は径 16m の円墳である（山崎 1980、山崎・若松他 1981）。6 世紀後半以降の築造であろう。

7 世紀代の古墳としては、荒川左岸の大宮台地北端に宮登古墳がある。規模は長径 25m、短径 20m、高さ 1.5m の円墳である。埋葬施設は、角閃石安山岩を面取りして用いた胸張りを有する横穴式石室である。副葬品は、玉類・鉄鎌・須恵器・土師器・盤等で、7 世紀前半と推定される（柳田・金井塙 1959）。

荒川左岸の自然堤防上に位置する大久保古墳群は、白銀古墳群も含めて呼ばれている（埼玉県

1982)。塙山古墳は前方後円墳で前方部を失っているが、後円部径35mである。かね山古墳は、径40mの円墳で周溝内より円筒埴輪が出土しており、7世紀前半とみられる(高山・小倉 1980)。古墳群としては、7世紀前半から7世紀後半の築造と考えられる。

埼玉古墳群の将軍山古墳も7世紀前半と考えられる全長91mの前方後円墳である。埋葬施設は横穴式石室で、銅鏡・杏葉・雲珠・銅・轡・変形文鏡・銅鈴・環頭大刀・肖片・桂甲小札・鉢・蛇行状鉄器・三輪玉・石製皿・須恵器高环等が検出されており、墳丘から円筒埴輪が出土している(柴田 1906、埼玉県 1982)。

利根川堤防近くの姿沼低地中の酒巻古墳群第1号墳は全長50mの前方後円墳で、前方部前面を除いて埴輪列を有し、馬形埴輪・朝顔形埴輪が検出された。埋葬施設は2基の横穴式石室で、胴張りを有する複室構造のものである(埼玉県 1982)。

行田市の北部を東流する星川右岸の低台地上に位置する小見真觀寺古墳は、全長112mの前方後円墳である。埋葬施設は、後円部と軸部に縁泥片岩1枚石の横穴式石室である。副葬品は、堅矧広板紙留角付背・往甲小札・鉄鏡・金環・頭椎大刀・主頭大刀・刀子・蓋付銅鏡等があり、これらより後円部石室は7世紀前半、軸部の石室は7世紀後半と考えられる(埼玉県 1982)。

小見真觀寺古墳の北に虚空藏山古墳があり、前方部のみが残存している前方部幅25mの前方後円墳である。埋葬施設は縁泥片岩の横穴式石室と推定され、7世紀代の築造と考えられる。さらに、周辺には龍山古墳・天神山古墳などが現存する(埼玉県 1982)。

埼玉古墳群北方の埋没ローム台地上に若小玉古墳群が形成されており、その中の八幡山古墳は推定径が74mの円墳で、2.5mの版築上に石室が構築されている。石室は3室の複室構造で、角閃石安山岩・輝石安山岩の六角形の切石及び縁泥片岩板石等で構築されている。出土遺物として、銅鏡・乾漆器片・棺座金具・須恵器長颈壺・夾持片・銅漆装方頭把頭・金銅装鞘尻金具・銀製弓羽金物片・釘・鉄鏡及び東国で唯一の塗漆木棺片等があり、7世紀後半代と考えられる(小川他 1980)。

同古墳群内の地蔵塙古墳は一辺28m、高さ4.8mの方墳で、奥壁と天井石が縁泥片岩、その他は凝灰岩切石による胴張りを有する横穴式石室を有する。側壁より線刻画が検出されており、鳥帽子を被った人物・弓を引いている人物・馬・水鳥・家とみられるものがある。なお、周溝が鬼高Ⅰ期の住居跡を切っていることより、7世紀後半から8世紀前半のものと考えられている(栗原 1963b)。

方墳としては、その他に県南の大宮台地に県指定史跡の方墳大塙古墳(21m×25m)がある(埼玉県 1982)。

大宮台地の西端、荒川左岸の台地上に8基の古墳で構成される中井古墳群が位置する。中井1号墳は径約20mの円墳で、周囲の東南部にブリッジが造り出されている。埋葬施設は胴張りを有する複室の横穴式石室である。副葬品は直刀片のみであるが、人物埴輪頭部・家形埴輪片が出土しており、7世紀後半から8世紀前半と考えられているが(横川 1972)、多少古く考えてよからう。

荒川左岸、大宮台地西縁の日進与野支台先端部に側ヶ谷戸古墳群が位置する。同古墳群中の台耕地塙古墳は円墳で径30m以上と推定される。埋葬施設は凝灰岩散石による阿袖型の横穴式石室で、ガラス製小玉・漆塗木製小玉・切子玉・鉄鏡・大刀・刀子を出土し、7世紀後半と推定される(柳田・三友 1973)。

同古墳群にはその他に、稻荷塚古墳・茶臼塚古墳・上之稻荷塚古墳・山王山（慈宝院）古墳・井戸古墳・中郷古墳等がある。稻荷塚古墳は径25mの円墳で、周囲は幅7mを測り馬蹄形を呈している。周囲内より、円筒・人物埴輪が出土した。茶臼塚古墳は径30mの円墳で、墳頂付近より円筒埴輪が出土した。上之稻荷塚古墳は径15mの円墳である。山王山古墳は石室のみが遺存しており、大刀・刀子が出土した。井戸古墳は前方後円墳であり、台地稲荷塚に先行するものとして、7世紀前半と推定される（埼玉県 1982）。

元荒川流域では、蓮田市門戸から馬込にかけて、7世紀前半以降と推定される円墳が散在するが、十三塚古墳（早川 1967）・さらさら3号墳（鈴木・藤原 1983）など砂岩系の切石を使用する横穴式石室を埋葬施設とするものが多い。

当地域においては、横穴式石室を埋葬施設とする古墳は、6世紀代より出現し、洞張りの石室も7世紀には出現しており、復室構造の石室は7世紀前半以降に盛行するようである。

（山本 猥）

（6）入間地方

入間地方は、北に隣接する比企地方のように丘陵が発達していないので、台地と山地に地形が二分される。台地は、大きく見れば武藏野台地の東北縁辺部にあたる。越辺川・高麗川・入間川・小畔川およびその下流の荒川により開拓された谷により、台地は分割されている。

この地域では、荒川右岸の台地東端部付近に立地する三変稻荷神社古墳（円墳、径15m）が最古である（小泉 1972c、豊野他 1981）。白銅製神獸鏡1面と石鏡1個が出土品として知られ、5世紀前半と考えられる。この周辺の仙波古墳群には喜多院慈眼院古墳（前方後円墳、長径36m）、山王塚古墳（円墳）、やや南にはなれて新河岸川沿いに、浅間神社古墳（父塚）（円墳、径36m）、愛宕山古墳（母塚）（円墳、径40.2m）があるが、時期不詳のものが多い（小泉 1972c、金井塚 1980a）。

5世紀後半に位置づけられるものは、皆無に等しいが、仙波古墳群や小畔川流域の下小坂古墳群等の中にはこの時期にあたるものもあるであろう。下小坂古墳群（小泉 1972a）は1号墳（円墳、径34m）が木炭櫛、3号墳（円墳、径30m）が粘土櫛の埋葬施設を有する。1号墳には直刀・刀子・鉄鎌・ガラス製小玉、3号墳には円筒埴輪8個体が埴籠に立てられていたのが確認された。いずれも6世紀前半と考えられる。また、群の東端部にある西原古墳（帆立貝式古墳、全長31.8m）は後円部中央に簡略化された粘土櫛をもち、6世紀前半と考えられている。前方部左側面の周囲中央部に形象埴輪がまとまって樹立されていた上、円筒埴輪・葫蘆形埴輪も出土している（甘粕・小泉 1972）。さらに東方500mにどうまん塚古墳（円墳、径24.5m）がある。棺の両端に白色粘土を詰めた木棺直葬の埋葬施設をもち、擬輪文帶変形獸列鏡・直刀・鉄鎌・挂甲・馬具類・斧頭・鉤・砥石・滑石製白玉などが副葬されていた（小山 1963）。6世紀前半と考えられる。これら4基は多少の時間差を持っていて、1号→3号→西原・どうまん塚という順序の想定もある。

越辺川右岸の坂戸台地北東部にも、6世紀前半の築造と考えられる雷電塚古墳（前方後円墳、全長52.4m）、牛塚山古墳（前方後円墳）がある（金井塚 1980a）。双方とも主体部は不明だが、円筒埴輪の出土が確認されている。やや西方に位置する勝呂神社古墳（円墳？ 径50m）もこの時期

に属する可能性がある。

さらに上流右岸の善能寺台地には多数の古墳の分布が確認されている。この中で坂戸109号墳は径20m以上の規模をもつ円墳であるが、あるいは6世紀前半代に属す前方後円墳となるかもしれない（金井塚 1980a）。また、坂戸114号墳（円墳、径20m）は粘土被状の埋葬施設が調査されている。直刀・鉄劍を副葬品にもち、埴輪・葺石施設もあり、6世紀前半と考えられている（埼玉県 1982）。

6世紀後半を予想されるものは、善能寺台地では、北から坂戸130号墳（全長40m）、128号墳（全長32m）、133号墳（全長45m）、毛呂山1号墳（全長32m）、4号墳（全長24m）、34号墳（全長24m）、坂戸15号墳（残存部長21m）など中小規模の前方後円墳が多数ある（金井塚 1980a）。これらを中心に入西（善能寺）古墳群が形成され、現状では59基が善能寺・小山・北峰・成願寺地区に分布している（塩野 1980）。善能万海105号墳は直刀・槍・矛・鐵鎌が出土し（埼玉県教育委員会 1961）、6世紀後半の古い段階かそれ以前の年代を想定できようである。小山地区の坂戸102号墳（円墳、径5m）、103号墳（円墳、径16m）、104号墳（円墳、径5m）も馬形埴輪・人物埴輪・円筒埴輪の破片が検出されて、6世紀代のやや新しい段階と考えられる（埼玉県 1982）。

また、越辺川をさらにさかのぼると、苦林古墳群が、西戸・川角・大類・玉林寺に分布し、入西古墳群に隣接して所在する（塩野 1980）。玉林寺の長塚古墳（前方後円墳）は『新編武藏風土記稿』にも記載があり、瓢箪塚古墳（前方後円墳）は直刀・馬具・鎧の一部・銀環・須恵器などを出土している。また、同じ玉林寺地内の古墳から五鈴鏡・内行花文鏡・鐵鏡・金環・銀環・劔鍔車・管玉・勾玉・琥珀玉・瑠璃玉・滑石玉等が発見されている（塩野 1980）。これより苦林古墳群が6世紀代から形成されている可能性も想定できよう。

高麗川流域にも、前方後円墳・大型円墳があるが、遺物が知られていないため、時期が不明である。上流には坂戸145号墳（前方後円墳、全長27m）、146号墳（前方後円墳、全長14m）、右岸の浅羽地内に土屋神社古墳（円墳、長径50m）、左岸の北大塚地内に石上神社古墳（円墳、径50m）などが知られている。このうち土屋神社古墳は凝灰岩使用の横穴式石室をもつため、7世紀代に下るかもしれない（金井塚 1980a）。

越辺川下流の坂戸台地には、全長63.2mの前方後円墳である胴山古墳が6世紀後半代の築造と考えられているが、円筒埴輪の出土が知られる。現存のものでは、入間地方最大の古墳である（金井塚 1980a）。

小畔川流域の下小坂古墳群は4号墳（前方後円墳、後円部径30m）、中小坂古墳（前方後円墳）が6世紀後半から7世紀前半の古い段階にかけて系統的に築造されたようである（小泉 1972a）。下小坂4号墳は横穴式石室をもち、管玉・勾玉・水晶玉・小玉・銅鏡・直刀片が副葬品として知られる。人物埴輪・馬形埴輪・円筒埴輪の破片が出土している。これに対して、中小坂古墳も横穴式石室を埋葬施設とするが、埴輪は知られず、相対的に新しいと考えられる。

7世紀前半になると、新たな地域に古墳の分布が認められる。特に入間川流域は顕著である。入間川左岸の的場古墳群に1基だけ現存する牛塚古墳（前方後円墳、全長45.6m）は河原石小口積みの横穴式石室を有する。わずかに胴張りのある隅丸長方形の平面プランで、棺床面は1回被覆さ

れ、2次以上の埋葬が確認された。第1次棺床面からは、馬具・金銅環・管玉・切子玉・土製丸玉・ガラス玉・鉄鏃・直刀等、第2次棺床面から金銅製指輪・金銅環・ガラス製小玉・直刀片・刀子・千段巻柄頭・鉗・鉄鏃・馬具等、墳丘・周堀から須恵器甕・提瓶・器台・土師器壺・金銅環などが出土している(甘粕 1972)。7世紀前半を前後する時期でおさえられよう。

越辺川流域の坂戸台地にも勝呂古墳群が築造されているが、40基以上が確認されている。新町地内の坂戸36号墳(円墳、径15m)は河原石使用の胴張り横穴式石室が検出され、金環・銅環・刀子・鉄鏃等の副葬品がある。7世紀後半の古い段階までの縱続を考慮できる。新町地内からは埴輪門筒棺の出土も知られている(塙野 1980、埼玉県 1982)。

小畔川流域の下小坂古墳群では、小堤山神古墳(円墳、長径63m)が7世紀代と考えられる(小泉 1972b)。両袖型横穴式石室を埋葬施設としていて、玄室は若干丸味をもつプランである。金銅環と直刀が副葬されていた。下小坂古墳群では最も新しい段階の古墳である。

入間川流域では、上流左岸の狭山市佐井古墳群・上広瀬古墳群、中流右岸の川越市南大塚古墳群が7世紀後半前後に築造されたものである。

佐井古墳群では半地下式袖無型長方形プランの河原石積み横穴式石室が検出され、直刀・鉄鏃・金環の副葬品を出土している(城近・三島 1972)。上広瀬古墳群は、奈良・平安期の大集落遺跡である今宿遺跡に隣接して分布する。この遺跡の調査区内で周堀1基を検出し(駒宮 1970)、昭和38年発見の河原石積み横穴式石室からは、直刀片・刀子・金環・銀環等を出土した。双方とも河岸段丘上に立地し、低墳丘のものが多いためか詳細な分布状況は把握されていない。

南大塚古墳群(柴原・小泉・谷井・今泉・野部 1974)はさらに下流の川越台地北西縁辺部にあり、山王塚古墳(方墳)を中心として15基が確認されていた。3基の古墳が調査されている。1号墳・2号墳は径16m、3号墳は径19.5mの規模をもち、2号墳には破壊された横穴式石室が確認され、直刀・刀子・鉄鏃を出土した。周堀から円筒埴輪・土師器壺・壺等を出土しているが、これらを見る限り、7世紀前半からそれ以前と考えることもできよう。3号墳も周堀だけの確認によっている。2号墳の北東側周堀外に躰擣があるが、副葬品はなかった。これらから考えると、築造開始は7世紀前半、群形成のピークは後半代になるであろう。

7世紀以前から古墳の築造が継続している越辺川・高麗川流域では、7世紀後半代においても、入西・苦林古墳群は築造が継続する。小畔川流域にも下小坂より上流に鶴ヶ丘古墳群の築造が見られるようになる。

苦林古墳群では、川角所在の毛呂山78号墳で胴張りをもつ横穴式石室が検出され、金銅製頭椎人刃が漆道部から、鉄鏃・金銅環・ガラス玉が玄室から出土した。壯年男子の臼歯も検出された(埼玉県 1982)。7世紀前半の新しい段階から後半代の所産と考えられる。西戸の毛呂山109号墳からも胴張り横穴式石室が検出されている(埼玉県 1982)。

入西古墳群においては、善能寺から東方の北峰に摩利支天塚古墳(円墳、径15m)、新掘に山王塚古墳(円墳、径12.5m)等の小古墳が調査されている程度である。摩利支天塚古墳は胴張りプランの横穴式石室の一部を検出し、倒卵形蟬の直刀・金銅環・銀環・銅環・鉄鏃等を出土した(埼玉県 1982)。7世紀前半以降の所産であろう。山王塚古墳は倒卵形プランの横穴式石室を有し、馬

具・直刀・金環・鉄斧・鉄鐵片・瑪瑙勾玉・碧玉勾玉・管玉・ガラス玉・ガラス小玉・練玉等を出土した（埼玉県 1982）。7世紀後半代と考えられている。

鶴ヶ丘古墳群（谷井・小久保 1976）は30mクラスの円墳・方墳が散在して分布する。1号墳はコーナー部にブリッジをもち、コの字状にめぐる周縁をもち、埋葬施設は自然石使用の横穴式石室である。石室は深さ90cmの版築構造の掘り方を有する。一辺25~30m程の方墳であり、7世紀後半以降の年代とされる。当地方の終末期の古墳としては、最も有力な一群であろう。

ところで、横穴墓も、上福岡市川崎（小泉他 1972）、川越市岩町（谷井 1969）、所沢市流之城（金井塚他 1978）、北秋津（所沢市 1958）などに少數あるが、副葬品が少なく、年代不詳のものが多い。大横穴墓群の盛行する比企地方と異なり、所謂大化薄葬令以降の段階で、古墳の築造停止とオーバー・ラップして出現してくるのではないかろうか。

(利根川章彦)

第2章 埼玉における古墳出土の鉄鎌の基礎的型式分類と年代観

本章では、埼玉の古墳出土の鉄鎌を考察する上での骨格となる基礎的分類と各型式の年代について述べておきたい。

古墳時代の鉄鎌の研究は、1939年に人類学雑誌第54巻第4号に掲載された後藤守一氏の「上古時代鉄鎌の年代研究」に始まるといつていいだろう。それ以前から既に、鉄鎌が古墳から出土する遺物の中でも特に出土例が多い、いわば普遍的といつていい程みられる遺物であるということは事実として認められていた。しかし鉄鎌に資料としての価値をみいだし、それを研究の対象とすることはほとんどなかつたのである。当時の考古学界において鉄鎌の遺物としての価値は非常に乏しいものであった。後藤氏は上記論文の前書き部分で次のように述べている。「鉄鎌はその性質が尖用を専らとし、かつ多数を必要とし、しかも消耗的性質のものであるがために、芸術的価値乏しくして人の好尚に副はず、かつ鉄製であるがために精巧ち易いので、從来学者のこれを論究するものなく（以下略）」このような状況において後藤氏は鉄鎌を集成し、型式分類を行い、年代観を求めるによって古墳研究・古代文化の研究に一指標を与えたのである。

現在刊行されている報告書・論文等で用いられている鉄鎌の型式名称の多くはこの後藤氏の分類をそのまま使用している。一部では1941年に刊行された末永雅雄氏の『日本上代の武器』において末永氏の挙げた五型式分類（細根式・厚根式・平根式・尖根式・雁股式）に従つたものや、後藤氏の分類と末永氏の分類を混同して用いているものがある。こうした状況にも増して鉄鎌の型式名称を難解にしているのは、後藤氏自身の分類基準が観念的なものを含み、実際に分類していく場合に主觀が多く入るということに帰する。たとえば、鎌身部の鋒のふくらの有無あるいは強弱による広鋒・狭鋒との区別、あるいは鎌身部の幅の広い・細いによる広根・細根の区別、柳葉と広鉋長三角との区別等である。これら分類の要素はそれ自体型式の細分、または編年において重要なものとなる可能性があり、場合によつては鉄鎌の時間的・空間的差異の傾向を示すものとなり得る。したがつて、それ相応の分類要素として取り扱われるべきであるが、鉄鎌が鍛造により製作されることを考えあわせると、基礎的（一義的）な型式分類においては、その性質上分類要素としての資質に乏しい。そこで後藤氏の分類の基準となつてゐる要素のうち比較的客觀的分類基準を抽出し、それらを分類の基礎的要素として整理しなおし、基礎的分類を行うことができれば、この分類にさらに細目にわたる分類要素を加えることによって、編年等により発展的な視野を与えられる可能性がでてくるのではないだろうか。もっとも県内だけの出土例で、型式分類・鉄鎌の年代観を検討することには無理があるが、本稿においては「埼玉県における古墳出土遺物の研究」（鉄鎌について）といふことであるので、あえて県内出土例のみに限つて取り上げることとする。以下その基礎的型式分類の狀みと鉄鎌の年代観について若干検討することとする。

(1) 基礎的分類

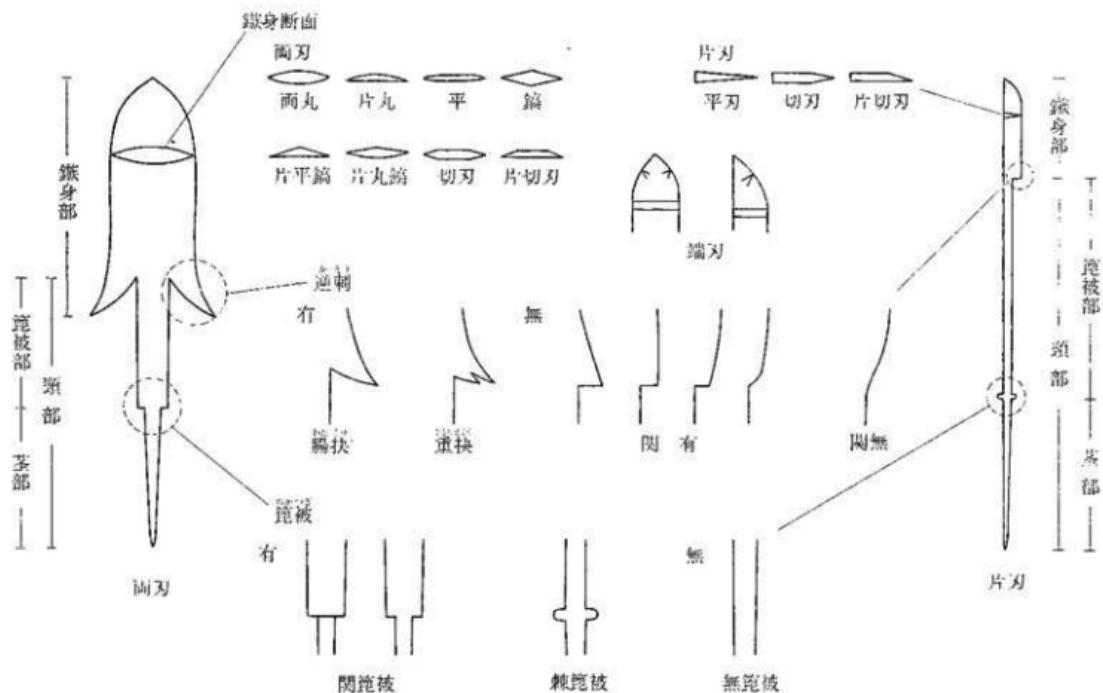
古墳時代の鉄鎌は基本的には刀部を有する鎌身部と、矢柄に装着するための頭部とからなっている。分類の第1要素としてこの頭部の有無があげられる。つまり有頭鎌と無頭鎌である。鉄鎌の型式分類及び副年を試みるときには、頭部の形態や笠被の形態・有無が重要な要素となる。したがってそれらをもともと有さない無頭鎌を有頭鎌の場合と全く同様に考えるわけにはいかない。そこでここでは有頭鎌をその主眼としてとりあげ、その基礎的型式分類を試みる。（第1回）

頭部の形態による分類

- 頭部の長さによる分類
 - 1 長頭
 - 2 短頭
- 笠被の有無及び形態による分類
 - 1 無笠被 笠被のないもの。
 - 2 開笠被 笠被部分が両開を呈するもの。
 - 3 草笠被 笠被部分が鍾状を呈するもの。

鎌身部の形態による分類

- 逆刺の有無及び形態による分類
 - 1 勝抜 鎌身に逆刺を有するもの。
 - 2 重抜 逆刺が二重になっているもの。
 - 3 開有 鎌身部から頭部への移行部に明顯な開を有するもの。
 - 4 開無 鎌身部から頭部への移行部に開のないもの。
- 鎌身部の刃のつき方及び断面形による分類
 - A 両刃 刃が鎌身の両側につくもの。
 - 1 両丸 両面にふくらみを持ち断面が凸レンズ状を呈するもの。
 - 2 片丸 片面が平らでカマボコ状の断面をもつもの。
 - 3 平 断面が偏平のもの。
 - 4 鎮 両面に鎌を有し断面が菱形となるもの。
 - 5 片平鎌 片面にのみ鎌を有し断面が二等辺三角形となるもの。
 - 6 片丸鎌 片面に鎌を反対面にふくらみをもつもの。
 - 7 切刃 刀でいう鎌を両面に有し断面が六角形となるもの。
 - 8 片切刃 刀でいう鎌を片面に有し断面が台形となるもの。
 - 9 端刃 鎌身の先端にのみ刃部のあるもの。
 - B 片刃 片側にのみ刃を有し鎌身が刀状を呈するもの。
 - 1 半刃 刀でいう鎌のないもの。
 - 2 切刃 刀でいう鎌を表裏両面に有するもの。
 - 3 片切刃 刀でいう鎌を片面にのみ有するもの。
 - 4 端刃 鎌身の先端にのみ刃部のあるもの。



第1圖 分類要素模式圖

・ 鐵身の平面形態による分類（両刃）

A 柳葉 鐵身の最大幅（逆刺の部分は除く）をその中程にもち、柳の葉のような形となるもの。

B 長三角 底辺が他の二辺よりも短い三角形となるもの。

C 正三角 正三角形かもしくはそれに近いもの。

D 五角 五角形を呈するもの。

E 整 鐵身と頭の境が明確でなく、細長い棒の先を押しつぶしたような形となるもの。

これらの概念は絶対的なものではなく、あくまでひとつの基準を示したものであることを付記しておく。なお斧箭及び雁設は除いた。

以上の各基準をもとに埼玉出土の鐵鎌の分類を行った。それをまとめたのが第1表及び第2～5図である。分類の名称は、頭一笠被一逆刺一刀一平面形（片刃は平面形を除く）の順にしたがい、繁雑になるのを避けるため、省略したり略名称を表したものもある。また各要素の番号・記号を同様の順番で羅列したものを分類の略号とした。その際、平面形態基準のない片刃柄のものはFとした。たとえば短頭笠被腸抉両丸造柳葉式は221A1A、長頭練笠被関無端刃片刃箭式は2134B4Fとなる。

(2) 鐵鎌の変遷

概して鐵鎌はその鐵身部の平面形態等により柳葉式・長三角形式・正三角形式・五角形式・整筒式・片刃箭式という六型式に大別される。以下それらがどのような変遷をたどるかを若干検討してみたい。

i) 柳葉式

県内出土の短頭柳葉式は、偏平な笠被をもち、かつ前期的な様相を呈する短頭柳葉式と比べると比較的長い笠被を有するものであるが、それらは逆刺のつくもの（短頭笠被腸抉両丸造柳葉式 221A1A）と無いもの（短頭笠被両丸造柳葉式 223A1A）に大別できる。腸抉式を先行型式としてみることができるが、特に城戸野4号墳出土例のように逆刺が深く、逆刺全体が外反せず鐵身部に密着しているものはより古式の様相を呈する。

長頭柳葉式では埼玉稻荷山古墳第1主体部出土の長頭笠被腸抉片丸造柳葉式(121A2A)と長頭笠被腸抉片平鍛造柳葉式(121A5A)の2型式が最も古い型式である。ともに腸抉式で長頭化した棒状の笠被であるが、練笠被状を呈さず、笠被と茎の間は段を造り出して闊としており、長頭練笠被の出現期以前の形態である。長頭練笠被式では逆刺の有無で2群に分かつことができる。城戸野4号墳、鹿島20号墳出土例の長頭練笠被腸抉両丸造柳葉式(131A1A)、見目1号墳出土例の同平造柳葉式(131A3A)と黒田4号・5号・9号・11号墳、鹿島24号墳出土例の長頭練笠被片切刃造柳葉式(133A8A)、御手長山古墳、城戸野2号・4号墳、見目1号墳、黒田5号・8号墳、長沖10号・21号墳、鹿島24号墳等出土例の同片丸造柳葉式(133A2A)、青塚、城戸野2号墳、庚甲塚出土例の同両丸造柳葉式(133A1A)である。腸抉式の一層を先行型式として考えられるが、鐵身の断面形のちがいによる変遷を考えるにはやや難があるようである。

ii) 長三角形式

短頸長三角形式のうち最も古式のものは安光寺2号墳出土の短頸片平鑄造長三角形式(213A5B)、短頸範被片平鑄造長三角形式(223A5B)、同鑄造長三角形式(223A4B)である。これらは鎌身も小さく、範被も非常に短く前期的(長頸鐵出現以前)な短頸鐵の形態をよく示している。埼玉稻荷山古墳第2主体部出土の短頸範被勝扶鑄造長三角形式(221A4B)は闕範被の長頸鐵と共に存しており、安光寺2号墳に次ぐ時期のものである。鑄造あるいは片平鑄造は、短頸長三角形式においては古式の様相の一指標となっている。それ以後の型式については変遷を追うのはやや難しいが、その中でも庚申塚古墳出土例の短頸範被兩丸造長三角形式(223A1B)は、短頸柳葉式にも多くみられる偏平な範被で、かつ安光寺2号墳出土例等の前期的なものに比べると比較的長い範被である。これは他の短頸範被勝扶兩丸造長三角形式(221A1B)、同平造長三角形式(221A3B)、短頸範被片丸造長三角形式(223A2B)、同平造長三角形式(223A3B)、短頸軸範被兩丸造長三角形式(233A1B)、同片丸造長三角形式(233A2B)、同平造長三角形式(233A3B)、短頸勝扶平造長三角形式(211A3B)、短頸平造長三角形式(213A3B)等と比較した場合より先行型式と考えられる。また以上の8型式については型式ごとに変遷をたどるには難があり、むしろ鎌身部の形態を4類に分ける方が考えやすいようである。

i類 一般的な逆刺の形態を呈し偏平な範被のつくもの。大御堂稻荷塚古墳、青塚古墳、見日1号墳出土例がそれに当たる。

ii類 i類とはほぼ同じであるが、鎌身部の幅が広く鎌身が比較的短いもの。南塚原4号墳、附川1号・5号墳出土例がそれに当たる。

iii類 微弱な逆刺とも逆刺のないものとも判断のつきかねる程度の鎌身を呈するもの。台耕地稻荷塚古墳、塙木山22号墳、長沖8号・23号墳、鹿島1号・13号墳等の出土例がそれに当たる。

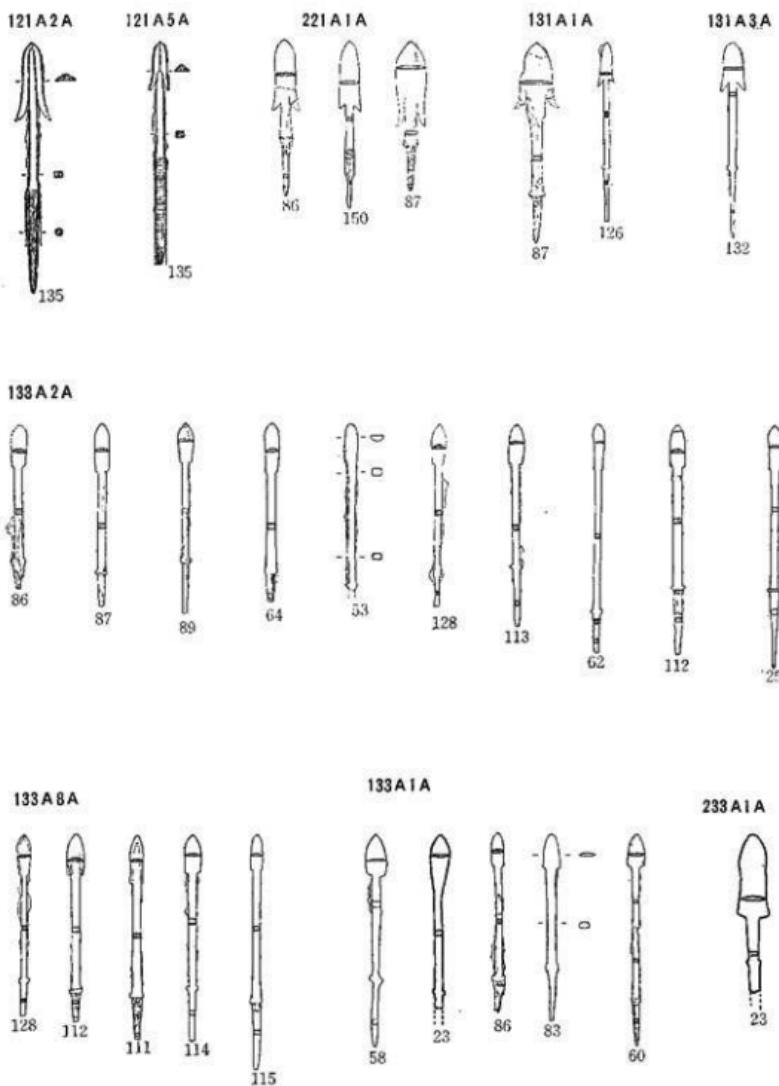
iv類 鎌身の半ば程度まで深く逆刺のつくもので、いわば後藤守一氏の分類でいう飛燕式に類似したもの。鹿島1号墳、西原3号墳出土例がそれに当たる。

以上4類においてはその多くの部分で重なるが、出現の順序としては、一応 i類→ii類→iii類→iv類という推移を設定できよう。古墳時代において新しい時期の短頸鐵は範被の有無、範被がかどりかの別はあるが時間差にかかわりなく、ほぼ同時期のバリエーションとしてとらえられるものである。この傾向は短頸正三角形、短頸五角形においても同様である。

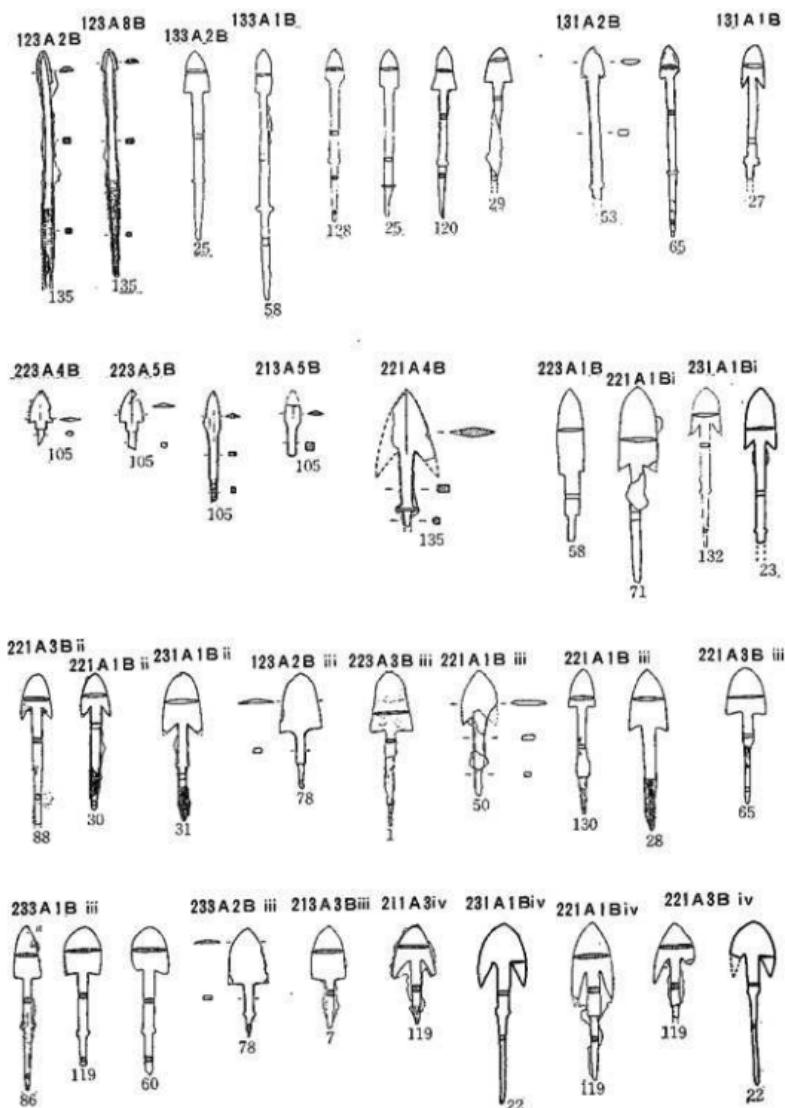
長頸長三角形では埼玉稻荷山古墳出土の長頸範被片丸造長三角形(123A2B)、同片切刃造長三角形(123A8B)が古い。県内の出土例でそれ以後のものは、短頸との中間型式のもの以外ほとんどが棘範被となる。黒田4号墳出土例の中に範被が闊状を呈するものがあるが、鎌身部の形態等から、稻荷山古墳出土例とは全く異なるのは明らかである。長頸範被式では長頸柳葉式と同様に逆刺のつく長頸棘範被勝扶兩丸造長三角形(131A1B)が一応先行型式として考えられるが、明瞭に勝扶長三角形として判断されるものは、長頸陽扶柳葉式よりは若干後出のようである。長頸棘範被兩丸造長三角形(133A1B)、同片丸造長三角形(133A2B)は時期の差異は認められない。また長頸勝扶式として逆刺の小さなものをやや下るものと考えられる。

iii) 正三角形

短頸正三角形について短頸長三角形で用いた4類の分類をあてはめるのが妥当であろう。



第2圖 分類表(1)



第3圖 分類表(2)

県内出土の短頭正三角形式では主にiii類とiv類が出土している。長沖10号墳、鹿島13号、25号墳、氣塚押木126号墳等の出土例がiii類、鹿島1号墳の出土例にiv類がある。

長頭正三角形式は出土例は少ない。鹿島12号墳出土例の長頭鍾籠被脣抉片丸造正三角形式(131A 2C)が最も長頭の名にふさわしいものであり、一応長頭として分類した柏崎6号墳の鍾籠被両丸造正三角形式(133A1C)と鍾籠被脣抉平造正三角形式(121A3C)は、長頭と短頭のいわば中間型式のようなものである。しかしながらこれらは県内出土例にみる短頭正三角形式よりも先行するものと考えられる。

iv) 五角形式

五角形式においては長頭の類を見ない。いずれの五角形式も短頭長三角形式、短頭正三角形式で用いた4類の分類のうちiii類に属するものである。

v) 蛇箭式

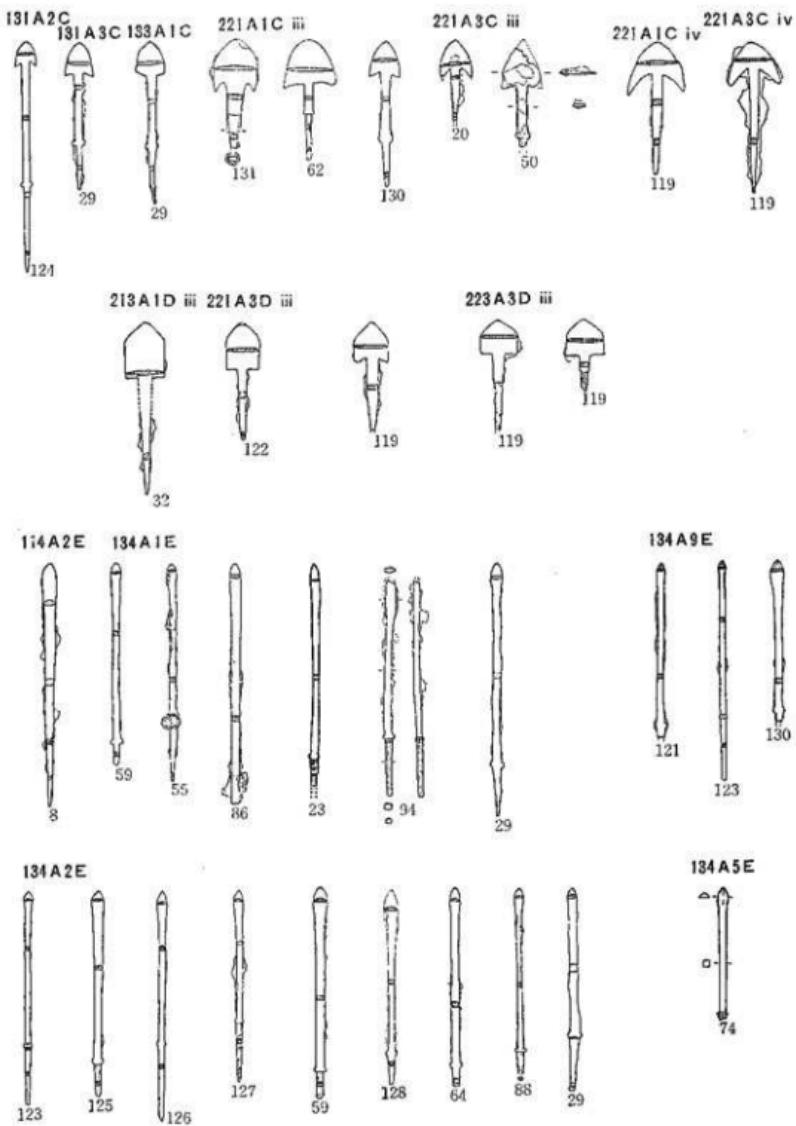
従来の後藤氏の分類において整筋式とされていたものうち鍾身部の平面形態が柳葉状のものは柳葉式に、また長三角形のものは長三角形式として分類したため、ここでいう整筋式とは後藤氏の分類された整筋式より狭い範囲をさす。

牛塚古墳、城戸野2号墳出土例の片丸造整筋式(114 A2E)は、全体的に厚身で重厚な感じのものでありやや古い様相を示す。鍾籠被両丸造整筋式(134 A1E)、同片丸造整筋式(134 A2E)、同片平鑄造整筋式(134 A5E)はほぼ同時期としてよい。それらより後出のものとして、鹿島8号・11号・13号墳出土の鍾籠被端刃整筋式(134 A9E)を考えることができる。これらは鍾身部が非常に小さく、その先端部にのみ刃を有するもので正倉院の御物として知られる中にも見ることができる。

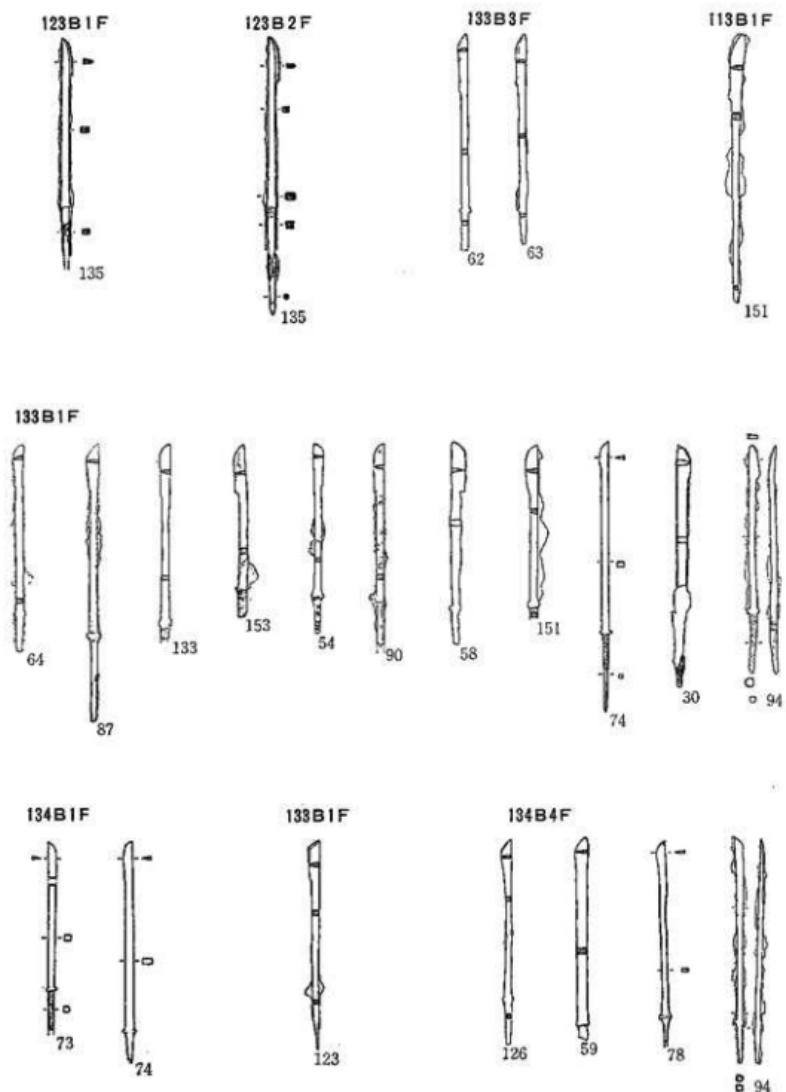
vi) 片刃箭式

県内の片刃箭式は全て長頭である。片刃箭式で最も古い型式のものは埼玉稻荷山古墳出土の鍾被闊有平刃片刃箭式(123 B1F)と同切刃片刃箭式(123 B2F)である。その後の形態として日沼9号墳出土の闊有平刃片刃箭式(113 B1F)と長沖10号・11号墳出土の鍾籠被闊有片切刃片刃箭式(133 B3F)があげられる。两者とも鍒身部が比較的長く刃部が滑らかな曲線を呈する。さらに後出のものは鍾籠被闊有平刃片刃箭式(133 B1F)として挙げた一群の鍒である。その中でも見目2号墳、塚合41号墳、長沖21号墳等の出土例のように鍒身部の長い、滑らかに内擱する形態に近いものは上記鍾籠被闊有片切刃片刃箭式と同期としてもよいようである。古墳時代の片刃箭式の最終型式としては、鹿島20号墳等出土例の鍾籠被闊無端刃片刃箭式(134 B4F)と鍾籠被闊有平刃片刃箭式のうちカマス状切先を呈するものである。两者とも正倉院の御物の中の片刃箭式に多くみられるものである。

以上各型式についてそれぞれの変遷をみてきたが、これらを総合してI～V期の時期区分にまとめた。



第4図 分類表(3)



第5回 分類表 (4)

(3) 県内出土鉄鎌各期の年代

第2章第1節で基礎的分類を行い、前節で各型式における変遷の大略を示したが、それらをまとめ県内の古墳出土の鉄鎌を5つの時期に分けて考えることができる。

I期

長頭鎌の出現以前をI期として設けることができる。全国的な視点に立った場合、ここで設定したI期は、時間的にも長くまた鎌の諸形態の推移からしても、幾つかの期に分けることが可能であるが、埼玉県内において既に報告されている資料としては岡部町に所在する安光寺2号墳の出土例のみであり、県内の資料だけでは期を分かつことは不可能である。安光寺2号墳は粘土櫛を有する円墳で鉄鎌の他、大刀1、劍1、鉢1、鉄斧1、ガラス小玉1、白玉4等を出土し、5世紀前半代の築造と考えられている（増田・水村・中島 1981）。

II期

長頭鎌が出現し、それと共にII期とするが、長頭鎌の概念規定についてはやや問題の残るところである。前節の基礎的分類では、鎌身部と笠被部を比較した場合、鎌身部の長さに対して笠被部（無笠被においては茎部）の長さが著しく長いものを長頭として分類した。長頭鎌の典型は長い棒状の笠被を有するものであるが、II期においては比較的偏平な笠被部であっても長頭化しているものもあり、その意味においては長頭鎌の出現とともにその移行期としてもとらえられる。

II期に属する鎌型式を出土する古墳は、県内では行田市埼玉に所在する稻荷山古墳を当てることができる。金象嵌銘鉄剣を出土したことで知られる稻荷山古墳は全長117mの前方後円墳で、疎櫛（第1主体部）と粘土櫛（第2主体部）の2基の主体部を有し、第1主体部からは鉄鎌の他画文帯環状乳神獸鏡1、大刀5、劍2、鉢2、挂甲1、鈴杏葉3、三環鏡1、雲珠1等の他、帶金具等も出土している。第2主体部からは鉄鎌の他、鉄刀2、劍1、挂甲小札、鎌1、替1等が出土している。築造時期についてはやや意見のわかれるところであるが、墳丘出土の須恵器、副葬品を考え合わせると5世紀末葉の築造と考えられ、また第2主体部の出土遺物は第1主体部の出土遺物と比較してみると、新しい段階のものと考えられる（斎藤他 1980）。

III期

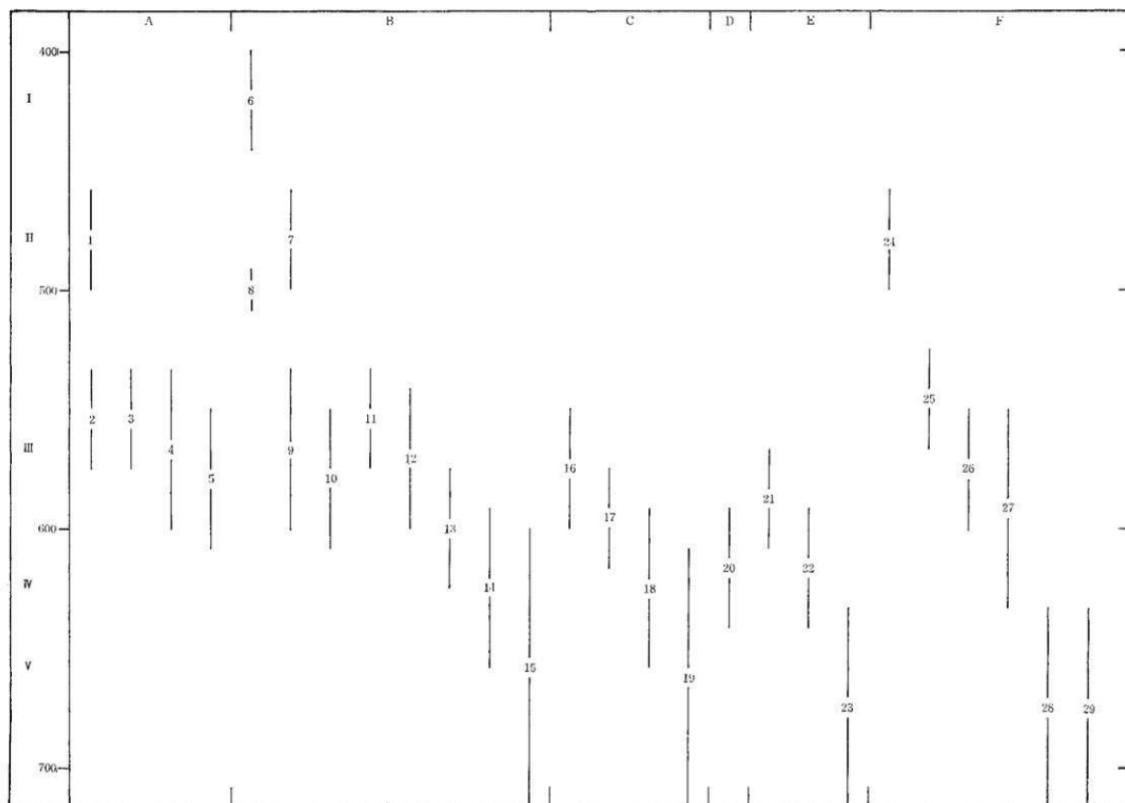
長頭化した笠被に棘状突出部をもつもの（棘笠被）が出現し、それに共伴するものをIII期とするただし棘状突出部にも幾つかの種類があり、ここでは鎌身部につく鋭いV形突出や、頭部であってもやはり鋭いV形突出がつくものについては除外して考えなければならない。I期、II期においてもこれらの棘形突出は短頭鎌の一部の型式にみられるものであり、III期として画した区分の根拠となる長頭化した笠被部にみられるものとは異質である。

III期に入ると県内の古墳からの出土例が多くなり、同じIII期の範疇として考えられるものの中でもIII期の様相を強くもつ、いわば先行型式と考えられるものと、そうでないものに細分できる。しかしながら、これは一方では時期差として考えられると同時に、先行区分期の残存形態とも考えられ一概に時期差として一期を画するわけにもいかない。

III期に属する型式の鉄鎌を出土している古墳としては、東松山市附川1号墳・5号墳、本庄市塚合41号墳、御手長山古墳、児玉町長沖8号墳・10号墳・11号墳・21号墳・23号墳、上里町大御堂稻

1	長頸範被腸抉片丸造柳葉 長頸範被腸抉鑄造柳葉	(121A 2 A) (121 A 5 A)	14	短頸範被平造長三角 短頸範被丸丸造長三角	(223A 3 Biii) (223A 1 Biii)
2	短頸範被兩丸造柳葉	(233 A 1 A)		短頸範被片丸造長三角	(233A 2 Biii)
3	短頸範被腸抉兩丸造柳葉	(221 A 1 A)	15	短頸範被平造長二角	(211A 3 Biv)
4	長頸範被腸抉兩丸造柳葉	(131 A 1 A)		短頸範被腸抉兩丸造長三角	(221A 1 Eiv)
	長頸範被腸抉平造柳葉	(131 A 3 A)		短頸範被腸抉平造長三角	(221A 3 Biv)
5	長頸範被兩丸造柳葉	(133 A 1 A)		短頸範被腸抉兩丸造長三角	(231A 1 Biv)
	長頸範被片丸造柳葉	(133 A 2 A)	16	長頸範被腸抉片丸造正三角	(131A 2 C)
	長頸範被片切刃造柳葉	(133 A 8 A)	17	長頸範被腸抉平造正三角	(131A 3 C)
6	短頸範被兩丸造長三角	(223 A 4 B)		短頸範被腸抉兩丸造正三角	(221A 1 Cii)
	短頸範被片平鑄造長二角	(223 A 5 B)	18	短頸範被腸抉平造正三角	(221A 3 Cii)
	短頸範被片平鑄造長三角	(213 A 5 B)		短頸範被腸抉兩丸造正三角	(221A 1 Civ)
7	長頸範被片丸造長三角	(123 A 2 B)	19	短頸範被腸抉平造正三角	(211A 3 Civ)
	長頸範被片切刃造長三角	(123 A 8 B)		短頸範被兩丸造五角	(213A 1 Diii)
8	短頸範被腸抉鑄造長三角	(221 A 4 B)	20	短頸範被平造五角	(223A 3 Diii)
9	長頸範被腸抉兩丸造長三角	(121 A 1 E)		短頸範被平造五角	(223A 1 Diii)
10	長頸範被兩丸造長三角	(133 A 1 B)		短頸範被腸抉平造五角	(221A 3 Diii)
	長頸範被片丸造長三角	(133 A 2 B)	21	片丸造整筋	(114A 2 E)
	長頸範被腸抉片丸造長三角	(131 A 2 B)	22	範範被兩丸造整筋	(134A 1 E)
11	短頸範被兩丸造長三角	(223 A 1 B)		範範被片丸造整筋	(134A 2 E)
12	短頸範被腸抉兩丸造長三角	(221A 1 Bi)	23	鍊捲被端刃鑄筋	(134A 9 E)
	短頸範被腸抉兩丸造長三角	(231A 1 Bi)	24	長頸範被平刀片刃筋	(123B 1 F)
13	短頸範被腸抉兩丸造長三角	(221A 1 Bii)		長頸範被切刃片刃筋	(123B 2 F)
	短頸範被腸抉兩丸造長三角	(231A 1 Bii)	25	長頸平刀片刃筋	(113E 1 F)
	短頸範被腸抉平造長三角	(221A 3 Bii)	26	長頸範被片切刃片刃筋	(133B 3 F)
14	短頸平造長三角	(213A 3 Biii)	27	長頸範被平刀片刃筋	(133B 1 F)
	短頸範被腸抉兩丸造長三角	(221A 1 Biii)		長頸範被開無平刀片刃筋	(134B 1 F)
	短頸範被腸抉平造長三角	(221A 3 Biii)	28	長頸範被圓無端刃片刃筋	(134B 4 F)
	短頸範被片丸造長三角	(223A 2 Biii)	29	カマス切先	

第2表



第6図 鉄 緑 年 代 略 図

荷塚古墳、美里村塚本山11号墳、神川村城戸野2号墳・4号墳・南塚原4号墳・5号墳、十二ヶ谷戸3号墳、花園村黒田4号墳・5号墳・8号墳・9号墳・11号墳、川木町鹿島5号墳・12号墳・20号墳・24号墳・27号墳・見目1号墳・2号墳、杉戸町目沼8号墳・9号墳等である。これらの主体部はそのほとんどが横穴式石室であり、追葬による時期差を考慮しなければならない。また古墳の時期を比定する資料もけっして豊富とはいえない。したがって、すべての古墳についての年代比定には無理が当然であるので、時期を比定し得るものについて検討を加えることにする。

牛塚古墳は、片袖型横穴式石室を有する前方後円墳で、棺床面は2面確認されており、第1次面より、鑿削式鉄鏃の他、雲珠、金銅環、玉類、第2次面から鉄鏃の他、雲珠、鏡板、刀子等が出土している(埼玉県 1982)。築造は6世紀後半代としてよいものと考えられる。牛塚古墳は円墳で複室構造胴張りの横穴式石造をもつ。鉄地金銅張杏葉、雲珠、辻金具、鞍金具、金環、銀環、水晶製勾玉等の他、須恵器が出土している(埼玉県 1982)。出土遺物からして6世紀後半のものと考えられる。塙谷41号墳は横穴式石室を有する円墳で、納屍金具、賣金具、足金具、刀子、金環等の他、器材・円筒の埴輪が出土している。『埼玉県史』では7世紀中～後半に位置づけているが、築造自体は6世紀末～7世紀初頭と考えるのが妥当である。御手長山古墳は横穴式石室を持つ円墳で、大刀、柄頭、弭金物、刀装具、小札、鏡具、ガラス製丸玉等の他、家形・形象・人物・朝顔・円筒の埴輪が出土している(小川・長谷川他 1978)。7世紀初頭の築造と考えられているが、埴輪等から6世紀代にあがるものと考えられる。庚申冢古墳は横穴式石室を有する円墳で、大刀、柄頭、賣金具、刀子、雲珠、金環、勾玉、管玉、丸玉等が出土しており、6世紀代の築造である(埼玉県 1982)。長沖8号墳は横穴式石室を有する帆立貝式前方後円墳で、鉄鏃の他、刀子、金環、須恵大甕片が出土しており、6世紀後半の築造である(菅谷他 1980)。長沖10号・11号墳は共に横穴式石室の円墳で、埴輪の設置は認められず、7世紀後半の築造と考えられているが(菅谷他 1980)、遺物に乏しく時期の比定には難がある。長沖21号・23号墳は横穴式石室を有する円墳で、共に埴輪の設置が認められ6世紀中葉～後半に位置づけられている(菅谷他 1980)。大御堂福荷塚古墳は横穴式石室を有する円墳で、大刀、刀子、耳環等が出土しており、6世紀中葉前後と考えられている(埼玉県 1982)。城戸野2号・4号墳は共に横穴式石室を持つ円墳で、埴輪が認められている。2号墳からは弓金具刀子、鎌、鏡具、須恵器等、4号墳からは弓金具、刀子、鎌、耳環、切子玉、管玉、小玉等が出土していて(菅谷他 1973)、両古墳共6世紀後半の築造とみてよい。十二ヶ谷戸3号墳は横穴式石室をもつ円墳で、弓金具、耳環、水晶製切子玉、滑石製丸玉等の他、円筒・形象埴輪片、須恵器が出土しており(菅谷他 1973)、その築造は6世紀後半としてよい。黒田4号墳は横穴式石室を有する円墳で、帶、雲珠、鏡具、碧玉製管玉、ガラス製丸玉・小玉等が出土し、円筒・人物・形象埴輪が確認されている(塙野・小久保 1975)。遺物から6世紀前半代の築造と考えられる。黒田8号・9号・11号墳はいずれも袖無型横穴式石室を有する円墳で、埴輪が認められている。8号墳からは大刀・刀子・耳環・碧玉製管玉等が、9号墳からは大刀、刀子、碧玉製管玉、ガラス製小玉、瑪瑙製勾玉等が出土している。報告書においては、古墳群のグルーピングによって8号・9号・11号墳を7世紀前半代のものとしているが、出土遺物・石室構造からして6世紀後半代の築造と考えるのが妥当である。日沼8号墳は木棺直葬の円墳で、大刀、刀子、鎌子、鎧杏葉、雲珠、辻金具等が出土

しており(横川他 1981) 6世紀前半の築造と考えられる。

Ⅳ期

整筋式の盛行期をⅣ期として設定できる。Ⅲ期において主体的な存在であった長頭の棘籠被に柳葉形や長三角形の鎌身部の付くものが衰え、それにかわって整筋式が上流となる。また、片刃箭式についてはⅣ期に下がるものもあるようである。短頭長三角形式・短頭正三角形式・短頭五角形式のうち i ~ iv 頭に細分したものについては、一応Ⅳ期に多くみられるものと考えられるが、Ⅲ期から出現するものとみてよい。またそのうちでも iv 頭とした飛燕式と類似したものは、Ⅴ期以後に残り飛燕式へと続くものと考えられる。

整筋式を出土している古墳のうちⅣ期に属するものとしては、東松山市柏崎 6号墳・本庄市塚合 43号墳、児玉町長沖 3号・21号墳、神川村城戸野 2号墳、南塚原 4号墳、川本町鹿島 11号・19号・20号・21号・24号墳等が挙げられる。

塚合 43号墳は横穴式石室を有する円墳で、責金具、足金具、鐸、刀子、金環等が出土している。Ⅳ期に属する鉄鎌を出土している塚合 41号墳よりも後出と考えられている(菅谷 1969b)。長沖 3 号墳は横穴式石室を有する円墳で、大刀、刀子、耳環、勾玉、管玉、丸玉、切子玉等が出土している他、前庭部より須恵器、土師器が出土しており、7世紀前半の築造と考えられている(菅谷他 1980)。柏崎 6号墳、長沖 21号墳、城戸野 2号墳等は、Ⅲ期に属する鉄鎌も出土している。Ⅳ期が 6世紀後半を中心とし、一部 7世紀初頭まで下るものと考えた場合、追葬による時期差を考えても、これらⅣ期に属する鉄鎌を出土する古墳の使用期間は、7世紀初頭から7世紀前半を中心とする時期であると考えるのが妥当である。

Ⅴ期

整筋式・片刃箭式において端刃がその上流となる時期をⅤ期として設定し得る。端刃整筋式として分類できる鉄鎌を出土している古墳は、川本町鹿島 8号・11号・13号墳である。端刃片刃箭式として分類できるものは、鹿島 20号墳、児玉町長沖 3号墳、美里村塚本山 22号墳から出土している。これらの端刃片刃箭は、正倉院御物矢として知られる中の端刃片刃箭ほど刃部の反りがなく、片刃箭から本来の意味での端刃片刃箭への移行形態であるとも考えられるが、ここでは一応端刃片刃箭として分類した。

長沖 3号墳は先に触れたように 7世紀前半の築造と考えられている。塚本山 22号墳は胸張りを有する横穴式石室をもつ円墳で、刀子、耳環が出土している。鉄鎌の他は遺物に乏しく時期比定は難しいが、古墳群内における立地等による他の古墳との比較検討により、7世紀前半墳の築造と考えられている(増田・小久保 1977)。しかしながら、石室の構造からすると、やや時期が上の可能性もある。鹿島古墳群については全般的みて 7世紀的様相の古墳群であるが、遺物等の時期比定の材料に乏しいので、ここでは触れないことにする。長沖 3号墳、塚本山 22号墳の両古墳においてはⅣ期に属する鉄鎌も出土しており、その中にあって端刃箭は新しい要素としてとらえることが可能である。したがって築造時期と端刃箭の埋納期との時期差を考え、またここで取りあげた片刃箭を過渡期のものと考えると、7世紀中葉～後半にかけて端刃箭へ移行すると考えられる。

本章では鉄鎌の基礎的分類と各期の年代を求めたつもりであるが、埼玉県というごく限られた地

域の資料だけを取りあげたことと、良好な資料に乏しいこと、また県内の古墳の年代観自体も今だに確立したとはいえないことなどもあり、基礎的分類・各期の年代とともに不十分なものといわざるを得ない。特に他県との比較検討を怠ったため、本章で設定した変遷がごく一部の地域的変遷の様相であることは否めない。また全国的な視野に欠け、県内における鉄器の推移にしても、Ⅰ期以前・Ⅰ期とⅡ期の間、Ⅱ期とⅢ期の間には多く欠如している部分があることは明らかである。本章が今後の鉄器の研究に僅かでも資する点があることを期待する。

(田中正夫・齋藤芳之)

第3章 鉄器に関する諸問題

1. 鹿島古墳群出土鉄器について

鹿島古墳群は大里郡川本村本島から同郡江南村押切にかけての荒川右岸河岸段丘上に位置し、小円墳よりなる古墳群である。1970(昭和45)年、県教育委員会により発掘調査が開始された。

鹿島古墳群中鉄器を出土した古墳は、1号・5号・8号・9号・11号・12号・13号・19号・20号・21号・24号・25号・27号墳の計13基である。各古墳出土の鉄器を前章の分類に従って分類すると以下のようになる。

1号墳—221A3Bii, 211A3Dii, 213A3Diii, 233A3Diii, 211A3Diii, 221A1Biv, 221A3Biv, 211A3Civ, 221A1Civ, 211A3Civ

5号墳—133A1B

8号墳—134A9E

9号墳—211A1Biii, 213A1Diii, 231A1Biii

11号墳—134A2E, 134A9E, 133B1F (カマス切先)

12号墳—131A2C

13号墳—134A1E, 134A9E, 1?4B4F, 231A1Bii

19号墳—134A2E, 134A9E

20号墳—131A1A, 134A2E, 134A9E, 133B1F, 134B1F

21号墳—134A2E, 1?4A8E

24号墳—133A8A, 133A2A, 133A1B, 123B1F

25号墳—221A1Ciii

27号墳—1?3B3F (カマス切先)

このうち同型式の鉄器を出土している古墳を挙げると、5号・24号墳 (133A1B・長頸鍊籠被腸抉内丸造長三角形)、8号・11号・13号・19号・20号墳 (134A9E・長頸鍊籠被端刃鑿箭)、11号・19号・20号・21号墳 (134A2E・長頸鍊籠被片丸造鑿箭)となる。また長頭片刃箭についてみると、ややカマス状を呈する切先を有する鉄器が11号墳と27号墳より出土している。

これらの各型式を第2章における5時期区分にあてはめて考えると、1号墳—Ⅳ～Ⅴ期、5号墳—Ⅲ期、8号墳—Ⅳ期、9号墳—Ⅳ期、11号墳—Ⅳ～Ⅴ期、12号墳—Ⅲ期、13号墳—Ⅳ～Ⅴ期、19

2号墳—Ⅳ～Ⅴ期、20号墳—Ⅲ～Ⅶ期、21号墳—Ⅳ期、24号墳—Ⅲ期、25号墳—Ⅳ期、27号墳—Ⅶ期となる。

鹿島古墳群中鉄鏡を出土している古墳では、1号・8号・12号・24号墳から大刀が出土している。また1号・12号・20号墳から鞘尻・足金具等の刀装具類が出土している他は、一部の古墳から刀子・金環等が出土しているのみであり時期を比定し得る遺物に乏しい。

鉄鏡の分類からは、5号・12号・24号墳が6世紀後半～7世紀初頭のもので、1号・9号・21号・25号墳が7世紀初頭～7世紀前半と考えられる。また1号墳出土の鞘尻・足金具等は、この年代鏡と大きく隔たるものではない。8号・27号墳は7世紀中頃～後半、11号・13号・19号墳は年代幅を有し7世紀代と考えられる。20号墳については年代幅が考えられるが築造自体は6世紀後半～7世紀前半代と考えるのが妥当であろう。

以上ごく簡単にではあるが鹿島古墳群出土の鉄鏡に検討を加えてきた。石室構造によって鹿島古墳群の造営年代を求める試みは既になされている（池上悟「北武藏に於ける胴張り石室に関する若干の考察」『中央考古』創刊号1980年）。それらと比較した場合、鉄鏡の分類によって求められる年代観と石室構造から求められる年代観には、かなりのずれがあることは認めざるを得ない。本論に於ける鉄鏡の基礎的型式分類及び各期の年代観については依然試論の段階にあり、本論では問題提起をするに留める。

(田中正夫)

2. 横穴式石室における鉄鏡の出土状況について

県内出土の鉄鏡は横穴式石室からのものが多いがその出土状況については余り注意されていない。後世の擾乱や追葬による移動があると考えられているからであろう。しかし鉄鏡がどのように埋葬されていたかを知ることは鉄鏡副葬の意味を考える基礎条件と考える。以下、県内資料を周辺地域のものと比較検討することにより実態を探るものである。

下表は擾乱・追葬移動の有無を捨象して石室（玄室）内各部位からの出土が図示・記録されているものの県内例を示した。玄室規模を無視して中軸線を境にして左右（奥壁に向かって、以下同じ）に分け、更に横に4等分した。奥壁と入口寄り部分は更に2等分し、これらは玄室の四隅部をも含

	古 墓 通 番 号		古 墓 通 番 号
奥 前	1, 78, 90		
奥 左	30, 58, 87	奥 右	1, 23, 48, 58
左 奥	60, 64	右 奥	8, 54, 64, 132
左中奥	75, 86	右中奥	26, 78
左中前	6, 23, 125, 130	右中前	53, 71, 80, 128
左 前	126, 130	右 前	78
前 左	23, 123	前 右	29, 88

第3表 鉄鏡の石室内部別出土一覧

めで奥左（右）、前左（右）とした。奥壁は3等分した左右を隅部へ含め、中央部を奥前とした。

これによると左右両側壁については特に一方に偏することはないが隅部を含む部位が多い。奥壁中央部は特に少ない。なおこれらは壁に隣接するものがほとんどで数本以上のものがまとまって発見されたといわれているものである。追葬移動あるいは後世の攪乱移動の実態は必ずしも明らかではないが、玄室中央部分にはほとんど無く、全面に散乱する例も少ないので、移動を受けたとしてもある程度原位置に近い部分とも考えられる。しかしこれについては後世の攪乱移動を受けない状態にあるものについて検討する必要がある。

鉄鎌の出土状態を観察すると、A型=一定方向にまとまって束状になっているものとB型=不定方向で散乱しているものがある。後世の攪乱を受けなければ最終埋葬で鉄鎌を埋葬していればその状況が残るはずであり、また本末は矢柄を付けた矢としてあるべき（矢柄の痕跡を残すものが多い）とすれば、一定方向にまとまっているA型の場合は重要で、少なくとも単位埋葬（1体あたりの埋葬）時の状況を示す可能性がある。県内では次のものがある。

桶川市西台7分墳（西台遺跡2号墳）（6…古墳一覧通番号と同じ、文献は同表参照、以下同じ）は石室がよく残り、後世の攪乱が無いと報告されている。鉄鎌は玄室左側（奥壁に向かって、以下同じ）壁際の入口寄りに壁に平行して鋒（きっさき）を奥壁に向け、10本の束状で出土した。身を欠くものが多いが鋒はほぼそろっていると考えられる。長頸輪笠被整筋式（2章の分類による、以下同じ）が確認されている。大刀は右側壁にあり、鉄鎌は他には出土していない。

熊谷市三ヶ尻林4号墳（94）は遺物の種類が多く、少なくとも4体分の人骨が確認されている。遺物分布や床面状態から後世の攪乱は無いと考えられている。鉄鎌は玄室右側壁際の奥寄りに10本束状になり、鋒は奥へ向け、よくそろっている。壁と平行し、大刀と接して整然と並んでいた。3種類あり、長頸輪笠被の整筋式1、同関無片刃箭式5、広根に属する斧箭式1、不明（身欠）1である。他に10本分の鉄鎌があるが追葬移動の散乱と考えられる。

東松山市鷹跡山4号墳（26）は無袖型石室の右側壁奥寄りに、6本の束状で鋒をほぼそろえて奥へ向け、壁と平行して大刀のわきに接して置かれている（写真図版観察による）。装身具等の出土状況から原位置を動かないものと報告されている。鋒が著しいが整筋式と報告されている。

川本町鹿島19号墳（124）は胴張り石室をもつ。玄室は攪乱された部分もあるが左側壁際入口寄りに束状鉄鎌が示されている。鋒方向や数は不明である。10本分の実測図が示されている。身のわかるものは長頸輪笠被整筋式8で端刃のもの1を含む。位置図のものと同じとすれば、離れた2本を除くと6本程度と思われる。

これらは矢柄を付けた矢として安置され種々の埋没条件を経てもなお、群としてまとまっている束状を保っているので追葬移動されたとは考えにくい。ある時点の、おそらくは最終埋葬時が多いと思われるが、単位埋葬時の鉄鎌出土状況と思われる。このように限定された状況に限ると県内では他に類例は無い。これらの状況特徴を次のように指定することができる。

- (1) 鋒がほぼそろって、鐵身がまとまっている。
- (2) 側壁際に隣接して、壁に平行して置かれている。
- (3) 鋒は奥へ向く。

- (4) 左右側壁のどちらかに固定しない。
- (5) 大刀とセットになり並び置かれるものがある。
- (6) 数は 6・10 本単位例である。
- (7) 鐵の形態組成は複数例であるが单一のものも考えられる。
- (8) 単位埋葬一单位の鉄器群である。以上は非擾乱と遺物状況から単位埋葬状況を類推し、状況特徴を指定したが、これについて、今度は被葬者一体に直接かかわる鉄器の単位埋葬状況を良く示す例から比較検討する。

県北に隣接する群馬県赤堀村の①赤堀村285号墳の下部石槨（松村 1975）、②赤堀村五日牛3号墳（松村 1977）、③赤堀村五日牛21号墳（松村 1978）、④赤堀村16号墳（松村 1978）は擾乱を全く受けず、人骨遺存状況から身体との位置関係もわかる貴重な例である。一体のみを納める箱式棺状で堅穴式石槨と報告されている。横穴式石室に先行する形態であるが、占地を同じくする同一古墳群内で単独葬から複次葬内部主体へ移行しており、墳丘形態構造に特別な差はない、大刀・鉄鎌・刀子のような、横穴式石室墳の基本遺物を含んでいることなどから、これらの埋葬状況は横穴式石室における単位埋葬の一つの原形を示すものと考えられる。

①～④の人骨と鉄器組成状況と前に挙げた状況特徴と比較検討すると(1)は全く同じ状況である。①は鋒が直線状にきれいに並んでいる。本来の姿であろう。矢盛具は遺物としては確認されない（他のすべてについても同様）が並び整う状況下にあったと考えられる。(2)は身体のそば、体軸に平行して置かれている①～④例から、身辺に平行して置かれるすべきである。狭小な主体部で壁とも接することになるが体軸に斜交するようなものではないと考えられる。(3)も身体を基準とすべきである。頭位方向②③、足位①④で特に一定ではない。(4)も身体を基準とすべきで、被葬者側からみて左①、右②～④になるが県内例からみると特に偏位するとは考えられない。身体との位置関係は鎌身が腰附近②④、膝やや上①③で身体の中心部近くに置かれている。(5)は①②が大刀と接している。⑤は全長25mの前方後円墳の埋葬主体者で、大刀1、鉄鎌6、刀子1の必要最小のセットを出土する。身体をやや曲げてまでも大刀と鉄鎌を整然と並べているのは、前方後円墳七体者ゆえに両者の密接なセット関係を忠実に示したと考えられる。鉄鎌のみのもの③や対面壁にあるもの④もある。(6)は①6本、②③9本、④19本である。6本は少數単位例として、9・19本は端数の単位例として注意される。県内例は6・10本単位があり、6・9・10本が多いようであり基本数として検討を要する。(7)は①のみが無頭鎌で重抜の柳葉式および長三角形式に分かれる。②③④は單一組成で腸胱柳葉式、片抜の柳葉式、腸胱片刃箭式である。作りの特徴から同一工人（工房）の画一製品と考えられる。(8)は19本もの数でありながらも分散せずに一括していることから一體一単位の鉄鎌群を想定できる。以上は被葬者一体と直接関係が明確な鉄鎌出土状況で、単位埋葬時の特徴を示すと考えられる。

その他横穴式石室では赤堀村五日牛13号墳では擾乱を受けない状況で玄室左側壁際で2群（12本・9本の束）が相互に鋒方向を異にして、片方は奥壁に鋒を接して出土している（松村 1978）。鎌間は40cmで矢柄を規定した場合、同時埋葬では重なる位置があるので単位埋葬の時点が異なるものと考えられ(7)の特徴を示す。同村287号墳（松村 1975）や群馬県高崎市御部入4号墳（群馬県

1981) では玄室内入口寄り右隅で、入口に鍾をむけ、東状にまとまって各8本・6本発見されている。(4)について、頭位あるいは足下位にも副葬される例である。

以上はかなり条件を限定したA型(一定方向にまとまって東状で出土するもの)の県内および近隣地城の例を挙げ、単位埋葬状況を示すものとして検討した。おおむね6世紀後半から7世紀代の関東地方の主として小形群集墳における状況と考えている。これらA型出土のものに限れば、身辺に平行し、側壁近くに整然と矢(矢柄が付く)が單一群として横置きされるのが単位埋葬状況である。矢盛具は不明なものが多いが、少なくとも鋒が捕う状態で収束(納)される。大刀と並び置かれて密接なセットになるものもあるが、鉄鎌だけの副葬例もあり、これは副葬品として独立した役割を果たすことを示唆している。数量は10本以下の例が多いことや、6・9あるいは10本の単位数が注意され、これらは実態にかなり近いのではないかと考えられる。19本例は多い部類と考えるが鏡を伴出し、数量の差が任意のものではなく被葬者との関わりによることが伺える。単位数における形態組成は同巧品を揃えるものといくつかの形態に分かれものがある。後者は数量的に主体を占めるものが存在し、全く種々雑多の例は無いので本的には同形態が捕うのが普通であろう。三ヶ尻林4号墳のようにいわゆる広(平)根籠を少量混れる細根籠群も特別な例ではない(西川1966)。これらの特徴を単位埋葬状況の属性として観ると県内例で可能性のあるものが示される。美里村冢本山22号墳(78)で右側壁際で10數本まとめていたとされるもの、同じく塚本山27号墳(80)で右側壁際で大刀と接して発見されたもの、神川村城戸野2号墳(86)で左側壁際で鍾方向をそろえて一括出土したもの、川本町鹿島24号墳(128)の右側壁際で3本併置の大刀に隣接して一括出土(やや鋒が不揃いである。実測図に25本が示され長三角形式16、柳葉式7、鑿箭式1、片刃箭式1、いずれも棘笠被式)したものなどがある。鹿島例は細かい状況と形態別が不明な点があるが、25本が一括品とすれば単位埋葬の一単位鉄鎌数となる。古墳群の中心的位置を占め、石室規模も大きい。

次にB型とした不定方向に散乱した状態を示すものであるが、これは後世の攪乱・追葬移動等が含まれ、ほとんどがこのタイプである。しかし埋葬時の状況を推定させるものがある。

大宮市台耕地地蔵荷塚古墳(1)は玄室の奥壁右隅を中心に21本が奥壁際に散乱していた。鎌身形は柳葉式8(腸抉2)、長三角形式10、三角形式2、関有片刃箭式1である。大刀3本が奥壁に立てかけられていた。玉頭や朱粉の位置、状況から被葬者の頭位が中央奥壁寄りに確定され、又葬道状況から追葬は無く遺物はすべて原位置であると報告されている。ここでは出土状況はくわしく触れていないが、矢柄(痕跡が認められる)が付くことを想定すると、図示された鋒方向では壁との位置関係が不自然である。散乱させて矢を置いた、あるいは東状で置かれたことを想定することは全くできず、鎌身散乱に至る二次移動が考えられる。

類似状況を示すものは栃木県二宮町上大曾2号墳がある。玄室奥壁の両隅部にそれぞれ一括して9本(すべて同一の腸抉柳葉式)、8本(すべて同一の三角形式)が散乱していた。大刀の出土状態や位置から遺物は原位置とされ、鎌の鋒方向が不定なことは奥壁に立てかけられていたものと推測している(常川 1974)。ここでは追葬有無は言及されていない。奈良県天理市ホリノヲ6号墳でも玄室奥壁隅部で約15本一括のものについて鋒方向不定なことから矢盛具(皮革が残る箇金具を伴

出)があつたことを推定している(堀田他 1975)。他の遺物状況から第1木棺の足元位置にあたる
ので単位埋葬を示すと思われる。岡県平群町の鳥上塚古墳(前後円墳で巨石墳)では奥壁に軋形
式の矢盛具が立てかけてあつたことが確認された(伊達他 1977)。千葉県千葉市椎名崎3号墳では
攪乱を受けないとする葬道部奥隅で副葬品として、10本(すべて鐵身が菱形を呈する同巧品)一括
で出土している(沼沢他 1975)。玄室袖石と鋒が10~30cmしか離れず、鋒はすべて入口へ向か
なきは不揃いなので、矢柄(すべて痕跡がある)を想定すると東状で横たえたことは考えられ
ず、むしろ鐵を下位にして袖石に立てかけられていたと考えられる。このように矢として立て置か
れるものがあることから台耕地稻荷塚古墳例も大刀と同様に奥壁右隅に鋒を上にして立て置かれて
いた(矢盛具については不明)ものがそのまま腐朽崩落して二次移動したと考えられる。追葬が無
いとされているので単位埋葬状況を示すものである。県内例としてはこのような状況を明確に示す
ものはないが川越市牛塚古墳(8)の玄室(第一次主体)奥壁右隅付近で鐵鐵散乱(8本)部分の
漆膜状物質を軋として推定している。二次床面による攪乱があるが位置が類似する。立て置かれた
ことを推定させる他の例では、神奈川県伊勢原市尾根山3号墳で東室(竪穴式石室とされるが完存
していない)南隅の足下位に相当する部分に8本の鐵鐵が立てかけられて出土している(赤星
1974)。群馬県赤堀村峯岸山11号墳では玄室左側壁際の前左隅部で6本一括で出土し、鋒が奥へ向
くので矢柄を考えると横置きでは袖石部と重なるので立て置かれたと推定される(松村 1976)。鐵
身形は片刃箭式3、長三角形式1、柳葉式1、不明1である。

以上はB型(不定方向に散乱した状態で出土したもの)の埋葬状況についての検討である。これ
らは鋒を上あるいは下にした状態で立て置かれたことが推定できる。矢盛具については不明なもの
が多いが前者は軋形式、後者は胡錐形式の収束(納)状態でまとまっていたものが崩落腐朽したと
考えられる。鋒を下にするものは方向がある程度揃うものがある。位置は奥壁側が多く、又入口部
寄りにあることから玄室各隅部の利用が考えられるが身体の頭位・足下位に相当する。単位埋葬状
況は厳密に一体あたりの覆葬が確定なものは少なく、台耕地稻荷塚古墳の21本があるが、一括出土
の単位として6・8・9・9・10・15の数がある。類例の蓄積が必要であるが10本以下の少數例
は、A型出土状態での単位埋葬数量の特徴と類似して注意される。多數例については群馬県赤堀村
峯岸山17号墳の竪穴式石室の副室出土例であるが23本(勝扶柳葉式21、広根に属する長三角形式
2)があり(松村 1976)、千葉県千葉市椎名崎3号墳で36本(片刃箭式27、斧箭式1、長頭脇扶長
三角形式(広根)2、短頭脇扶長三角形式(広根)2、五角形(広根)2、不明2)がある(沼沢
1975)。椎名崎3号墳では東状で鋒が揃っているが位置や矢柄から立て置かれたと考えられる。こ
れらは一括集中出土の単位本数であり、後世の攪乱を含まないことから単位埋葬状況を示すと思わ
れる。なお単位数における形態組成はA型出土状態の特徴と全く同じである。単位埋葬の鐵鐵群單
位については検討を要する。先に挙げた栃木県上大曾2号墳は追葬が無いとすれば2単位群になる
が確認はむずかしい。しかしA型出土状態のものと類似特徴が多いことなどから1単位群が原則で
あると思われる。

以上の特徴から県内諸例を比較すると特に玄室各隅で出土するものが多いことが注意される。こ
れらは後世の攪乱か追葬移動によるものかは判断ができないが、この部分に立て置かれた例がある

ことから（横置き例もある）すべて他所からの移動とは考えられない。東松山市柏崎6号墳（29）の玄室入口寄りの隅で約30本分が束ねられた様子で出土したとされているものは、ここに立て置かれた可能性を示す。同じく青塚古墳（23）も玄室左側壁入口寄りと奥部造りつけ石棺の右前に集中しているものも同様である。その他神川村城戸野4号墳（87）や南塚原4号墳（88）、川本町鹿島11号・13号・20号（123・130・126）なども散乱状態であるが集中出土している。こうした場合も立て置かれたか否かは断定できないが、この部分に置かれていたと思われる。

以上、横穴式石室における鉄鏃出土状況について、単位埋葬状況の実態について検討した。これをまとめると、鉄鏃（矢）副葬には①横置きされるものと②立置きされるものの2種ある。①は身辺を中心に、平行して両側壁に沿って置かれ、②は身体の原位、足下位=夷趾、玄室入口付近に置かれるのが基本である。数量は①②ともに数本～10数本の少数例が多く、6・9本単位が注意される。形態組成については①②ともに同一のものを揃える、いくつかの形態を混在させるという2つがあるが前者が基本である。単位埋葬一単位の鉄鏃群が基本と考えられる。これらは時期や古墳規模等を指象しており、かなり概説的であるが、鉄鏃副葬の意義に関して単位埋葬状況の復元を試みた。

(小久保徹)

3. 古代の文献にあらわれた弓矢

(1) 弓矢の初見記事

「其の地には牛・馬・虎・豹・羊・鶴無し。兵には矛・楯・木弓を用う。木弓は下を短く上を長くし、竹箭は或は鉄鏃、或は骨鏃なり。」

この記録は、いわゆる『魏志倭人伝』中の倭人の風俗を示したもの一部で、日本の弓矢に関する最も古い文献史料の1つである。

「弓」あるいは「矢」そのものは、発掘調査等によって、縄文時代から使用されていたことが知られているが、それは主に対動物用の「狩猟用具」であったろう。弓矢が対人用の「武器」としての性格を持ち始めるのは、稻作などの農業を生計基盤とする弥生時代以降と考えられる。

この変遷について笹山晴生氏は、山口県豊浦郡土井ヶ浜遺跡で出土した、11もの鏃が身体に残っている男子人骨の例を挙げ、「弥生時代という時代は縄文時代にくらべて、他人との競争のうまみがより大きくなった時代である。それだけに集落にとっては、その防衛が非常に切実なものとなつた時代でもあった。」と述べている（笹山 1975）。

このことは、発掘調査の成果においては、弥生時代の環濠集落を主とする、防衛を意識した造構によって傍証される。

そして、さらに発達した武器による争いが行なわれる古墳時代に至って、弓矢は鏡・刀・剣等とともに墳墓に副葬されるようになる。

この章では、古代において弓矢が人々にとってどのような意味をもっていたのかを文献の上から見てみよう。

(2) 弓矢に関する記事の諸類型

『魏志倭人伝』『古事記』『日本書紀』『風土記』『律令』等にあらわれる弓矢、あるいはそれ

に関連する武器・武具類の記事を内容によって分類すると、おおよそのところ次の5タイプに分かれれる。

- A 権威・靈力・男性等の象徴
- B 説話
- C 実用の武器
- D 地名・人名のいわれ
- E 戦掌

Aタイプの例

① 素戔鳴尊が天に昇り来るのを知った天照大神が、男装し、「背に千箭の羽と五百箭の羽とを負ひ、臂には棗威の高納を着き、弓矢振り起て、剣柄急振りて」武装する。

(日本書紀 神代下 第6段、古事記にも同様の記事)

② 垂仁天皇27年に「祠官に令して、兵器を神の幣とせむ」とはしむるに、吉し。故、弓矢及び横刀を、諸の神の社に納む。(中略) 蓋し兵器をもて神祇を祭ること、始めて是の時に興れり。

(日本書紀 垂仁天皇二十八年八月条)

③ 大物主神が勢夜陀多良比賣を「見惑でて、其の美人の大便為れる時、丹塗矢に化りて、其の大便為れる満より流れ下りて、其の美人の宮登を突きき。」

(古事記 中巻)

5タイプの中で、特にAタイプの記事が多くを占めるが、古代において、弓矢が人々に及ぼした精神面での影響は、それが初源的な道具であるだけに大きかったものといえる。

Bタイプの例

① 高御座靈尊が葦原中國に造わした天稚彦(古事記では天若日子)が長い間帰らないので、使に雉を遣わしたところ「天稚彦、乃ち高皇產靈尊の賜ひし天鹿見弓・天羽羽矢を取りて、雉を射て斃しつ。其の矢雉の胸を洞達りて、高皇產靈尊の座します前に至る。時に高皇產靈尊、其の矢を見して曰はく、「是の矢は、昔我が天稚彦に賜ひし矢なり。血、其の矢に染れたり。蓋し國神と相競ひて然るか」とたまふ。是に、矢を取りて還して投げ下したまふ。其の矢落ち下りて、則ち天稚彦が胸上に中ちぬ。(中略) 此世人の所謂る、反矢畏むべしといふ様なり。」

(日本書紀 神代下 第九段)

この記事は、『古事記』にもほぼ同じ内容のものがあり、「雉の歎使」(梨のつぶての意)として記されている。(『古事記祝詞』頭註)

② 「兄火闘降命、自づからに海幸有します。弟彦火火出見尊、自づからに山幸有します。始め兄弟二人、相謂ひて曰はく、「試に易幸せむ」とのたまひて、遂に相易ふ。各其の利を得ず。兄悔いて乃ち弟の弓箭を還して、己が釣鉤を乞ふ。」

(日本書紀 神代下 第十段)

いわゆる海幸・山幸説話である。生業と弓矢が関わる記事は少ないが、『日本書紀』は4つの史料からこの説話を引用している。

Cタイプの例

このタイプの典型が賈頭に記した『魏志倭人伝』の記事である。倭人伝には、他にも次のような記事がある。

- ① 「其の四年、倭王、復た使大夫伊聲者・抜邪狗等八人を遣わし、生口・倭綿・許青縫・縣衣・帛布・丹・木猪・短弓矢を上獻す。」

この記事に関しては、後註に「猶」について、「猶の誤りか、ゆづか(肥)、弓の中央の手と/or ところ。那珂博士が丹木猪短弓矢を一つのものとしているのはいかがなものであろうか。」(『魏志倭人伝』後註)と解説がある。

「猶」が「猪」の誤りとすると、那珂通世の解は「丹木猪短弓矢」となり、丹塗りで猶のある(附部に木皮等を巻いたものか)木製の短弓(現在では約160cm以下)のものを短弓というようである)と矢の意になる。那珂説の方が理解しやすいように思う。

また、『後漢書倭伝』には、

- ② 「其の兵には矛・楯・木弓・竹矢有り、城は骨を以て鐵を為る。」

とあり、『隋書倭國伝』には、

- ③ 「弓・矢・刀・盾・弩・箭・斧有り、皮を漆りて甲と為し、骨を矢箙と為す。兵有りと雖も征戰無し。」

となる。

『後漢書』は『魏志』を参考にしているし、『隋書』も同様であるが、新史料として「兵有りと雖も征戰無し」と載せている。この記事は、7世紀初頭にあたる部分に載っているが、当時の状況を反映しているものであろうか。

7世紀初頭は、推古朝であり、聖德太子摂政、遣隋使派遣の時代である。中央集権を目指した時代であるから、ある程度、力関係による秩序が保たれていたと見てもよいだろう。

また、『律令』の軍防令には、兵士が携行する物の列記があり、武器としては、

- ④ 「人毎に、弓一張、弓弦袋一口、箇弦二条、箭筒五十隻、胡簾一具、大刀一口、刀子一枚」と記されている。唐令を手本にしているとはいって、矢の数が20本も多く、特色を表わした重要な一項である。

また、馬に乗り弓を使う騎兵を重んじたとみえ、「弓馬に便ならむ者」をとりたてる条文がいくつかある。

Dタイプの例

- ① 「又、波須武の野あり。倭武の天蓋、此の野に停宿りて、弓馬を修理ひたまひき。因りて名づく。」

(『風土記』 常陸国風土記 香島郡)

- ② 「加賀の郷 郡家の北西のかた廿四里一百六十歩なり。佐太の大神の生れまししころなり。御祖、神魂命の御子、佐佐加比売命、『闇き岩屋なるかも』と詔りたまひて、金弓もちて射給ふ時に、光加明きき。故、加加といふ。神龜三年、字を加賀と改む。」

(『風土記』 出雲国風土記 鳥根郡)

といったように、地名の緒源を伝えるものと、

③ 「(前略)此の太子の御名、大柄和氣命と負はせる所以は、初めて生れましし時、弓の如き矢、御腕に生りき。故、其の御名に著け。」(柄は、弓弦が左手首を打つのを防護するためのもの。)

(古事記 中巻)

というように、人名の由来を述べるものがある。

Eタイプの例

① 「即ち紀国^{いみべ}の忌部^{ときつち}の祖^{おや}の御名^{みゆめ}を以て定めて、作^{つくり}立^{たて}て者^しとす。彦長知神^{ひこさちのかみ}を作^{つくり}立^{たて}て者^しとす。天日^{あめのひ}御^{みこと}神^{かみ}を作^{つくり}立^{たて}て者^しとす。天日^{あめのひ}荒^{あら}神^{かみ}を作^{つくり}立^{たて}て者^しとす。」

(后は弓矢と密接に関わりあう。)

(日本書紀 神代下 第九段)

② 「山陵^{さんりょう}の事奉^{じぶん}するに至りて、乃ち弓部稚彦^{わらわ}をして弓を造らしめ、倭姫部天津真浦^{あむかひのみなみ}をして真廟^{まほ}の鐵^{てつ}を造らしめ、矢部^{やべ}をして箭^くを作^{つくり}しむ。」

(日本書紀 総記天皇即位前紀)

③ 「二年の春二月に、天皇^{あまのひ}、子無^{むす}ことを恨みたまひて、乃ち大伴室屋大連^{おほともむろや}を諸國に遣して、白髮部^{しらかみべ}舍人^{しらかみ}・白髮部^{しらかみべ}君^{くに}・白髮部^{しらかみべ}臣^{しも}・白髮部^{しらかみべ}將^{まつ}を貿^まく。」(親負は、矢を入れる道具であるニキを背負う兵士の意)『日本書紀』補註)

(日本書紀 清寧天皇二年)

といったように職掌をあきらかにするものである。

以上のようにタイプ分けをしてみたが、多くの記事の中には、要素が重複するものもある。

テーマとしての鉄鎌を具体的に追うにはCタイプの記事を中心とせざるを得ないが、他タイプの記事の中にもヒントを与えてくれるものがある。

(3) 弓矢の名称と実物

前項でとりあげた記事の中で、最も具体性を持つのは、やはり軍防令の規定である。

弓を持ち、弓弦袋に副弦を入れ、故錄に矢50本を入れるという形が想定できる。(唐令の場合、矢は30本と規定されており、日本でも後に30本に減じられる。)

正倉院宝物には、この令を意識したと考えられる故簾と矢のセットが現存する。そのうちの一例は、鑿箭式の鎌を装着した矢46本に、上差矢として大型の三角形式の鎌を装着した鹿角製の四つ目鎌矢1本である。(矢3本は欠損か)

またある例は、鑿箭式の鎌を装着した矢48本、片刃箭式の鎌を装着した矢1本、それに上差矢として大型の三角形式の鎌を装着した鎌矢1本の計50本である。

これらは、必ずしもそれ以前の規定を反映しているとはいえないが、古墳出土の鉄鎌を考える上で参考になりうるはずである。

次に、史料の中から特徴のある弓・矢の名称をとりあげてみる。

弓の名称としては、天鹿兒弓・天鹿弓・楓弓・天之波士弓・梓弓・檀弓・鐵弓・金弓・猪鹿弓・角の弓箭・金の弓箭などがみえる。

矢および鐵の名称としては、天羽羽矢・天眞鹿兎矢・真麿の鐵・まり矢・新矢・鳴鏑・天之波波矢・天之加久矢・丹盃矢・忌矢・鉄箭・金箭・猪鹿矢・楓矢などである。

機・柵（波土）・杵・櫻は木製の弓・矢の樹種を示すもので、現存する正倉院宝物の弓や、遺跡より出土する弓は梓・櫻等が中心である。

鹿児弓・矢、猪鹿弓・矢、角の弓箭は、鹿や猪を射る為の弓矢（『日本書紀』頃註）、あるいは弓弭・鐵に鹿や猪の骨角を用いたものであろうか。

鉄弓・矢、金弓・矢、金の弓箭も同様に弓矢の一部に、鉄を用いたか、金による装飾を施したものであろう。

鳴鏑・まり矢・忌矢は同種のもので、戦の初めに放たれる特別な意味をもつた矢である。これらは、前述した正倉院宝物の矢50本セットの中の上差矢をさるものと考えられる。

このように見えてくると、古代の人々は弓矢に非常に細かい配慮をしていることがわかる。

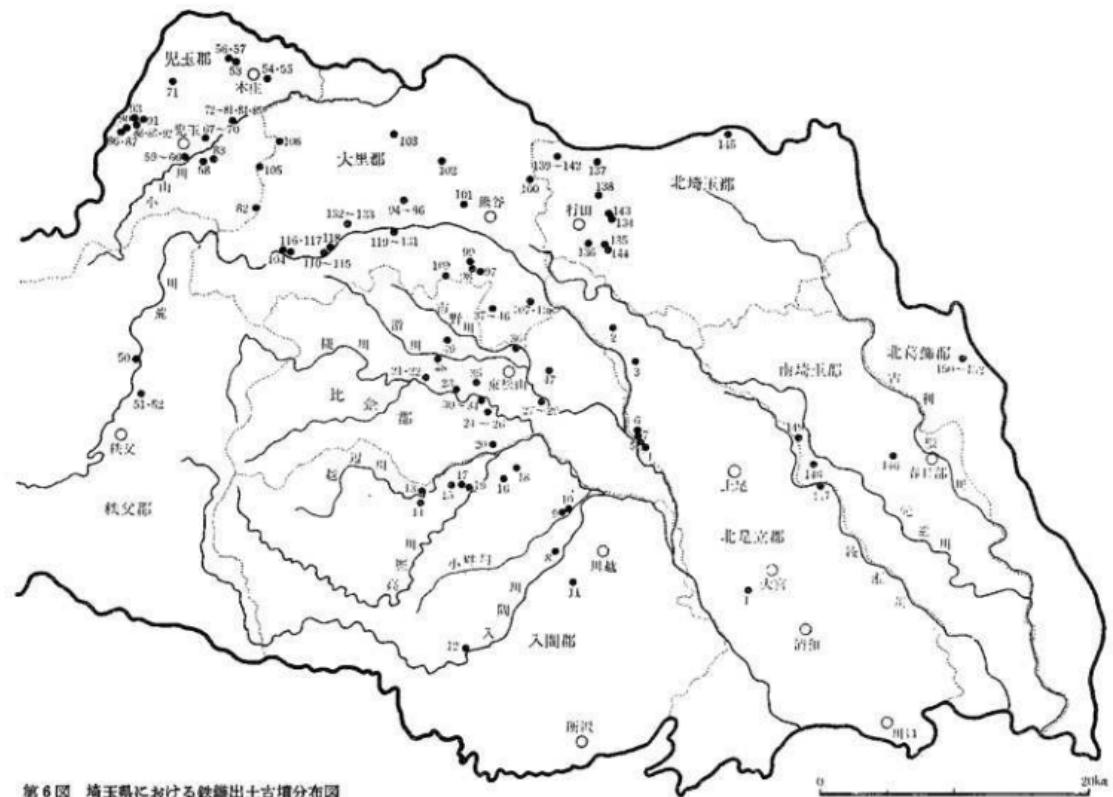
様々な弓矢に、各々の意味をもたせ、意識して扱っており、精神的な面での重要な役割の一端を荷っていたといえる。

また、具体的に記されている弓矢（例えば軍防令）は、現存する弓矢（出土遺物や宝物）によつて傍証され得るし、その逆もまたあり得るだろう。

古墳の副葬品の調査・研究もこのような面を意識して行なう必要がある。

弓や矢柄は、腐蝕してすでに失なわれていることが多いが、比較的残りやすい鐵鏑の数・方向・位置・状態等を詳細に記録し、埋葬された当時により近い復元がなされることが、研究を進めていく上で重要であるといえるだろう。

（浜野一重）



第6図 埼玉県における鉄鏃出土古墳分布図

付 埼玉県における鉄鎌出土古墳一覧

昭和59年3月現在までの文献に記載されたものについて収録した。遺物名称は文献記載に従った。埴輪の有無は確認されたものを○×で示した。◎は須恵器、◎は土師器を示す。文献は文献一覧の通番号で示した。コードは前2ヶタは埼玉県市町村コード(「埼玉県遺跡地名表1975」)後2ヶタは各市町村内での通番号である。今後更に増加することが予想される。

No.	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 遺 物 (数量)	埴 輪	土 器	文 献 コード
1	台耕地稻荷塚	大宮市三橋4丁目	円	横穴式石室	鐵鏹21、大刀3、ガラス製小玉33、漆塗木製小玉5、切子玉9	×	◎壺	146 1201
2	宮	登鴻巣市大字宮前	円	横穴式石室	鐵鏹26(30本分)、鐵釘4、碧玉製管玉1、瑪瑙製丸玉10、水晶製切子玉2、琥珀製淡玉2	×	◎壺	28 1301
3	浅間塚	鴻巣市瀧馬室	円	横穴式石室	鐵鏹7、直刀1、刀子4、留金具2、銅片數枚、金環1、銀環1、銅環1			19 1302
4	川田谷ひさご塚	桶川市川田谷字若宮	前方後円	横穴式石室	鐵鏹23、直刀1、鐸、貴金具1、刀子1、串5、鍔粗1、鍔具1、辻金具7	○	◎杯提、瓶、壺、長頭壺、◎高杯、	98 1501
5	城髪山2号	桶川市川田谷	円	横穴式石室	鐵鏹8以上、短刀1、刀子3、鐸1、耳環2、水晶製切子玉9、碧玉製管玉1、瑪瑙製丸玉3、ガラス製白玉7、金網製空玉2	×		206 1502
6	西台7号	桶川市川田谷字西(西台遺跡2号)	円	横穴式石室	鐵鏹10本1束、直刀3、金網帶5、水晶製切子玉3、ガラス製丸玉14、ガラス製小玉54	○	◎提瓶、横瓶、壺	105 1503
7	原山23号	桶川市川田谷	円	横穴式石室	鐵鏹7、大刀2、短刀2、鐸1、耳環3			206 1504
8	牛	桶川越市牛塚	前方後円	横穴式石室	(第1次埋葬主体部)鐵鏹10 直刀片1、銅片若干、雲珠1、金網片1、碧玉製管玉2、水晶製切子玉5、ねり玉2、ガラス玉6 (第2次埋葬主体部) 鐵鏹18、直刀片1、鐵製小尻1、千段巻柄頭1、鐵製鐸1、刀子3、雲珠1、鏡板1、金網馬程3、ガラス製小玉35、金網製指輪2	○	◎提瓶、台脚、壺、心杯	123 1901
9	下小坂1号	川越市下小坂	円	木 壤 塚	鐵鏹11、直刀1、刀子1、ガラス製小玉198、	×		123 1902

No.	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 遺 物 (数)	説 明	土 器	文 献 号
10	ど う ま ん	塚川越市下小坂	円	木棺 直葬	鉄錆 2 束、腰錆文帯変形帶 列錆 1、滑石製白玉 162、 直刀 2、挂甲 1、辻金具 1、 刺形青銅鏡 3、柄円状鏡板 2、 十字形留金具 2、鍔丸 3、 尾範 1、鈕状小形利器 1、 斧頭 1、瑪瑙石 1、鏡皮残片、 麻布	×		47・1903 273
11	南大塚	2 号 川越市豊田本字中原	円	横穴式石室	鉄錆 3、直刀 1、刀子 1	○ ②片、②块		1461904
12	狭山市鎌井	狭山市鎌井字武口 1号	横穴式石室	鉄錆 3、直刀 1、金環 1				1302201
13	毛呂山	109 号 毛呂山町西戸字松の外	円?	横穴式石室	鉄錆多枚			1382601
14	苦 林 古 墳	毛呂山町川角穴上	不明	横穴式石室	鉄錆 7、耳環 3、刀子 1	②坏、堵		1382602
15	善能寺万瀬	坂戸町善能寺 105号	不明		鉄錆 5			342701
16	坂 戸	68 号 坂戸市石渡戸字新山	円	横穴式石室	鉄錆断片、金環 1、銀環 1			2732702
17	山王塚	坂戸市新堀字橋場 91号	円	横穴式石室	鉄錆片、馬具、金環、直刀、 鉄製斧頭、瑪瑙勾玉 3、空 玉勾玉 1、管玉 2、ガラス 玉 3、緑色ガラス小玉 1、 練玉 1			1382703
18	新町坂戸	36号 坂戸市石井字新町	円	横穴式石室	鉄錆片 1、金環 1、銅環 2			2704
19	麻利支天塚	坂戸市北峰字前田 坂戸 80号	円	横穴式石室	鉄錆多枚、直刀 2、金銅環 2、銀環 1、銅環 1			1382705
20	舞 台	1 号 東松山市田木字舞台	円	横穴式石室	鉄錆 8、直刀 3、刀子 7、 鐸 5 (満状遺構) 刀子 1	× (満状遺構) 内広口壺、 長頭壺、 甕、瓶		1503401
21	西 原	1 号 東松山市上唐子字西原	方?	横穴式石室	鉄錆 7、束頭大刀 1、銅鏡 1	×		1783402
22	西 原	3 号	円	横穴式石室	鉄錆 2、大刀 1、刀子 2	×		1783403
23	青	塚 東松山市下唐子字原坂口	円	横穴式石室	鉄錆 48、刀装具 2、用途不 明鉄製金具 6、刀子 2、鍔 金具 3、鞍 3、管 1、吉 奈 1、空珠 1、辻金具 5、鍔 金具 7、鍔金具 2、銀環 2、 水品製勾玉 2、ガラス製勾 玉 4、瑪瑙玉製勾玉 3、玻璃 製小玉 3、ガラス製小玉 10	②高坏、坏、 甕、合付培 器		533404

No.	名 称	所 在 地	填 形	内部主体	出 土 遺 物 (数量)	填 槽	土 器	文獻	コード
24	隈訪山 1号	東松山市高坂字西本宿	円	粘土部2基	(1号梯) 鉄鏃3、劍2、碧玉製管玉8、ガラス製小玉12、琥珀製切子玉2 (2号梯) 鐵鏃7、大刀1 用途不明鉄製品3、碧玉1、 辻金具4、鍛具1、鈴付腕輪1、垂飾波片10枚片	×	②杯、壺	1093405	
25	隈訪山 3号	"	不 明	横穴式石室	鐵鏃11、大刀3、刀子2	×		1093406	
26	隈訪山 4号	"	円	横穴式石室	鐵鏃6以上、大刀4、刀子3、金環4、碧玉製管玉4 ガラス製小玉22、土銀丸玉28、土製圓玉6	○		1093407	
27	柏崎 4号	東松山市大字柏崎	円	横穴式石室	鐵鏃7、直刀断片2、刀子1、金環1、用途不明鉄製品1	×	②脚付盤	813408	
28	柏崎 5号	東松山市柏崎	円	横穴式石室	鐵鏃15以上(88)、大刀4、刀子4、用途不明鉄製品1、金環10、碧玉製管玉1、ガラス製小玉10、ガラス製白玉3	×	②高杯、环	813409	
29	柏崎 6号	"	円	横穴式石室	鐵鏃40、大刀片2、錐2、 刀子4、金環2、碧玉製管玉1	×		813410	
30	附川 1号	東松山市石橋字附川	円	横穴式石室	鐵鏃8、貴金属2、用途不明鉄器1、金環1、ガラス製小玉49、水晶製切子玉6	×		333411	
31	附川 5号	"	不 明 (古墳跡)	横穴式石室	鐵鏃5、直刀片3、用途不明鉄器2、水晶製勾玉1	×		333412	
32	附川 6号	"	円	横穴式石室	鐵鏃6、用途不明鉄器2	×		1503413	
33	附川 7号	"	円	横穴式石室	鐵鏃10(28)、直刀3、貴金属1、用途不明鉄器7、刀子4、金環4、琥珀製丸玉(?)1 滑石製筋輪車(封土中)1	×	②杯	1503414	
34	附川 8号	"	円	横穴式石室	鐵鏃15、直刀4、錐1、刀子2、銅製耳環6、ガラス製小玉10、水晶製切子玉6、碧玉製白玉1、銅製飾金具6	×	②提瓶	1503415	
35	青島 12号	東松山市石橋字小林	円	横穴式石室	鐵鏃			123416	
36	岩鼻 3号	東松山市松山字岩鼻	円	粘 土 槽	鐵鏃1	○		249-3417 273	
37	三千塚弁天塚 古墳	東松山市大谷	前方後円壘穴式石室	鐵鏃片、鐵片、		○		2493418	

No.	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 遺 物(数点)	埴 土 器	文 標	ヨー
38	三千塚 第3支群3号	東松山市大谷	円	横穴式石室	鐵鏃	×	363419	
39	三千塚 第3支群4号	"	円	横穴式石室	鐵鏃、ガラス小玉156、銀環、 刀子、黃金具	× 沖縄竪	363420	
40	三千塚 第3支群16号	"	円	横穴式石室	鐵鏃、直刀、金銅環	×	363421	
41	三千塚 第5支群2号	"	円	横穴式石室	鐵鏃1、鐵片6	○	363422	
42	三千塚 第5支群3号	"	円	横穴式石室	鐵鏃9、直刀、刀子1、鐸2、 鐵環1、不明鐵器1	×	363423	
43	三千塚 第5支群6号	"	円	横穴式石室	鐵鏃1	×	363424	
44	三千塚 第7支群5号	"	円	堅穴式石室	鐵鏃	○	363425	
45	三千塚 第7支群28号	"	円	横穴式石室	鐵鏃片	○	363426	
46	三千塚 第8支群3号	"	円	横穴式石室	鐵鏃、刀子、柄頭	○ 沖破片	363427	
47	かくと塚	吉見町大字久米田	円	横穴式石室	鐵鏃、土製大刀1、金環5 ガラス小玉40、刀子、直刀 武月、棒状鐵器	× 为高杯、蓋、平 环、底、平 盤、合付蓋、 短頭蓋	139+3807 166	
48	月輪1号	滑川村月輪 (墨田遺跡) 字西荒井 5号	円	横穴式石室	鐵鏃9、直刀1、土製正4 耳環2、留金具2	○	58+3901 208	
49	わたこ塚	滑川村羽尾字大谷	円	横穴式石室	鐵鏃10、刀子2、耳環1、 銅鏡、玉類	○	583902	
50	飯塚招木	秩父市寺尾 102号	円	横穴式石室	鐵鏃3、刀子1	× 忽蓋	2644301	
51	原 谷 4号	秩父市大野原	円	横穴式石室	鐵鏃片、人骨2体分		1384302	
52	原谷小学校内	秩父市大野原	円	横穴式石室	鐵鏃1、藤手刀1、直刀3 耳環1		594303	
53	御 手 長	山本庄市大字小島 字上前原	円	横穴式石室	鐵鏃62(84片)、大刀1、鐸1 柄頭1、陽金物、刀掛具1、 鏡4、小札10、鏡具1、飾 金具5、留金具17、不明鐵 製品11、耳環8、小玉243、 ガラス製丸玉26、石質不明 丸玉1	○ 忽高坏	2005301	

No.	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 遺 物 (数量)	埴輪	土 器	文獻	考 下
54	塚 合 41号	本庄市字綜合	円	横穴式石室	鐵鏃14、刀柄残欠部1、帶 足金具1、黃金具3、足金 具1、鍊1、刀子2、目釘2、不 明鉄製品1、金環6、ガラ ス製玉1、碧玉製玉10	○		945302	
55	塚 合 43号	〃	円?	横穴式石室	鐵鏃6(11片) 黃金具1、 足金具1、銅2、刀子1、 釘13、釘状品1、不明鉄器 1、金環1	×		945303	
56	下野堂 29号	本庄市下野堂	円	横穴式石室	鐵鏃多数、直刀1			1835304	
57	下野堂 30号	〃	円	横穴式石室	鐵鏃多数、直刀2、銅環2			1835305	
58	庚 中 塚	尼玉町秋山宿田保	円	横穴式石室	鐵鏃29(34) 大刀2、柄頭1 黃金具1、鍊1、刀子1、 鍊金具1、引手1、銅珠4 足金具1、鐵片(鉄金具 片)13、棒状金具8、鉄片30、 金屬環3对、翡翠製勾玉1、 瑪瑙製勾玉4、碧玉管玉 1ガラス製丸玉7、ガラス 製小玉9、ガラス製玉4	○ △高坏 △坏		205401	
59	長 沖 3号	尼玉町長沖	円	横穴式石室	鐵鏃4、直刀1、兩頭座金 付留金具3、刀子2、耳環 (銅芯)2、勾玉10、管玉 1、丸玉10、切玉10	○ △要 △坏		2395402	
60	長 沖 8号	〃	帆立貝式	横穴式石室	鐵鏃5、刀子1、金環(銅 芯)1	○ △要		2395403	
61	長 沖 9号	〃	円	横穴式石室	鐵鏃1、直刀1、鍊金具1 兩頭座金付留金具4、耳環 (銅芯2、銅芯2)4、 ガラス小玉1	×	△平瓶	2395404	
62	長 沖 10号	〃	円	横穴式石室	鐵鏃9、直刀1、刀子1、 丸玉58	×	△坏	2395405	
63	長 沖 11号	〃	円	横穴式石室	鐵鏃7、耳環(銅芯)1、 丸玉19	×		2395406	
64	長 沖 21号	〃	円	横穴式石室	鐵鏃16、刀子3、兩頭座金 付留金具8、ガラス小玉39	○	△小型壺	2395407	
65	長 沖 23号	〃	円	横穴式石室	鐵鏃4、兩頭座金付留金具1 金環(銅芯)1、ガラス小玉3	○	△要	2395408	
66	長 沖 28号	〃	円?	横穴式石室	鐵鏃1(填丘覆土中)	○	△高坏	2395409	
67	生野山 7号	尼玉町生野山	円	横穴式石室	鐵鏃	○		1455410	
68	生野山 9号	〃	円	櫛標	管玉、鐵鏃	○	△高坏	1455411	

No	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 遺 物 (数量)	埴 輪	土 器	文 献
69	生野山 65号	児玉町生野山	円	横穴式石室	鐵鏃、直刀、人骨	○ ◎		1455412
70	生野山 68号	"	円	壁櫓	鐵鏃	x		1455413
71	大御堂稻荷塚	上里町大御堂北林	円	横穴式石室	鐵鏃21、直刀3、金環(銅芯)6	○		1065501
72	塚本山 3号	美里村下児玉字西山	円	横穴式石室	鐵鏃3、刀子1	x ◎环		1995601
73	塚本山 9号	"	円	横穴式石室	鐵鏃4、大刀1、円筒状鉄器1	x ◎甕 ◎环		1995602
74	塚本山 11号	"	円	横穴式石室	鐵鏃6、刀装具(銅)1	x ◎細頸甕 ◎环		1995603
75	塚本山 17号	"	円	横穴式石室	鐵鏃6、棒状鉄器3、刀子1、金環(銅芯)3	x ◎手挽土器		1995604
76	塚本山 18号	"	円	横穴式石室	鐵鏃2、大刀1、刀子1、耳環3(銅芯内金滴1)ガラス玉3	x ◎甕		1995605
77	塚本山 21号	"	円	横穴式石室	鐵鏃1、刀子1	x		1995606
78	塚本山 22号	"	円	横穴式石室	鐵鏃20、刀子1、銅環1	x		1995607
79	塚本山 24号	"	円	横穴式石室	鐵鏃4	x ◎环		1995608
80	塚本山 27号	"	円	横穴式石室	鐵鏃4、大刀1、鐸1、銅環2	x ◎長頸甕、甕、◎环		1995609
81	塚本山 29号	"	円	横穴式石室	鐵鏃1、刀子1	x ◎長頸甕 ◎环		1995610
82	一 本 松	美里村猪俣字地台	円	横穴式石室	鐵鏃5、鉄劍1、刀子2	○ ◎提瓶		2305611
83	広木大町7号	美里村広木字魂瀬	円	横穴式石室	鐵鏃10、刀子5、耳環3	○ ◎高环、甕		2295612
84	塚本山 19号	美里村下児玉字西山	円	横穴式石室	鐵鏃2、刀子1、大刀1、原絆大刀1、耳環(銅芯)2	x ◎提瓶、蓋 鐵鏃瓶、甕 ◎环		1995613
85	塚本山 1号	"	円	横穴式石室	鐵鏃2、鐸1	○ ◎甕		1995614
86	城戸舟 2号	神川村大字新宿	円	横穴式石室	鐵鏃27、直刀1、棒状鉄器2 刀子3、鐸1、鉄具2、 鐵金具4	○ ◎甕		1445701

No	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 遺 物 (数量)	埴輪	土 器	文 献
87	城戸齊 4号	神川村大字新宿	円	横穴式石室	鉄鏃18、棒状铁器1、刀子1 帽子1、耳環(鉄製、銅製)2 男子玉4、管玉2、小玉3 耳環形銅製品1	○	达斐	1445702
88	南塚原 4号	神川村大字 新里南塚原	円	横穴式石室	鉄鏃10、直刀1、刀子3	○		1445703
89	南塚原 5号	"	円	横穴式石室	鉄鏃5、鉗1、棒状铁器1	○		1445704
90	十二ヶ谷戸 3号	神川村大字池田 字福荷塚	円	横穴式石室	鉄鏃5、用途不明鉄製品3 耳環2、ガラス製小玉1、 水晶製切子玉3、滑石製丸 玉1、他丸玉2、ガラス製 白玉3、土製白玉7、瑪瑙 製算盤玉1	○	②甕、坏、 坏蓋、便蓋 ②甕	1445705
91	神川村 N°137 古墳	神川村二の宮 字東塚原	円	横穴式石室	鉄鏃8、直刀2、刀子3、 鉗1、瑪瑙製勾玉3、梨木 製管玉2、水晶製算盤玉2 水晶製切子玉1、滑石製丸 玉3、ガラス製丸玉3、土 製丸玉9	○	②坏、坏蓋 ②坏、甕	2705706
92	南塚原 7号	神川村新里 字南塚原	円	横穴式石室	鉄鏃2以上、金環1、足金 具(刀装具)1	?		1445707
93	北塚原古墳群	神川村北塚原	前方後円	横穴式石室	鉄鏃、直刀、刀子、金環、 ガラス玉、勾玉等	○	②高坏、逸 ②坏	1205708
94	三ヶ尻林 4号	熊谷市三ヶ尻	円	横穴式石室	直刀4、鉄鏃26、刀装具2 弓金具3、刀子10、銅鏡4 耳環4、水晶製切子玉7、 ガラス小玉126、土製小玉、 埋木玉1	○	②甕、高坏 短颈瓶、 提瓶	2775901
95	三ヶ尻林 5号	"	円	横穴式石室	鉄鏃3、刀装具1、鉄片7 土製管玉1、土製小玉19、碧 玉製管玉3、滑石製小玉2	○	②甕	2775902
96	三ヶ尻林 7号	"	円	横穴式石室	鉄鏃6、直刀片、耳環2、 弓金具3、人齒2	○	②甕、②甕	2775903
97	源戸山 2号	熊谷市楊井 字源戸山	不明	横穴式石室	鉄鏃約40、管玉1、切子玉2			1405904
98	伊 労 山	熊谷市楊井	前方後円	横穴式石室	鉄鏃2、刀子2、直刀1、 馬具類			1385905
99	万吉下原 5号	熊谷市万吉字下原	円	横穴式石室	鉄鏃、耳環	○	②片	1515906
100	中 条 大 塚	熊谷市中条	円	横穴式石室	鉄鏃、小札、銅製柄、銅製 諸金具、金箔、铁钉	x	②甕	2765907
101	葉師堂古墳	熊谷市坪井	円	横穴式石室	鉄鏃、直刀、切子玉、銅鏡	○		2735908

No.	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 遺 物 (数量)	埴 輪	土 器	文 献
102	新ヶ谷戸 1号	熊谷市上奈良 字新ヶ谷戸	円	横穴式石室	铁鎌 4、直刀 2、刀子 1、 铁製品	×	②長頸瓶、 平瓶、瓶、 环、③杯	2715909
103	火 の 見 墓	深谷市原郷 字木の本	円	箱 式 石 室	直刀、短刀、铁鎌、壮年男 子頭骨	×		2716001
104	北塚壁遺跡 2号	寄居町中小前田	円	横穴式石室	铁鎌、銅劍	○	②匙	2276201
105	安光寺 2号	鶴ヶ谷町本郷 字清水谷	円	粘 土 壁	铁鎌 17、直刀 1、劍 1、箇 1 铁斧 1、ガラス玉 1、白玉 4	×	③高坏、壺	2586301
106	西 山 5号	鶴ヶ谷町山崎 字清水山	前方後円	横穴式石室	铁鎌、直刀、刀子、算盤玉 小玉、白玉、切子玉	○		68-6302 273
107	円 山 1号	大里村箕輪字円山	円		铁鎌	○	②	2736401
108	円 山 2号	〃	円	(床)	铁鎌、柄頭、刀子、頬環	○	②長頸壺 ③壺	2736402
109	野 原 古 墳	江南村野原	前方後円	横穴式 石室 2	(後円部石室) 铁鎌 19、直 刀 2、刀子 3、(前方部石 室) 直刀 1、刀子片	○		376501
110	黒 田 3号	花園村黒田 字上川端	円	横穴式石室	铁鎌 1、耳環 2	○	②匙	1686601
111	黒 田 4号	〃	円	横穴式石室	铁鎌 13、刀子 1、簪 1、筒 形金具 2、蜜珠 3、玻璃 2 耳環 2、猪玉製管玉 5、ガ ラス製丸玉 8、ガラス製小 玉 9、滑石製切子玉 1	○		1686602
112	黒 田 5号	〃	円	横穴式石室	铁鎌 4、耳環 1	×		1686603
113	黒 田 8号	〃	円	横穴式石室	铁鎌 5、大刀 1、刀子 1、 耳環 1、碧玉製管玉 1、赤 瑪瑙製小玉 1、ガラス製小 玉 1、水晶製切子玉 2、碧 玉 24	○		1686604
114	黒 田 9号	〃	円	横穴式石室	铁鎌 6、大刀 2、刀子 2、 瑪瑙製勾玉 5、碧玉製管玉 18、ガラス製小玉 66、ガラ ス製丸玉 27	○	②甕	1686605
115	黒 田 11号	〃	円	横穴式石室	铁鎌 15、刀子 4、耳環 6、 碧石製管玉 1、滑石製管玉 1、ガラス製小玉 217、ガ ラス製丸玉 15、瑪瑙製切子 玉 1、水晶製切子玉 2、碧 玉空玉 1、青銅製刷 1	○		1686606
116	小前田 70号	花園町小前田	円	横穴式石室	铁鎌			216607
117	小前田 88号	〃	円	横穴式石室	铁鎌片 2、直刀 2、耳環 2 刀裝具 3、切子玉 2			216608

No	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 造 物(數量)	埴 輪	土 器	文 献
118	馬 田	17号 花園町黒田 字上川瀬	円	横穴式石室	鐵鏹 8、直刀 1、刀子 3、 金環 1、ガラス玉 46	○	◎	2816609
119	鹿 島	1号 川本町木田字台	円	横穴式石室	鐵鏹 25、直刀 1、足金具 1 青金具 1、輪尻 1、佩飾 鐵製品 1	○	◎	1366701
120	鹿 島	5号	〃	円?	横穴式石室 鐵鏹 2	×		1366702
121	鹿 島	8号	〃	円	横穴式石室 鐵鏹 2、直刀 1、刀子 2、 金環 2	×		1366703
122	鹿 島	9号	〃	円	横穴式石室 鐵鏹 5	×		1366704
123	鹿 島	11号	〃	円	横穴式石室 鐵鏹 19、刀子 2、金環 1	×		1366705
124	鹿 島	12号	〃	円	横穴式石室 鐵鏹 3、鍔 1、刀子 1、 その他鉄器(棒状金具)1、 金環 3	×		1366706
125	鹿 島	19号	〃	円	横穴式石室 鐵鏹 12、刀子 1、金環	×		1366707
126	鹿 島	20号	〃	円	横穴式石室 鐵鏹 27(?) 鍔口金具 1 足金具 1、刀子 3	×		1366708
127	鹿 島	21号	〃	円	横穴式石室 鐵鏹 16(14?) 直刀 1、小刀 1、刀子 1	○	◎妻、 長頸瓶	1366709
128	鹿 島	24号	川本町木田字鹿島	円	横穴式石室 鐵鏹 28、直刀 2、小刀 1、 刀子 1、金環 3	×		1366710
129	鹿 島	27号	〃	円	横穴式石室 鐵鏹 8(6?)	×	◎妻、 环	1366711
130	鹿 島	13号	川本町木田字台	円	横穴式石室 鐵鏹 15(13?) 直刀 1、鍔 1、刀子 2、鍔 1、金環 4	×		1366712
131	鹿 島	25号	川本町木田字鹿島	円	横穴式石室 鐵鏹 3	×		1366713
132	見 目	1号	川本町田中字見目	円	横穴式石室 鐵鏹 19、銅製八角鍤鉗、青金 具 2、刀子 2、鍔 1、鍔 1、 耳環 8、ガラス玉 90、瑪瑙 2	○		2546714
133	見 目	2号	川本町田中字見目	円	横穴式石室 鐵鏹 4	○		2546715
134	若小玉八幡山	行田市藤原町	円	横空式石室	鐵鏹 8(9?)、柄頭 1、輪 足金具 1、弓引 1、鍔 6、 銅鏡 1、棺座金具 1、銅瓶 10、漆棺片 8	×	◎長頸壺	2316801
135	埼 玉 鑿 荷 山	行田市埼玉	前方後円	第1、礎床(第1主体) 第2、粘土 第3、	鐵鏹 141、環状乳 頭文帶神獸頭、直刀 5、鍔 2、 (辛亥銘鉄劍合む)、鍔 2、 挂甲 1、刀子 2、鍔 1、 鉄斧 2、鐵鏹 1、鉄錐 2、鍔	○	◎坏、有蓋 高坏、輪、劍 ◎劍、壺、 环	2416802

No.	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 遺 物 (数量)	墳 種	土 器	文 論	
					子 1、砾石 1、核 1 (核柄 金具 17、砾 1 对) 鎏 1、壹 鏡 1 对、鍍具 3、馬古葉 3 三振輪 1、雲珠 1、辻金具 3 盾牌金具 20、辻金具 14、鎧 環 2、硬玉製勾玉 1、帶金 具 1 (鍍具 1、紀尾 2、鈎 板 5、鈎 1) (第 2 主体) 鐵鎌 9、直刀 2 劍 1、鐵鍔 1、挂甲 1、劍 1、辻金具 6、鍍具 4				
136	大 日 墓	行田市佐間	円	粘 土 棚 2 箱式石棺 1	(第 1 粘土棚) 鐵鎌束、直 刀 1、刀子 2、人骨、齒 (第 2 粘土棚) 鐵鎌束、刀 子 2、鐵製留金具。 (箱式石棺) 米	○	203	6803	
137	大 稲 荷 2 号	行田市須賀	円	木 棺 直 鋸	鐵鎌 1、劍 1、刀子 1、直刀 1			147	6804
138	小 見 真 觀 寺	行田市小見	前方後円	横穴式 石室 2	(軸部石室) 鐵鎌一柄、劍 角付首、挂甲小札一括、金 環、頭顱大刀、手頭大刀、刀 子残欠、有蓋脚付銅鏡、木片			236	6805
139	酒 卷 6 号	行田市酒卷	帆立貝式	横穴式石室	鐵鎌	○		268	6806
140	酒 卷 1 号	〃	前方後円	横穴式 石室 2	(1 号石室) 鐵鎌、鉄梯、刀子 (2 号石室) 鐵鎌、直刀、刀子 金環	○	②長頸壺、 平、瓶	273	6807
141	酒 卷 2 号	〃	円	横穴式石室	鐵鎌、管玉	×	②坏	273	6808
142	酒 卷 3 号	〃	円	横穴式石室	鐵鎌、刀子、人骨	×		273	6809
143	地 藏 墓	行田市藤原町	方	横穴式石室	鐵鎌片	×	②片	273	6810
144	埼 玉 将 軍 山	行田市埼玉	前方後円	横穴式石室	鐵鎌束、杏葉、辻金具、輪鋸、 銅鏡、水晶製三輪玉、變形文 鏡、石製皿、挂甲小札一括、 青断片、襯頭大刀、蛇行状鐵 器、鉢、石突、有蓋脚付銅 鏡、無蓋銅鏡		②高坏	273	6811
145	永 明 寺	羽生市下村君	前方後円	不 明	鐵鎌、耳環 1、鐵鍔 1、衝角付 首 1、挂甲小札一括、直刀片、 刀子片、雲珠、粉、壹、鎧環、 鐵地金銅張紙留金具	○		90	7001
146	内牧塚内 4 号	春日部市内牧 字塚内	方	粘 土 棚 3 木 壤 棚 1	第 1 施設(粘)：ガラス小玉 6、鉄片 第 2 施設(粘)：(桿外) 直刀 2 第 3 施設(粘)：鐵鎌 30 枚本 第 4 施設(木)：直刀 1、鐵 鎌 1、鉄片、ガラス小玉 26	○	②瓶	211-7601 273	
147	つかのこし	岩槻市馬込字一番	円?	横穴式石室	鐵鎌 6、直刀 4、金環 2	×	②長頸壺、 环	279	7701

No.	名 称	所 在 地	墳 形	内部主体	出 土 遺 物 (数量)	埴 輪	土 器	文 献
148	ささら 3号	速田市東	円	横穴式石室	鐵錆3、直刀1、刀子2、耳環5	×	◎提瓶	2788201
149	十三塚	速田市閑戸	円	横穴式石室	鐵錆多數、直刀2、刀子2、滑石製勾玉	×	◎長颈壺、环	768202
150	日沼 8号	杉戸町日沼字前	円	粘土椁 2	(第1主体)鐵錆3、鐵環2、ガラス小玉34 (第2主体)直刀1	×		2618901
151	日沼 9号	*	円	木 崩 横	鐵錆30余(19)、直刀1、刀子1、鑰子1、鐵製飾金具1、鈴舌繋3、銅鏡1、土金具(留金具)9、黃金具3	×	◎壺	2618902
152	日沼 6号	*	円	横穴式石室	鐵錆、刀子、金環			798903

付 文 献 一 覧

1983年(昭和59年)3月現在の埼玉県における古墳関係の文献を年代順に挙げた。原則として著(編)者、年次、題名、書名、発行者の順である。1~7章の引用・参考文献で上記以外のものも年次毎に挿入し、※をつけた。

- 1 日本考古学会 1899 「武藏大宮郷の発見品」 『考古学雑誌』第3巻第2号
- 2 大野延太郎 1899 「武藏北足立郡小見ノ古墳」 『東京人類学雑誌』第14巻第156号
- 3 柴田常恵 1906 「武藏北埼玉郡埼玉村将军塚」 『東京人類学雑誌』20—231
- 4 和田千吉 1909 「武藏國川田谷の古墳發掘」 『考古界』第8巻第4号
- 5 岩井石泉 1929 「北葛飾郡の日沼古墳について」 『埼玉史談』第1巻第2号
- 6 柴田常恵 1935 「八幡山古墳」 『埼玉史談』第6巻第5号
- ※7 和田清・石原道博編訳 1951 『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波文庫
- 8 柴田常恵 1951 『埼玉県史』第1巻 先史・原史時代 埼玉県
- 9 遠山荒次 1953 「北足立郡大石村の漢式鏡」 『埼玉史談』第7巻第2号
- 10 柳田敏司 1953 『武藏緑荷塚発掘調査概要報告』 大宮市教育委員会
- 11 小泉 功 1956 「朝霞町岡字台の古墳調査略報」 『埼玉考古』第2号 埼玉考古学会
- 12 小峰啓太郎 1956 「青島第12号墳の発掘概報」 『台地』創刊号 台地研究会
- 13 埼玉県教育委員会 1956 『古墳調査報告書』第1編一本庄及び児玉郡の古墳調査
- 14 村井嵩雄 1956 「武藏野国川田谷熊野神社境内所在の古墳」 『考古学雑誌』第41巻第3号 日本考古学会
- 15 大塚初重 1957 「埼玉県北葛飾郡杉戸町瓢箪塚古墳」 『日本考古学年報』5 日本考古学会
- 16 金谷克己 1957 「武藏国児玉郡美里村川輪発見の埴輪壹」 『上代文化』第27輯 国学院大学考古学会
- 17 亀倉貞雄 1957 「埼玉県秩父市金星古墳発掘報告」 『埼玉研究』創刊号 埼玉県地城研究会
- 18 埼玉県教育委員会 1957 『古墳調査報告書』第2編—秩父市および秩父郡古墳調査一
- 19 柳田敏司 1957 「滝馬室浅間塚調査概報」 『武藏野史談』第3巻第4号
- 20 小沢国平 1958 「児玉町庚申塚古墳発掘調査記録」 児玉町教育委員会
- 21 中川成夫・川村喜一・小高清次・前田碧 1958 「埼玉県大里郡花園村の考古学的調査」 『史苑』第18巻第2号 立教大学史学会
- 22 柳田敏司 1958 「流馬室の一古墳」 『若木考古』第50号 国学院大学考古学会
- 23 所沢市 1958 『所沢市史』
- 24 埼玉県教育委員会 1959 『古墳調査報告書』第3編—南埼玉郡・北葛飾郡・岩槻市・春日部

市の古墳調査—

- ※25 倉野憲司・武田祐吉校註 1958 「古事記祝詞」 『日本古典文学大系』1 岩波書店
- ※26 秋本吉郎校註 1958 「風土記」 『日本古典文学大系』2 岩波書店
- 27 大塚初重 1959 「埼玉県秩父市原谷第1・第4号墳」 『日本考古学年報』8
- 28 柳田敏司・金井塙良一 1959 「宮登古墳の発掘」 鴻巣市教育委員会
- 29 大塚初重 1960 「埼玉県川口市高橋荷古墳」 『日本考古学年報』9 日本考古学協会
- 30 埼玉県教育委員会 1960 『古墳調査報告書』第4編一大里郡・熊谷市・深谷市の古墳調査一
- 31 田中一郎 1960 「新町古墳の調査報告—埼玉県入間郡坂戸町字新町一」 『考古学雑誌』第45卷第4号 日本考古学会
- 32 柳田敏司・吉田金一 1960 『八重塚古墳発掘報告』 浦和第一女子高校郷土クラブ
- 33 金井塙良一 1961 『南中学校校庭内古墳の発掘』 東松山市文化財調査報告第1集 東松山市教育委員会
- 34 埼玉県教育委員会 1961 『古墳調査報告書』第5編 一入間地区的古墳調査一
- 35 柳 進 1961 『児玉町八幡山埴輪焼場跡発掘報告書』 児玉高校
- 36 金井塙良一編 1962 『三千塚古墳群発掘調査一中間報告一』 三千塚古墳群調査会
- 37 柳田敏司 1962 「おどる埴輪を出土した前方後円墳について」 『埼玉研究』第6号 埼玉県地域研究会
- 38 朝霞町教育委員会 1963 『一夜塚・格塚・浜崎古墳群』 朝霞の文化財第1集
- 39 小沢国平 1963 a 「岡部山崎山遺跡発掘」 『埼玉考古』復刊第1号 埼玉考古学会
- 40 小沢国平 1963 b 「円墳大塚古墳」 『埼玉県指定文化財調査報告書第2集 埼玉県教育委員会
- 41 小沢国平 1963 c 「方墳行人塚古墳」 『埼玉県指定文化財調査報告書第2集 埼玉県教育委員会
- 42 小沢国平 1963 d 「塙古墳群」 『埼玉県指定文化財調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
- 43 小沢国平 1963 e 「雷電塚古墳」 『埼玉県指定文化財調査報告書』第3集 埼玉県教育委員会
- 44 栗原文藏 1963 a 「古代の行田」
- 45 栗原文藏 1963 b 「古墳壁画の新資料——埼玉県行田市地蔵塚古墳」 上代文化第33輯 国学院大学考古学会
- 46 小泉功他 1963 『福岡町川崎横穴群発掘調査報告書』 川崎横穴群発掘調査団
- 47 小出義治 1963 「埼玉県どうまん塚古墳調査の概要」 『国学院高校紀要』 国学院高校
- 48 埼玉県教育委員会 1963 『古墳調査報告書』第6編 一北埼玉地区一
- 49 柳田敏司 1963 「木庄市公卿塚と石製模造品」 『埼玉考古』復刊第1号 埼玉考古学会
- 50 熊谷市 1963 『熊谷市史』前篇
- 51 小沢国平 1964 「江南村発現山埴輪蒸跡」 『台地研究』No.14 台地研究会
- 52 小沢国平・柳田敏司 1964 『御山埴輪蒸跡遺跡』 深谷市教育委員会

- 53 金井塙良一・小峯啓太郎 1964 「背塙古墳」 東松山市文化財調査報告第3集 東松山市教育委員会
- 54 栗原文藏・塙野博 1964 『斎条5号古墳発掘調査報告』 行田市文化財調査報告第1集 行田市教育委員会
- 55 小泉 功 1964 「川越市名細大字小堤の山神古墳について」 『台地研究』 №14 台地研究会
- 56 埼玉県教育委員会 1964 『古墳調査報告書』 第7編一北足立地区一
- 57 塙野 博 1964 「鴻巣市笠原発見の埴輪」 『埼玉研究』 第9号 埼玉県地域史研究会
- 58 東京大学考古学研究室 1964 「埼玉県宮前村の古墳調査」 『考古学雑誌』 第49巻第4号 日本考古学会
- 59 柳田敏司 1964 a 「秩父市大野原出土の蕨手刀」 『埼玉考古』 第2号 埼玉考古学会
- 60 柳田敏司・早川智明・庄野清寿 1964 『杉戸町日沼遺跡』 杉戸町文化財調査報告第1集 杉戸町教育委員会
- 61 柳田敏司 1964 b 「埼玉県児玉郡生野山將軍塙古墳発掘調査概報」 『上代文化』 第34輯 国学院大学考古学会
- 62 大塚初重 1965 「埼玉県川口市高橋荷古墳」 『日本考古学年報』 13 日本考古学協会
- 63 埼玉県教育委員会 1965 『古墳調査報告書』 第8編一比企地区一
- 64 坂詰秀一・久保常晴 1965 「埼玉県野原古墳群の調査一北武藏における群集墳の一様相一」 『第31回日本考古学協会総会研究発表要旨』 日本考古学協会
- ※65 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 1965 「日本書紀」下 『日本古典文学大系』 68 岩波書店
- 66 柳田敏司・早川智明 1965 「朝霞町八塙古墳発掘調査報告」 『埼玉考古』 第3号 埼玉考古学会
- 67 石井昌国 1966 『蕨手刀』
- 68 県立深谷商業高校地盤研究部 1966 「西山古墳群(第5号墳)発掘調査」 『あゆみ』 第15号 深谷商業高校
- 69 塙野 博 1966 「鴻巣市箕田古墳群箕田3号墳の調査」 『埼玉研究』 第11号 埼玉県地域研究会
- ※70 甘粕館・久保哲三 1966 「古墳文化の地域的特色」 『日本の考古学』 IV 河出書房新社
- ※71 西川 宏 1966 「武器」 『日本の考古学』 V 河出書房新社
- ※72 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 1967 「日本書紀 上」 『日本古典文学大系』 67 岩波書店
- 73 大塚 実 1967 「東松山市雷電山古墳出土の壺形土器」 『上代文化』 第37輯 国学院大学考古学会
- 74 金井塙良一 1967 「後期古墳研究の諸問題ー東松山市とその周辺の古墳群を中心としてー」 『埼玉考古』 第5号 埼玉考古学会
- 75 塙野 博 1967 「古墳の外部施設—特に小規模古墳の周堀—」 『埼玉考古』 第5号 埼玉

考古学会

- 76 早川智明 1967 「十三塚古墳」 『荒跋』第3号
- 77 柳田敏司 1967 「埼玉における古墳の諸様相」 『埼玉考古』第5号 埼玉考古学会
- 78 柳田敏司編 1967 『とやま古墳』 埼玉県教育委員会
- 79 蛙瓜良祐 1968 「杉戸町日沼古墳群4・5・6号墳発掘調査報告」 『埼玉考古』第6号 埼玉考古学会
- 80 金井塙良一 1968 「東松山市附川7号墳の石室」 『台地研究』No.18 台地研究会
- 81 金井塙良一編 1968 『柏崎古墳群』 東松山市教育委員会
- 82 塩野博 1968 「川田谷の遺跡と遺物」 桶川町文化財調査報告書 桶川町教育委員会
- 83 菅谷浩之 1968 「大御堂稻荷塚古墳調査概要」 『第1回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 84 中島利治 1968 「東松山市高坂諫訪山古墳群」 『第1回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 85 苛谷浩之・増田逸朗・駒宮史朗・今泉泰之 1968 『青柳古墳群発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第19集 埼玉県遺跡調査会
- 86 増田逸朗 1968 「川本村箱崎古墳群の発掘」 『第1回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 87 大宮市 1968 『大宮市史』第1巻 考古編
- 88 金井塙良一 1969 「附川古墳群」 『第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 89 栗原文藏 1969 「稻荷山古墳」 『第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 90 栗原文藏・塩野博 1969 「埼玉県羽生市永明寺古墳について」 『上代文化』第38輯 国学院大学考古学会
- 91 埼玉県教育委員会 1969 『さきたま風土記の丘稻荷山古墳発掘概報』
- 92 塩野博 1969 「桶川町川田谷西台遺跡の調査」 『第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 93 苛谷浩之 1969 a 「神川村城戸野古墳群調査概要」 『第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 94 菅谷浩之 1969 b 『本庄市塙合古墳調査報告書』 本庄市文化財調査報告第8集 本庄市教育委員会
- 95 金井塙良一 1969 『黒岩横穴群』 吉見村教育委員会
- 96 谷井彪 1969 「川越市岸町の一横穴」 『埼玉研究』第17号 埼玉県地域研究会
- 97 増田逸朗 1969 「国道254号線の二遺跡」 『第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 98 柳田敏司・塩野博 1969 『川田谷ひさご塚古墳』 桶川町文化財調査報告書 桶川町教育委員会
- 99 金井塙良一 1970 「岩花遺跡・天神裏古墳群」 『第3回遺跡発掘調査報告会発表要旨』

埼玉考古学会

- 100 金井塙良一編 1970 『諏訪山古墳群(第1次発掘調査報告書)』 東洋大学考古学研究会発掘調査報告第1集 考古学資料刊行会
- 101 駒宮史朗 1970 「狭山市今宿遺跡の調査」 『第3回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 102 栗原文蔵 1970 「行田市埼玉古墳群概報」 『埼玉考古』第8号 埼玉考古学会
- ※103 甘粕健 1970 「古墳文化名説一闇東」 『新版考古学講座』5 原史文化(下) 雄山閣
- 104 塩野 博 1970 「桶川町川田谷城山古墳の調査」 『第3回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 105 塩野博・増田逸朗 1970 「西台遺跡の発掘調査」 桶川町文化財調査報告Ⅳ 桶川町教育委員会
- 106 菅谷浩之 1970 a 「大御堂稻荷塚古墳調査報告書」 上里町教育委員会
- 107 菅谷浩之 1970 b 「神川村十二ヶ谷戸・青柳古墳群調査概要」 『第3回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 108 菅谷浩之 1970 c 「壺形土器を出土した公卿塚について」 『埼玉研究』第19号 埼玉県地域研究会
- 109 東洋大学考古学研究会 1970 「東松山市諏訪山古墳群の調査」 『第3回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 110 柳田敏司他 1970 『浜崎遺跡発掘調査報告』 埼玉県遺跡調査会報告第10集 埼玉県遺跡調査会
- 111 青木義脩 1971 「浦和市土合地区の古墳について」 『埼玉研究』第22号 埼玉県地域研究会
- 112 伊藤和彦 1971 「戸田市南原(高知原)遺跡の調査」 『第4回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 113 金井塙良一編 1971 『附川古墳群』 東松山市文化財調査報告第8集 東松山市教育委員会
- 114 埼玉県教育委員会 1971 『鹿島古墳群発掘調査概報』
- 115 栗原文蔵 1971 「埼玉古墳群の古航空写真」 『埼玉考古』第9号 埼玉考古学会
- ※116 石岡久夫・川村自行 1971 『弓道入門』
- 117 菅谷浩之 1971 「美里村雷電神社裏古墳調査報告」 『埼玉研究』第21号 埼玉県地域研究会
- 118 芹沢範子・長内順子 1971 「穴八幡古墳(比企郡小川町)の石室」 『台地研究』No.19 台地研究会
- 119 増田逸朗 1971 a 『横塚山古墳』 埼玉県遺跡調査会報告書第9集 埼玉県遺跡調査会
- 120 増田逸朗 1971 b 「児玉郡神川村北塚原古墳群」 『第4回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 121 三友国五郎他 1971 「鹿島古墳群発掘調査の概要」 『第4回遺跡発掘調査報告会発表要

旨』 埼玉考古学会

- 122 羽生市 1971 『羽生市史』上巻
- 123 甘粕 健 1972 「牛塚古墳」 『川越市史』第1巻 原始・古代編 川越市
- 124 甘粕健・小泉功 1972 「西原古墳」 『川越市史』第1巻 原始・古代編 川越市
- 125 伊藤和彦 1972 『南原(高知原)遺跡第2・3次発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告Ⅳ
戸田市教育委員会
- 126 小泉 功 1972a 「下小坂古墳群」 『川越市史』第1巻 原始・古代編 川越市
- 127 小泉 功 1972b 「小堤山神古墳」 『川越市史』第1巻 原始・古代編 川越市
- 128 小泉 功 1972c 「三変稻荷神社古墳」 『川越市史』第1巻 原始・古代編 川越市
- 129 金井塚良一編 1972 『附川古墳群』 考古学資料刊行会
- 130 駒宮史朗 1972 「鹿島古墳群第2次調査」 『第5回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉
考古学会
- 131 四分一実 1972 「古墳からみた古代熊谷」 『いぶき』第6・7号 本庄高校考古学部
- 132 城近憲市・三島剛 1972 「狹山市発見の一古墳」 『埼玉考古』第10号 埼玉考古学会
- 133 津田福治 1972 「吉見村久米田遺跡」 『第5回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古
学会
- ※134 伊達宗泰他 1972 『鳥土塚古墳』
- 135 小泉功他 1972 『福岡町川崎横穴群発掘調査報告書』 地土史料第15集 埼玉県入間郡福岡
町教育委員会
- 136 柳田敏司他 1972 『鹿島古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集 埼玉県教育委員会
- 137 横川好富 1972 「中井1号墳発掘調査報告」 『北本市の埋蔵文化財』 北本市教育委員会
- 138 小沢国平・田中一郎他 1973 『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧(昭和26年~昭和40年)』 埼
玉県埋蔵文化財調査報告書第2集 埼玉県教育委員会
- 139 金井塚良一他 1973 「吉見町かぶと塚古墳の調査」 『第6回遺跡発掘調査報告会発表要
旨』 埼玉考古学会
- 140 貞末亮司 1973a 「熊谷市瀬戸山遺跡の調査」 『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
埼玉考古学会
- 141 貞末亮司 1973b 「北峯古墳」 『日本考古学年報』24 日本考古学協会
- 142 塩野 博 1973 「聖天塚古墳」 『日本考古学年報』24 日本考古学協会
- 143 菅谷浩之 1973a 「青柳古墳」 『日本考古学年報』24 日本考古学協会
- 144 菅谷浩之他 1973b 『青柳古墳群発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第19集 埼玉県
遺跡調査会
- 145 菅谷浩之・駒宮史朗 1973 「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」 『第6回遺跡発
掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 146 柳田敏司・三友国五郎 1973 『台耕地稻荷塚古墳発掘調査報告書』 大宮市文化財調査報告
第6集 大宮市教育委員会

- 147 栗原文藏・小林重義 1974 「行田市須賀大稻荷古墳について」 『埼玉考古』第12号 埼玉考古学会
- 148 栗原文藏・小泉功・谷井彪・今泉泰之・野部徳秋 1974 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』 南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影 埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
- 149 栗原文藏・今泉泰之・谷井彪 1974 a 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』 駒嶋 埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 埼玉県教育委員会
- 150 栗原文藏・今泉泰之・谷井彪 1974 b 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』 田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川 埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会
- 151 菅谷浩之・駒宮史朗 1974 「熊谷市万吉下原遺跡(1次～2次)調査概要」 『第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 152 谷井 彪 1974 「東松山市舞台遺跡第二次調査」 『第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- ※153 常川秀夫 1974 『上大曾古墳群』
- ※154 赤星直忠 1974 『尾根山古墳群』 神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告6
- 155 村井嵩雄 1974 「街角付肯の系譜」 『東京国立博物館紀要』第9号 東京国立博物館
- 156 栗原文藏・田部井功 1974 「丸墓山・稻荷山古墳周囲発掘調査概要」 『資料館報』No.5 埼玉県立さきたま資料館
- 157 植沼幹夫他 1975 『川口市史調査概報』第2集 川口市
- 158 金井塙良一・渡辺久生 1975 「東松山市西原古墳群の調査」 『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- ※159 笹山晴生 1975 『古代国家と軍隊』 中公新書
- ※160 沼沢豊他 1975 「椎名崎古墳群」 『千葉東南部ニュータウン』
- ※161 松村一昭 1975 『赤堀峯岸山の古墳』1
- ※162 伊達宗泰他 1975 『天理市石上・豊田古墳群』1
- 163 亀倉貞雄 1975 『飯塚・招木古墳群』 秩父市文化財調査報告書(昭和48・49年度) 秩父市教育委員会
- 164 栗原文藏 1975 「さきたま古墳群の問題点」 『考古学ジャーナル』No.112 ニュー・サイエンス社
- 165 栗原文藏・田部井功 1975 a 「行田市さきたま古墳群の調査」 『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 166 栗原文藏・田部井功 1975 b 「天王山・梅塚古墳他周囲発掘調査概要」 『資料館報』No.6 埼玉県立さきたま資料館
- 167 金井塙良一 1975 『吉見百穴墓群の研究』 校倉書房
- 168 小林茂・猪野幸夫 1975 「吉田町安中第1号古墳の調査」 『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会

- 169 塩野博・小久保徹 1975a 「花園村黒田古墳群の調査」『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 170 塩野博・小久保徹 1975b 「黒田古墳群」花園村黒田古墳群調査会
- 171 菅谷浩之・坂本和俊 1975 「美里村長坂坐天塚古墳の調査」『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 172 菅谷浩之・笹森健一 1975 「広木大町古墳群発掘調査概要」美里村教育委員会
- 173 田口一郎他 1975 「見玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究」『いぶき』第8・9合併号 本庄高校考古学部
- 174 増田逸朗 1975a 「岡部町千光寺遺跡の調査」『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 175 増田逸朗 1975b 『千光寺』埼玉県遺跡調査会報告第27集 埼玉県遺跡調査会
- 176 甘粕 健 1976 「三千塚古墳に関する覚書」『北武藏考古学資料図鑑』校倉書房
- 177 今泉泰之他 1976 『寺山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第9集 埼玉県教育委員会
- 178 金井塚良一編 1976 『花見堂』嵐山町教育委員会
- 179 金井塚良一・渡辺久生 1976 『西原古墳群』東松山市埋文調査会
- 180 栗原文藏 1976 『埼玉古墳群とその周辺』埼玉県立さきたま資料館
- 181 菅谷浩之 1976 「長沖古墳群第一次発掘調査」
- 182 菅谷浩之・笹森健一 1976 「美里村広木大町古墳群の調査」『第9回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 183 谷井彪・井上栄 1976 「東松山市舞台遺跡(3次)の調査」『第9回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 184 並木 隆 1976 「木庄村旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 185 増田逸朗 1976 「美里村塚本山古墳群の調査」『第9回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 186 谷井彪・小久保徹 1976 『日本住宅公園(川越・鶴ヶ島地区)埋蔵文化財調査報告書 鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査会報告書第8集 埼玉県教育委員会
- 187 水島治平他 1976 『本庄市史』資料編 本庄市
- ※188 井上光貞・関 晃・土田直鏡・青木和夫校注 1976 『律令』日本思想大系3 岩波書店
- ※189 東京国立博物館 1976 『日本の武器武具』
- ※190 松村一昭 1976 『赤堀村峯岸山の古墳』2
- 191 鈴木敏弘 1976 「北武藏の須恵器概観」『北武藏考古学資料図鑑』校倉書房
- 192 井上 駿 1977 「東松山市桜山古墳群の調査」第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 193 小川良祐・笹森健一他 1977 『あたご山古墳・南河原条里遺跡』あたご山古墳発掘調査会・南河原条里遺跡調査会

- ※194 松村一昭 1977 『赤堀村地蔵山の古墳』 1
- 195 栗原文藏 1977 「将軍山古墳」 『第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 196 塩野 博 1977 「埼玉県南埼玉郡菖蒲町下柏間所在天王山塚古墳について」 『埼玉考古』 第16号 埼玉考古学会
- 197 栗原文藏・佐藤忠雄 1977 『水窪遺跡の調査(第二次)』 岡部町教育委員会
- 198 菅谷浩之 1977 a 「児玉町長沖古墳群の調査」 『第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 199 菅谷浩之 1977 b 「長沖古墳群第2次発掘調査」 児玉町教育委員会
- 200 増田逸朗・小久保徹 1977 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 塚本山古墳群』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
- 201 小川良祐・長谷川勇他 1978 『御手長山古墳発掘調査報告書』 本庄市教育委員会
- 202 金井塚良一 1978 「原始・古代の吉見」 『吉見町史』 上巻 吉見町
- 203 栗原文藏・斎藤国夫 1978 a 「行田市№40遺跡の調査」 『第11回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 204 栗原文藏・斎藤国夫 1978 b 「大日種子板石塔婆および古墳の調査」 行田市文化財調査報告書第4集 行田市教育委員会
- 205 亀井正道 1978 「発る埴輪出土の古墳とその遺物」 『ミージアム』 第310号 東京国立博物館
- 206 小久保徹・柿沼幹夫 1978 『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』 東谷・前山2号墳・古川塚』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
- 207 塩野博・駒宮史朗 1978 『川田谷古墳群』 桶川市文化財調査報告第10集 桶川市教育委員会
- 208 菅谷浩之 1978 『日の森遺跡』 美里村教育委員会
- 209 田中一郎他 1978 a 『毛呂山町史』 毛呂山町
- 210 田中一郎他 1978 b 『坂戸市歴史散歩』 坂戸市教育委員会
- 211 田部井功 1978 『楊井薬師寺古墳発掘調査報告書』 昭和52年度熊谷市埋蔵文化財調査報告熊谷市教育委員会
- 212 中川徳治・坂本和俊・安藤文一・山形洋一 1978 「春日部市内牧塚内4号墳の調査」 『第11回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 213 柳田城司・塩野博他 1978 『馬室埴輪窓跡群』 埼玉県埋蔵文化財調査報告第7集 埼玉県教育委員会
- 214 小林茂他 1978 『秩父古墳調査中間報告』 歴史民俗研究会特別委員会
- 215 金井塚良一他 1978 『龍の城横穴墓群』 所沢市教育委員会
- 216 鈴木 純他 1978 『塚本山古墳群分布調査報告』 『いぶき』 第10号 本庄高校考古学部
- 217 小川良祐他 1978 『八幡山古墳石室実測調査概報』 『資料館報』 №9 埼玉県立さきたま資料館

- ※218 松村一昭 1978 『赤堀村地蔵山の古墳』2
- 219 金井塚良一 1979 a 「比企地方の前方後円墳—北武藏の前方後円墳の研究(1)一」 『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第1号 埼玉県立歴史資料館
- 220 金井塚良一 1979 b 「渡米系氏族壬生吉志氏の北武藏移住」 『埼玉県史研究』第3号 埼玉県史編纂室
- 221 塩野 博 1979 「巨大古墳は何を語るか—関東地方」 『歴史読本』昭和54年5月号 新人物往来社
- 222 読売新聞社浦和支局編 1979 『辛亥銘鉄劍と埼玉の古墳群』 読売新聞社浦和支局 (増補版1980)
- 223 金井塚良一 1979 c 「野本將軍古墳の謎」 『歴史読本』昭和54年5月号 新人物往来社
- 224 埼玉県文化財保護課 1979 『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』(昭和41年度～昭和45年度) 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第8集 埼玉県教育委員会
- 225 鈴木敏昭・中島宏 1979 「台耕地遺跡の調査」 『第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 226 鈴木徳雄 1979 「長沖古墳群(第4次)の調査」 『第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 227 野村侃司・赤石光賛 1979 『殿山古墳・殿山遺跡』 上尾市文化財調査報告第6集 上尾市教育委員会
- 228 市川 修 1980 「北塚屋遺跡の調査」 『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 229 柳田敏司他編 1980 『鉄剣を出した国』 学生社
- 230 市川修・小渕良樹・中村倉司 1980 『広木大町古墳群』 埼玉県遺跡調査会報告第40集 埼玉県遺跡調査会
- 231 譲崎一・中村倉司 1980 『延喜神社前遺跡・一本松古墳』 埼玉県遺跡調査会報告第39集 埼玉県遺跡調査会
- 232 小川良祐他 1980 『八幡山古墳石室復元報告書』 埼玉県教育委員会
- 233 金井塚良一 1980 a 「入間地方の前方後円墳—北武藏の前方後円墳の研究(2)一」 『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第2号 埼玉県立歴史資料館
- 234 金井塚良一 1980 b 「埼玉古墳群の形成」 『文学』第48巻第4号 岩波書店
- 235 金井塚良一 1980 c 「古代東国史の研究—船荷山古墳出現とその前後」 埼玉新聞社
- 236 小久保徹 1980 「三ヶ尻林遺跡の調査」 『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 237 塩野 博 1980 「埼玉の古墳」 『埼玉の文化財』第20号 埼玉県文化財保護協会
- 238 寺社下博 1980 a 「中条遺跡(遺塚古墳)の調査」 『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 239 寺社下博 1980 b 「三ヶ尻80古墳」 昭和54年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育

育委員会

- 240 菅谷浩之他 1980 『長沖古墳群』 児玉町文化財調査報告書第1集 児玉町教育委員会
- 241 庄野晴寿・剣持和夫他 1980 『白幡木宿遺跡』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第29集 埼玉県教育委員会
- 242 斎藤忠他 1980 『埼玉稻荷山古墳』 埼玉県教育委員会
- 243 田中一郎 1980 『金崎古墳群』 『埼玉県指定文化財報告書第12集』 埼玉県教育委員会
- 244 高山清司・小倉均 1980 『かね山古墳周辺発掘調査報告書』 浦和市教育委員会
- 245 水村孝行・井上豪・今井宏 1980 『日本住宅公団(高坂丘陵地区)埋蔵文化財発掘調査報告
Ⅳ 根平』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会
- 246 山崎 武 1980 『生出塚遺跡の調査』 『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古
学会
- 247 今泉泰之他 1981 『割山遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 深谷市割山遺跡調査会
- 248 小久保徹・利根川京彦 1981 『日本住宅公団(高坂丘陵地区)埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ
桜山古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 249 塩野博他 1981 「関東における古墳出現期の諸問題—埼玉県」 『日本考古学協会昭和56年
度大会発表要旨』 日本考古学協会
- 250 吉川国男他 1981 『北武藏の古墳』 『歴史手帖』9巻5号 名著出版
- 251 寺社下博 1981 『鎧塚古墳』 熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
- 252 鈴木徳雄 1981 『深町・城の内遺跡』 深町遺跡調査会
- 253 金井塙良一他 1981 『東松山市史』資料編第1巻 東松山市
- ※254 原島利枝 1981 『御部入4号墳』 『群馬県史』資料編3
- 255 塩野 博 1981 「見目古墳群とその遺物」 『埼玉考古』19号 埼玉考古学会
- 256 埼玉県文化財保護課 1981 『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査報
告書第10集 埼玉県教育委員会
- 257 斎藤国夫 1981 『行田市No.41遺跡・さきたま古墳群周辺遺跡群発掘調査報告書』 行田市
文化財調査報告書第11集 行田市教育委員会
- 258 塩野博他 1981 『戸田市史』資料編 戸田市
- 259 増田逸朗・水村孝行・中島宏 1981 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 清水谷・
安光寺・北坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 260 山崎武他 1981 『下間遺跡』 鴻巣市遺跡調査会報告書第1集 鴻巣市遺跡調査会
- 261 山崎武・若松良一他 1981 『生出塚遺跡』 鴻巣市遺跡調査会報告書第2集 鴻巣市遺跡調
査会
- 262 横川好富他 1981 『日沼8・9号墳』 杉戸町文化財調査報告書第3集 杉戸町教育委員会
- 263 新井端他 1982 『塩前遺跡発掘調査報告書』 江南村文化財調査報告第3集 江南村教育委
員会
- 264 岡本幸男 1982 『美里村志戸川遺跡群の調査』 『第15回遺跡発掘調査報告会発表要旨』

埼玉考古学会

- 265 亀倉貞雄・駒宮史朗 1982 『飯塚・招木古墳群発掘調査報告書』 飯塚・招木古墳群発掘調査会
- 266 小林 茂 1982 「古代の吉田——古墳時代——安中第1号古墳」 『吉田町史』 吉田町
- 267 埼玉県文化財保護課 1982 a 『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧 IV』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第11集 埼玉県教育委員会
- 268 埼玉県文化財保護課 1982 b 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(昭和55年度)』 埼玉県教育委員会
- 269 斎藤国夫 1982 『池守・小畠田・酒井古墳群——行田北西遺跡群発掘調査報告書——』 行田市文化財調査報告書第14集 行田市教育委員会
- 270 高橋俊男・田部井功 1982 『袋・台遺跡』 吹上町埋蔵文化財調査報告書 北足立郡吹上町教育委員会
- 271 田村 誠 1982 『神川村遺跡群発掘調査報告』 神川村教育委員会
- 272 利根川草彦 1982 『一般国道17号線深谷バイパス道路関係埋蔵文化財発掘調査報告』 新ヶ谷戸』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第9集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 273 山崎 武 1982 『鴻巣市生出塚遺跡(A地点)の調査』 『第15回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 274 埼玉県 1982 『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代
- 275 若松良一 1982 「菖蒲天王山塚古墳の造営時期と被葬者の性格について」 『土曜考古』 第6号 土曜考古学研究会
- 276 寺社下博 1983 『女塚』 熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
- 277 寺社下博 1983 『熊谷市大塚古墳の第1次調査』 『第16回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 278 小久保徹也 1983 『三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 279 藤原高志他 1983 『さら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』 国道122号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 280 岩槻市史編纂室 1983 「つかのこし古墳」 『岩槻市史』 考古資料編
- 281 今井宏他 1984 『屋田・寺ノ台』 関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 X VI集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 282 酒井清治他 1984 『台耕地』 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 X VII』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要

1983

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷 株式会社 誠美堂印刷所